

289-Kr6-2ㄅ



1200500732040



始



289

~~Ku95~~

Kr6

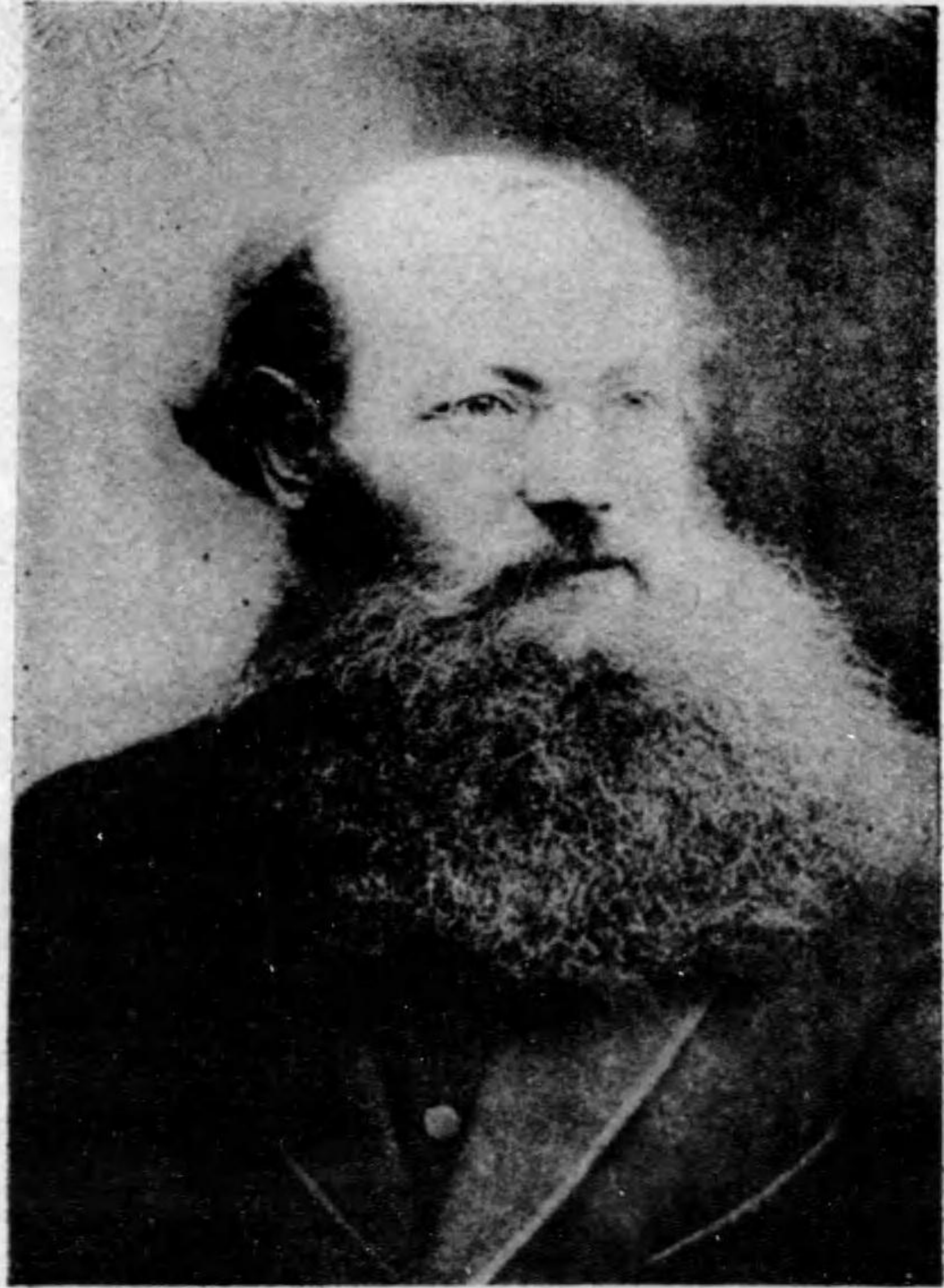
2



ク
ロ
ポ
ト
キ
ン
研
究

大
杉
榮
著





P. Kravtchenko



日本書志

大津榮



序

クロボトキンの著書には、三四百ページ以上のものだけでもちよつと十冊近くある。そのほかに小冊子が二三十はある。しかもその小冊子といふのが、いづれも皆な、大きな本と同じやうに四五年乃至七八年の研究と思索との結晶であるほかに、それを非常な苦心のもとに數十ページの中に書き縮めたものだ。クロボトキン自身も、實はこの小冊子の方がよつほど骨が折れてゐるといつてゐる。學問にはまるつきり素人の、そして大きな本など讀むひまのない勞働者のため、といふことがクロボトキンのこの苦心の目的であつた。従つてそのどの小冊子といへども、一つとして見のがしのできるものはない。その大がいは大きな本よりもかへつて重要なくらゐなのだ。片輪者の學者にとつては（學者といふ奴は西洋でも日本でも皆んな片輪者だ。殊に日本の學者などは、その片輪者の中にすらはいらんかも知れない）この素人のためといふことが何よりも面倒なのだ。一時は學者になつて見ようかといふ馬鹿げた考へを大切に、さういつた片輪者に

ばかり教へを受けて来た僕も、やつぱりその、片輪者の仲間にするもはいれない片輪者に仕込まれてしまった。

こないだ賀川豊彦君と會つて、僕の入獄中に出来た有象無象どもの無政府主義論、クロボトキン論を十ば一そくにしてやつつけるつもりだといふ話から、「これでも日本ではアナキズムのオーソリテイなんだからなあ」と大いに威張つて見たところが、「さうだ、少くとも古いことにおいてはね」と早速あべこべに一本やられた。

僕がクロボトキン大明神でおさまつてゐたのは、もう十年も十五年も昔のことだ。はたち前からクロのものを讀みだして、十年近い間クロかぶれしてゐた。少くとも書物の形で出たクロのものは片つ端から買ひ集めて讀みふけた。二度も三度も、四度も五度も、どうかすると六度も七度も、繰返し繰返し讀んだ。どんなことが、どの本の、どの邊に書いてあるか、といふことまでも大がいは知つてゐた。クロの著書全部のよほど詳しい索引が自然に、僕の頭の中にできあがつてゐた。

僕はこのクロかぶれのために、どれほど僕の知識的發達に、と共に僕の全人格的發達にも、利益をうけたか知れないが、それと同時にまた、どれほど損を蒙つたか知れない。そしてその損害

に氣がついたのは、やうやく二十七のときの、千葉監獄の獨房の中であつた。それ以來、僕はクロボトキンの書物には一切目をふれなかつた。クロのばかりぢやない、一切の無政府主義文書からできるだけ遠ざかることにきめた。そして、だだ手當り次第に、範圍にも順序にも全くおかまひなしに、主として社會學と生物學との、諸學者に親しんでゐた。

先きに「一時は學者になつて見ようかといふ馬鹿げた考へを大切にしてい」つたのは、そのときのことだ。クロボトキンから獨立しようと思つたのはいい。しかしその獨立をやはり書物でやらうと思つたのは、僕の天馬鹿だつたのだ。

が、おかげで、クロの書いたことは大がいに忘れてしまつた。無政府主義も大がいに忘れてしまつた。大骨折つて買ひ集めた無政府主義文書も、水難、火難、貸難、盜難、諸難にあつて全部なくしてしまつた。

お役人様や世間のお利口者共は、今でも僕を無政府主義者だと思ひこんでゐる。僕もまた、そいつ等にはさういつて嚇かしてやつてゐる。人のいやがることやこわがることを殊さらにいつたりしたりすることの好きなのが、僕のもつて生れた病氣なんだ。常に甚だ相濟まんと思ひながら、如何んとも仕方がない。で、せめてもの申譯にかうして白狀しておくが、僕は決してクロ大

明神のもうし兒でもなければ、またいはゆる無政府主義者などといふ至極量見の狭い狂信者でもない。ただちよつと氣違ひじみた一人の人間様であるだけのことだ。

その人間様がお氣に召さずに、世間の奴等は、寄つてたかつて撲殺しにかかった。殊に世間の奴等の阿呆と卑怯とを食ひものにしてゐる新聞雑誌どもは、その撲殺軍のお先棒に立つて騒ぎまはつた。

その新聞屋、雑誌屋がだ、圖々しいにもほどがある、世態人情が少々變はり、物騒な無政府主義がはやりものになつたとすると、急にビョコビョコ頭をさげて「どうぞ、先生」てなことやつて来る。

どいつでもこいつでも、僕のかういつた物のいひ方に、怒る奴は怒れ、笑ふ奴は笑へ。が、念のためにいつておくが、かういつた物のいひ方、少々氣違ひじみた人間様の言葉が、おかしかつたり癪にさはつたりするやうでは、無政府主義の精神はともわかりませんよ。クロボトキンの眞髓はとても擱めませんよ。

本書に収めたものは、いづれも皆な數ヶ年の間に、それぞれ何にかの事情に應じて発表したものである。従つてその間に連絡といふほどの連絡はないが、しかしその中のどれ一つを見ても、

クロボトキンの眞髓はたしかにしっかりと擱へてあるつもりだ。最後の二篇「クロボトキンの經濟學」と「クロボトキンの教育論」とは伊藤野枝の筆に成る。

大 杉 榮

目次

クロボトキン 總序	三
クロボトキンの生物學	七
クロボトキンの社會學 (上)	七
クロボトキンの社會學 (下)	二三
クロボトキンの經濟學	三九
クロボトキンの教育論	六六



クロボトキン 總序

— 無政府主義と近代科學 —

ダーキンを本當に知るには、その名著『種の起原』や『人間の由來』を讀むよりも、なによりもまづ『一博物學者の航海記』をひもとかなければならない。『種の起原』によつてあらゆる科學界から哲學界までをも一舉にして根本的に變革させた、ダーキンの生物學上及び地質學上の知識、というよりもむしろその全人格的基礎は、その二十三歳から二十七歳にわたる滿四ヶ年の世界一周の間にできあがつた。彼は一博物學者として軍艦ビイグルに便乗し、南アメリカ、南洋、オーストラリアの諸國諸島を遍歴踏渉した。そして、一人で各地の植物誌、動物誌、地質誌を調査研究した。この自分一人での實地にあつての調査研究といふことが、後年のダーキンをつくりあげたのだ。現に『種の起原』の中のダーキンも、『人間の由來』の中のダーキンも、その處

女著『航海記』の中に、またそれによつて始めて、その萌芽と發達のあととを十分うかがふことができる。もしこの航海がなかつたら、或はデアキンは、至極平凡な一田舎牧師として世を終つてしまつたかも知れないからだ。

クロボトキンを本當に知るのにも、やはりその名著の『パンの略取』や『相互扶助論』を読むよりも、なによりもまづその自叙傳『一革命家の思出』をひもとかなければならない。

この自叙傳の中で、私がいま特に注意したいのは、その第三章「シベリア」の卷だ。

デアキンの世界一周は、主として一博物學者としての、今日はここ、明日はかしこと、轉々として移つて行く、ほんの通り一ぺんの旅行に過ぎなかつた。もつともその間に、アメリカ・インディアンや東洋諸島の蠻人も會ひ、メキシコの革命騒ぎをも見、チリの鑛山勞働者にも接して、人間の生活の上に純真な人道的感情を養つてゐる。しかし彼は、その感情をどこまでも育てあげることせず、むしろその學說の「生存競争」でくまましてしまつた。

クロボトキンはその十九歳から二十五歳までの五ヶ年間を、コサツク士官として、シベリアで暮した。が、このコサツク士官として、といふのは、決して單なる一軍人としてではなく、むしろ一行政官、しかも社會改良の一委員としてであつた。彼は東シベリアの首府イルクウツクに着

くと共に、總督コルサコフの下に、參謀長クウケルの副官となつた。コルサコフはその部下に自由思想の人々をもつてゐることを誇りとするほどの人であつた。クウケルはまだ年三十五にも達しない若い將官で、その書齋にはロシアの最善の新聞雜誌と一緒にヘルツエンのロンドン版革命的文書の全集がそろつてゐた。

クウケル將軍はそのころ臨時にトランス・バイカリア縣知事の職につき、縣の首府のチクに行つた。そして、そこで彼は一刻の猶豫もなく、當時盛んに議論されてゐた大改革に身も魂もうちこんでしまつた。當時セント・ペテルスブルグの諸省は地方官憲に命じて、縣の行政や、警察の組織や、裁判所や、監獄や、追放制度や、町村自治などについて、ごく自由な基礎に基づいた根本的改革を施すことを求めてゐたのだ。

クウケルはベクシエンコ大佐といふ聰明な、かつ實際的な人と、誠實な數名の文官との輔佐の下に、終日、時としては夜の大部分までも働いてゐた。クロボトキンは二つの委員會——監獄と追放制度との改革、及び町村自治制の立案——の幹事となつた。彼は十九歳の青年の熱心をもつてこれらのことに當つた。まづロシアにおけるこれら諸制度の歴史的發達や、また外國におけるその現状についての多くの書物を讀んだ。しかし、彼等のトランス・バイカリアでの仕事は決し

て机上の空論のみではなかつた。クロボトキンは地方の實際の要求と可能性とに通じた實際家について、まづ大體の輪廓を論じ、次に一々事實について仔細に調べて行つた。

なほその外にも臨時のいろんな仕事があつた。地方の農業展覽會の報告書と共に、縣の經濟事情調査書も書かなければならなかつた。その他、いろいろと重要な調査をしなければならなかつた。「吾々はいま重大な時代に生活してゐるのだ。働き給へ、君。君は現在及び將來のあらゆる委員會の幹事だといふことを忘れないようにして」クウケルはよくクロボトキンにかういつた。彼は益々精を出して働いた。

クロボトキンのこの努力は、實際の上には、全く水泡に歸した。官僚政治の組織そのものが邪魔をしたと共に、やがて中央政府に反動の波が來た。あらしが來た。クウケルは免職されて、二人の憲兵の護衛の下にセント・ベテルズブルグに送られ、セント・ピイター・ポールの要塞に幽閉されようと思はされた。

しかし、クロボトキンの人間や社會についての理解は、そしてまたその全人格的基礎は、全くその間に築きあげられた。彼がシベリアで送つた五ヶ年は、彼にとつては、人間と人間の性質についての純正な教育であつた。彼はあらゆる性質の人々と、最善の人とも最悪の人とも、上流の

人ともどん底の人とも、また宿なしやいはゆる濟度すべからざる罪人とも、あらゆる種類の人々と接觸した。農民の日常生活における風俗習慣の觀察にも十分の機會を得た。殊にはまた、政府者がよし最善の動機から行つたことでも、その農民に益することの如何に少いかを觀察する一層多くの機會を得た。

クロボトキンがシベリアで暮した數年間は、ほかでは容易に學び得ない多くの教訓を彼に與へた。まづ彼は、行政機關の方法では本當に民衆のために有益な何事をも絶對にできないことを悟つた。彼は永久にこの思想と別れた。次に彼は、人間とその性質とのほかに、なほ、人類社會の生命の內的源泉をもわかりはじめた。書物の中には滅多に出て來ない無名の民衆の建設的作用及びこの建設的作用が社會の種々なる様式の生長發達にいかにか重要な役目を勤めてゐるかといふことが、彼の眼の前にはつきり現はれて來た。

農奴使用者の家に育つた彼は、當時のあらゆる青年と同じく、指揮や命令や吐責や懲罰などの必要を信じきつて實際生活にはいつた。しかし彼は、種々なる大事業を取扱ひ、また多くの人間と交渉するに及んで、命令や法律の原則の上に行動するのとお互ひの理解を原則として行動するのとの差異がわかり出して來た。前者は軍隊の檢閲などには立派に役に立つ。しかし實生活のこ

とにかくは、そしてその目的が多くの輻合的意志の嚴格な努力を通じてのみ達せられるところでは、なんの値うちもない。かくして彼は、シベリアで、従来抱いてゐた國家的紀律の信仰を全く失つてしまつた。即ち當時すでに彼は無政府主義者となるべく準備されてゐたのである。

「發意の人はどこにでも要る。しかし一度そのはづみが與へられた以上は、その事業は軍隊式にはなく相互の理解に基づく自治團體式に經營されなければならない。國家的紀律の設計組立家等は、その國家的理想郷を立案する前に、まづ實際生活の學校を通過して來て欲しい。さうすれば、軍隊的、ピラミツド的社會組織の案は、今日ほどまでに聞かなくてもすんだに違ひない。」

クロボトキンがこのシベリアで書いたといふいろんな調査書や報告書が、今まだどこかに保存されてゐるかどうかは全くわからない。

かくして社會改良に全く絶望した彼は、その後は主として、シベリアや滿洲の地理學的探檢の旅に日を送つた。彼はまづ、當時ロシアが占領したばかりのアムウル下流植民地に食糧を送るために、アムウル州を數千哩下つた。そのときにも、諸植民地の地理的事情や經濟的事情についての報告書がセント・ペテルスブルグの政府に提出されてある筈だが、どうなつたか。

次に彼は、滿洲の、こんどは本當に純粹の地理的探檢に出かけた。

アジアの地圖を一瞥すると、大體において北緯五十度に沿うて走つてゐるシベリアのロシア境がトランス・バイカリアで急に北の方に曲つてゐるのを見る。この國境線は三百哩の間アルゴン河に沿うて行つて、それからアムウル河のところまで行くと東南に曲つて、アムウル地方の首都ウラゴエスチエンスクが、丁度再びまた北緯五十度のあたりになる。トランス・バイカリアの東南端新ツルハイツとアムウル河畔のウラゴエスチエンスクとの間は、東西の距離僅かに五百哩であるが、それをアルゴン河とアムウル河とに沿うて行くと千哩餘になる。それにアルゴン河は舟も通はず、その沿岸の交通も極めて困難である。殊にその下流ではごく険しい山路があるばかりである。

トランス・バイカリアは牛馬に頗る豊富な地方である。この地方の東南隅を占據して富裕な牛馬飼養者であるコサツク等は、その牛馬の好市場たるべき中部アムウルとの直接の交通を求めてゐた。このコサツク等は従來蒙古人と交通してゐた。そして、かねがね彼等から、大興安嶺を越えて東に行けば容易にアムウルに達せられる、といふことを聞いてゐた。東に眞直ぐに行くと、興安嶺を越えて、メルゲンといふ滿洲町、スンガリの支流ノンニ河に通ずる支那の舊道に出る筈だ。そして、そこから立派な道が中部アムウルに通じてゐるといふ。

コサツク等はこの通路発見のために一隊を組織して、クロボトキンにその隊長になつてくれといふのだ。彼は喜んで承諾した。ヨーロッパ人でこの地方に行つたものはまだ一人もなかつた。その數年前にロシアの地理學者がこの道を行つたことはあるが、途中で殺されてしまつた。ただかつて唐の高宗時代に、二人のジエスイト僧侶が南方からメルゲンまではいりこんで、その緯度を測定したことがあつた。しかし、それからこの縦横五百哩にわたる廣漠とした地域は、全く絶對的に未知の世界であつた。クロボトキンはこの地方についてあらゆる参考書を調べて見た。誰一人として、支那の地理學者すらも、この地方については何んにも知らない。それに中部アムウルとトランス・バイカリアの連絡はそれ自身重大な性質を帯びてゐた。ツルハイツは外滿洲鐵道の主驛になる筈であつた。かくしてクロボトキン達はこの大事業の先驅者となるのであつた。クロボトキンの一隊は難なくこの探検に成功した。彼等はその目的の直通路を発見したほかに大興安嶺の境界的性質や、その山越えの容易なことや、または久しく地文學上の謎になつてゐたウニン・ホルドノワイ地方の第三期火山などについての、多くの興味ある事實を発見した。それがすむと、すぐまたアムウル河畔を旅行して、その河にといふよりもむしろ入江になつてゐるニコラエフスクまで行つて、そこから更にウスリイ河をさかのぼつた。

それから彼は滿洲の中心であるスンガリを吉林までさかのぼつて、もつと面白い旅行をした。アジアの多くの河は同じ大きさの二つの河の合流したもので、地理學者はその二つのどれを本流、どれを支流といつていいか苦しむくらゐだ。インゴダとオノンとが合してシルカとなり、シルカとアルゴンとが合してアムウルとなる。そしてこのアムウルはまた、スンガリと合してかの洋々たる大河となり、東北に流れて韃靼海峡の無人境で太平洋に注いでゐる。その年、即ち一八六四年までは、滿洲のこの大河もあまりよく知られてゐなかつた。初めていろいろと知られたのは、前にもいつたジエスイトの時代からであるが、それもごくいい加減なものであつた。

クロボトキン等は總督に迫つてスンガリ探検の急務を説いた。總督は吉林總督に交友を求めるといふ口實の下に、その秋、一隻の汽船を送つてスンガリをさかのぼらせることにきめた。クロボトキンもその一行に加つた。この探検も立派にその目的が達せられた。スンガリの航行が確かめられた。河口から吉林までの詳細な河流圖も作られた。

クロボトキン達の探検はその後忘れられてしまつた。天文學者のウソルツェフと彼とがシベリア地理學協會の會報にその報告を發表した。しかるに數年後イルクウツクの大火で、その會報の

残本もスngaリ原圖もすべて焼失して、やうやく一八九八年になつて外滿洲鐵道の敷設が始まつたときに、ロシアの地理學者等が彼等の報告書を探し出して、この大河が既に三十五年以前に探檢されたことを發見したのであつた。

かくして彼はだんだんその精力を科學的探檢に向けるようになった。一八六五年には西サヤンを探檢して、そこでシベリア諸高原の地勢についての新見地を得、またそれが支那邊境の重要な火山地方であることを發見した。そして遂に、その翌年再び長途の旅を企てて、ヤクウツク州の諸金礦とトランス・バイカリアとの間の直接通路を發見した。

シベリア探檢會の會員等は、多年この通路の發見を試みて、それらの礦山とトランス・バイカリアの平野との間にあるごく険しい岩質の、しかも幾列にも平行した山脈横斷に努めたのであつた。しかしこの探檢家等は、南方から進んでこの陰氣な山岳に到達し、そして更に幾百哩も北方に延びてゐる物すごい山脈を目の前に見たとき、悉く皆な、もと來た南へ引返してしまつた。

クロボトキンは、それと反對に北から南へと行つた。まづレナ河を下つて北方の金礦地に行き、そこで遠征の仕度をして、三ヶ月間の糧食を持つて、二百五十哩にわたる山岳地方を南へ南へと横斷して行つた。

彼等はどうたう目的の通路を發見した。三ヶ月の間殆ど全く無人の山中と陰濕な高原とをさまよつて、遂に目指すチタに着いた。彼自身にとつては、この旅行は後日シベリアの山岳と高原との地勢を研究する要石を見出す上に非常な助けとなつた。

これ等の旅行と探檢とは、地理學者としてのクロボトキンを大成させると共に、その間に見聞した諸動物の社會的習性によつて後年の名著「相互扶助論」の萌芽を得しめたのであつた。

二

一八六七年、クロボトキンはセント・ペテルスブルグに歸つた。ポーランドの政治犯人等がシベリアで暴動を起したのに對する、ロシア軍隊の殘虐が、遂にクロボトキンをしてその軍職を見棄てしめたのであつた。

クロボトキンは大學にはいつた。數學の十分な素養が今後の一切の科學的研究や思想の唯一の健全な基礎であるといふ考へから、數學科の中の物理數學科にはいつた。そしてその間に、主として地理學的研究にふけつた。

クロボトキンの探檢報告が印刷された。しかしこの間に、彼にはもつと大きな問題が起つてゐ

た。シベリアでの彼の旅行は、彼に次ぎのやうなことを信じさせた。即ち、當時北部アジアの地圖の上に描かれてゐた山脈は、大部分とりとめのない空想的なもので、その地方の地勢についての何等の觀念をも與へない。アジアの一大特徴であるかの大高原は、當時の地圖を描いた人々にはその存在をすらも想像されてゐない。そしてこの高原の代りに、幾多の大山脈、たとへば、地圖の上では普通に黒い毛虫が東の方へ匍つて行くやうに描かれてあるスタノヴォイ山脈の東方の部分などが、實際にはそんな形勢もなく、またエル・シユルソなどの探検家の報告とも違つてゐるにも拘らず、測量局でのさばつてゐた。こんな山脈は自然の上には全くないのだ。一方には北氷洋に流れ、他方には太平洋に流れこむ幾多の河の源泉は、廣大な一高原の上で入りまじつてゐる。即ち、その源泉は同じ沼の中から出て来るのだ。しかるに、ヨーロッパの測量家共の想像では、高大な山脈が主要分水界に沿つて走つてゐなければならぬものとされてゐた。で、彼等はそこに實際にはなんの形跡もない大高山を描き出してゐた。そして、かういつた多くの空想上の山脈が、北部アジアの地圖の上を四方八方に入り亂れてゐた。

そこでアジアの山脈の配置を知る本當の首要原則、即ちその山脈構成法の調整を見出すといふことが、幾年かの間クロボトキンの注意を集中させた一問題となつた。暫くの間は、かの古い地

圖と、それからアレキサンダー・フォン・フンボルトが久しく支那の原著を研究して、アジアの全體を子午線とその並行線とに沿つて走る幾多の山脈の網の目で蔽うてしまつた推論とが、クロボトキンの研究の邪魔をした。が、遂に彼は、このフンボルトの推論ですらも新しい研究の刺戟にはなるものの、事實とは一致してゐないことを知つた。

始めて彼は、實際當時ではこれが全くの始めてであるが、彼は純粹の歸納的方法で從來の探検家のあらゆる氣壓的觀察を蒐めて、それによつて幾百ヶ所の高度を測つて見た。次ぎに彼は、いゝろんな探検家によつてなされた、假定上ではない事實上のあらゆる地理學的及び物理學的觀察を大きな地圖の上に書き記して見た。そして彼は、どんな地形線がこの觀察の事實と最もよく適合するだらうかを見出さうとした。この豫備的研究が二年あまりかかつて、なほ數ヶ月の間、彼はこのあちこちに散らばつてゐる觀察の、如何んとも手の下しようのない混亂の理由を見出さうとして考へぬいた。

すると或日のこと、全く突然に、丁度一閃の光明に照らされたやうに、すべてがはつきりとわかつて來た。アジアの首要地形線は、北から南へでもなく、また西から東へでもなく、丁度アメリカのロツキイ山脈や高原の地形線が西北から東南に進んでゐるやうに、西南から東北に走つて

ゐるのだ。ただ第二次的の諸山脈が西に跳び出してゐるだけのことだ。それにアジアの諸山脈はアルプス山脈のやうに獨立した山脈の集合ではなく、すべて皆なかつてはベエリング海峡の方に向つてゐた、古大陸であつたところの一大高原に隸屬してゐるのだ。高い分水山脈がその高原のふちに沿うて屹立し、そして幾年月かの間に、その後の沈澱物によつて生じた臺地が海の中から浮び出て來て、アジアの古い脊骨であるこの高原の幅を兩側に擴げて行つたのだ。

この研究は、科學に對するクロボトキンの大きな貢獻であつた。最初彼は、大きな書物を出して、北部アジアの山岳や高原についてのこの新しい觀念を、各々別々の地方の詳細な調査によつて證據立てて見ようと思つた。しかし一八七三年になつて、彼が直ぐにも拘引されさうなことがわかつたときに、やうやく彼はこの考へを表はした地圖とその説明書とを書きあげたばかりであつた。

これは兩方とも、彼がセント・ペテルボールの獄中にある間に、彼の兄アレキサンダアの監督の下に地理學協會から出版された。當時アジアの地圖を書きかけてゐて、彼の研究のことをも知つてゐたベテルマンといふのが、まづその地圖に彼の案を採用し、それ以來大多數の製圖家もそれを採用した。このアジア地圖は、今日ではすぐに理解されることであるが、アジア大陸の地勢

上の首要諸特質、その氣候や動植物の分布や、及びそれ等のものの歴史までも説明したものである。

「今日では、製圖家でも、いつアジア地圖にこんな變化が來たのか知つてゐるものは殆どゐない。しかし科學の上では、新しい觀念はそれに結びつけられた何人かの姓名とはかかはりなしに進んで行く方がいいのだ。最初の概論には免れることのできない誤謬も、その方が修正しやすくなる」とクロボトキンはいつてゐる。

クロボトキンはまたロシア地理學協會の地勢地理課の幹事としてすゐぶん働いた。

當時は全ヨーロッパにわたつて猛烈に探檢熱のたかまつた時代であつた。ロシアの地理學協會も盛んに活動した。従つてまた、その地勢地理課、及びその幹事たるクロボトキンが熱心に取扱つた地理學上の問題もすゐぶん多かつた。殊に協會が北極探檢の計畫を立てて、その探檢隊によつて行はるべき諸科學上の研究を指定するための一委員會が設けられ、クロボトキンは例によつてまたその委員會の幹事となつた。そして、いろんな専門家が各々その専門とする一科學の項を受持つたのであるが、海棲動物學だとか、潮流學だとか、振子觀察だとか、または地球磁氣など

といふ多くの厄介な項目は間に合はず、仕方なしに幹事たるクロボトキンが書かなければならぬ羽目になつた。それは、クロボトキンには全く新しい學問であつた。しかし彼は、それすらも極めて短日月の間に立派に仕上げた。

が、その間に彼はまた、その専門の地理學についての全く新しい一大著述を企てる野心を養つてゐた。ロシアの地理に關するあらゆる有益な材料は、すべて皆なクロボトキンの手を通して協會にはいつた。世界のこの廣大な部分についての遺漏のない一大地理書を書いて見たら、といふ考へがだんだん彼につのつて來た。彼のつもりでは、先きに彼がヨーロッパ・ロシアについて發見した首要地形線に基づいて、この國の詳細な地理的記述をなし、更にその記述の中に各々その地勢を異にする諸地方に行はるべき經濟生活の種々なる様式を略記して見たいと思つた。

そして彼は、この野心を充たすための十分な時間と自由とのために、協會幹事の職を渴望してゐた。しかし彼は、その後間もなくフィンランドとスエデンの周遊を命ぜられて、氷河時代の堆積物調査に派遣され、地質學と動植物分布學との上に新地平線を開かうとしてゐた間に、その目撃した悲惨な農民の生活が、彼をして折角すめられた協會幹事の地位をも辭せしめ、同時にまたその科學者としての野心を全く放擲させた。

が、その一大地理書著述の野心は、後年彼が同志エリゼ・ルクリュの『大地理學』編纂に與かつたとき、その第五卷『スカンディネヴィアとヨーロッパ・ロシア』及び第六卷『アジア・ロシア』の中に十分に果し得たことと思ふ。かつて私はこの第六卷のロシア譯を丸善で見ることがあるが、その後、その第七卷のフランス文『東部アジア』が丸善に來てゐるのを見た。私はクロボトキンのロシアやシベリアの地理學的發見について、大部分の讀者には大して興味のないことを少々長すぎるほど書いて來た。しかし、かうした自然科學上の研究が、同時にまた、後年のクロボトキンの社會科學の基礎になつてゐるのだ。

三

アジアの新地圖をつくり、新地理を書くことについての、クロボトキンのこの科學的研究の態度は、たいていこれでわかつたことと思ふ。が、クロボトキンのこの科學的研究の素養については、更にさかのぼつてその少年時代に受けた教育を見なければならぬ。

クロボトキンが近侍學校——日本の幼年學校と士官學校とを合せたやうなもの——で受けた教育ほど羨ましいものはない。先生は皆な當時ロシア第一流の學者であつた。實際、ごく年少の生

徒に或る課目の一番の初歩を教へるのには、どんな先生でも決してよすぎるといふことはない。ただ書物だけで講義をするのではなく、すべて實地について、生徒自身をして、その實驗をやらせた。

書物で初等幾何學を教はると、直ぐに野外に出て、始めは棹や測量用の鎖で、やがては觀象儀やコンパスや測量臺などで、その復習をした。そして、やや進んで測量學や築城學を教はるときには、反射羅針盤をあてがはれて、この羅針盤で角度を量り、步測で距離を計つて、某々の湖、某々の道路、某々の公園の見取圖を作つて來いと命ぜられる。生徒等は軍服の大きなポケットにライ麥のパンの幾きれかを詰めこんで、毎日朝早くから數哩隔つた公園へ出かけて、地圖を引きながら美しい木影の路や小川や湖の畔を歩きまはる。かくしてできあがつた皆んなの地圖はやがて正確な地圖と對照される。

クロボトキンにはこの測量が深い悅樂の泉であつた。その獨立の仕事、幾百年を経た老樹の下
の孤獨、何ものにも妨げられずに樂しむことのできる深林生活、及び仕事そのものの興味、これらのすべてのものが彼の心に深い痕跡を残した。彼が後にシベリアの探檢家になり、また友人の幾人かが中央アジアの探檢家になつたのも、その基礎は既にこの測量によつて準備されてあつた

のである。

それに、生徒の方でもまた、この方針に従ひ、かつそれに促がされて自己教育をした。獨立的研究すらもした。

クロボトキンは年十五のときにもう經濟學の獨立的研究をやつてゐる。それは當時經濟學熱の絶頂にあつた兄アレキサンダアの勧めで、村の教會のお祭である「カザンの聖女祭」の市を研究して、そこへどれだけの商品が持ちこまれ、どれだけの商品が賣れたかの統計をつくつたのだ。クロボトキン自身もそれを「平民生活の探檢者としての最初の出立」だといひ、この小事業は私を農民等に更に一層近づかせて新たな方面から彼等を觀察させ、なほ後年シベリアでそれが非常な助けになつた」といつてゐる。そしてその統計そのものについては、「自分ながら驚くほど成功した。今から考へて見て、私のその統計は多くの同じやうな統計に優るとも劣るところはなかつた」と自讃してゐる。

この兄が、クロボトキンの知識的發達にどれほど與かつてゐるか知れない。しかし、そのことはここでは省く。

そしてクロボトキンは十六のときにもう歴史の著述と獨立研究とをしてゐる。彼は授業時間中

につくつたノートの助けをかりて、またいろんな書物の助けをもちりて、自己用の初期中世史の一と講義を書きあげた。その翌年彼はローマ法王のボニファス八世と王權との争ひに特殊の注意をもつて、無理やりに帝國圖書館にはいりこんで、古代チュウトン語と古代フランス語との豊富な古文書の源泉に親しんだ。

「全く新しい社會の構成法や、錯雜した關係の全く新しい世界が、私の前に現はれた。そしてそれ以來、近代の見解によつて演繹された著述よりも、古文書の源泉にさかのぼる方が遙かにいいことを覺つた。近代の見解には、近代政治學の偏見や、また單なる一時的思潮の信條が、その時代の實生活を覆ひかくしてゐる。」

クロボトキンのこの中世史研究は、その後、彼に全く獨創的な史的觀察を抱かせて、『相互扶助論』の中の最傑作「中世都市における相互扶助」二篇を形づくらせる基礎となつた。

クロボトギンはまた、十八のときに學校用の物理學教科書を編纂してゐる。陸軍の學校で使ふ大がいの教科書はその當時の第一流の學者によつて特別に書かれたものであつた。クロボトキン達の物理學の教科書もかなりいいものであつた。が、どちらかといへば、それは少し舊式のものになつてゐた。で、クロボトキン達の先生はその獨特の教授法でやつて行つて、教室で使ふその

教材の摘要をつくり始めた。そして數週間たつと、先生はクロボトキンにその摘要を書く役目を仰せつけた。先生は本當の教育家としての態度に出で、その一切を彼に任せて、自分はただ校正刷りを讀むだけだつた。熱や電氣や磁氣の章は全然書き直さなければならなかつた。クロボトキンはそれを書きあげた。そして彼は、學校用に印刷されたほぼ完全な教科書をつくつた。

その年にクロボトキンはまた化學の研究をはじめた。先生はやはり第一流の學者で、既に有益な獨創的研究を遂げてゐた人であつた。クロボトキン達は五六人で組んで、一友人の家に實驗室をつくつて、ストツクハルトの教科書の中に初學者にすすめてゐる簡単な機械を備へた。そして日曜日や祭日の全部をその實驗室に暮した。

當時、即ち一八五九年から六一年にかけては、諸正確科學に對する趣味の世界的勃興の時代であつた。グロウヴやクロオシアスやセゲン等は、熱及びその他のあらゆる物理學的力が運動の變態に過ぎないことを證明した。ヘルムホルツは音響についてその劃時代的研究を始めた。テイニタルはその通俗講演の中で分子や原子についての暗示をした。ゲルハルトとアゾオガドロとは元素交換の法則を發表した。メンデレオフ、ローヤル・マイエル、及びニュウランズは諸元素の週期律を發見した。デアキンはその『種の起原』によつて一切の生物學的科學を革命した。またカ

ール・フオクトとモレシヨットとは、クロウド・ベルナルの後をついで真正の心理學の基礎を生理學においた。科學勃興の大時代であつたのだ。そして人心を自然科學に向はしめたこの大潮流は、とうてい不可抗的のものであつた。クロボトキンもやはりこの潮流の中に巻きこまれた。そして彼は「あとで何んの研究をするにしても、自然科學の深い知識とその方法とに習熟するところがすべての基礎にならなければならない」といふことを覺つたのであつた。

クロボトキンの著書のすべてに一貫する最も深い特徴は、この「自然科學の深い知識とその方法との習熟」である。本當に正直な近代科學的精神の横溢である。

私はさきに、クロボトキンはその科學者としての野心を全く放擲したといつた。しかし、それは單なる科學者としての野心を棄てただけのことで、科學そのものを見放したわけではない。また、自分の人間の一部分を形づくつてゐる科學者を殺してしまつたわけではない。その後と雖も自然科學の研究にはできるだけつくしてゐる。そしてその研究と共に、諸社會科學の新見地の上に自然科學の方法そのままを適用することに全力をつくしてゐる。が、そのことはまた後でいふとして、もう少しクロボトキンの自然科學について説かう。

一八七四年、クロボトキンが始めてセント・ペテルボールの要塞に投獄される數日前のことである。彼はフィンランドとロシアとの地質的構成についての報告書を書き終つて、それを地理學協會で朗讀しなければならぬことになつてゐた。厚い結氷の層が中部ロシアをまでも蔽うてゐた、といふクロボトキンの新発見は、當時の多くの學者等にはあまりに極端な假説だと考へられた。で、一旦きまつた朗讀の口を一週間延ばして、十分な討論に附することになつた。その日は、盛んな討論があつた。そして少くとも或る一點だけはクロボトキンの説が容れられた。ロシアの洪積時代についての一切の舊學説は全く根據がない、で、その全問題を調査し直して新しい出發點を求めなければならない、といふことは認められた。そして彼は、ロシア第一流の地質學者バロポ・ド・マルニイの次ぎのやうな言葉を聞いて満足した。「厚い氷の層が蔽うてゐたか否かは別として、とにかく流水の作用について從來吾々がいつた一切のことは、實際の如何なる探檢にも根據のなかつたことを認めなければならない。」

その日、彼は地勢地理課の課長になるように勧められた。しかし、彼は内心、その晩は「第三部」の牢屋で寝なければならぬまいと決心してゐたのであつた。果してその翌日、彼は拘引されたのである。

そして彼は要塞の獨房の中で、この報告書を訂正増補して、二冊の大きな本になるほどの原稿を書きあげた。その一冊は先きにもいつた如く、兄アレキサンダアの監督の下に地理學協會から出版された。その後、クロボトキンが脱獄してイギリスに亡命し、レヴァシヨフといふ匿名で雑誌『ネエテユア』と新聞『タイムス』とに科學上の雜報や新刊批評を書いて、生活の資を得てゐたとき、『ネエテユア』の副主幹ケルシイから、さうとは知らずに、この自分の著書の評論を頼まれて、ひどく當惑したといふ面白い話もある。

遠い過去の、人類が生れたばかりのころに、スカンディネヴィアやフィンランドの向ふの北方の諸群島に、年々氷が積り積つてゐた。そしてこの積り積つた廣大な氷の層が、漸次ヨーロッパの北部に襲うて來て、やがては徐々としてその中部地方にまでも擴がつた。生物はこの半球の部分にも住んでゐた。が、この廣大な氷原から來る氷の息に吹かれて、慘憺たる不安な生活を送りながら南へ南へと逃げた。憐れな弱い無知な人間も、その覺束ない生存をつづけるのにあらゆる艱難辛苦をなめた。幾千萬年かが過ぎ去つた。氷が解け始めた。湖水時代が來た。無數の湖が凹地にできた。みすばらしい亞北極植物がそれらの湖のまはりの底も知れない沼地をおぼおぼと侵し始めた。再びまた、幾千萬年かが過ぎ去つた。ごく緩慢な乾燥作用が始まつた。諸生物が

南の方から徐々としてその侵襲を始めた。そして今日では、吾々はその乾燥作用がよほど迅速になつた時代にあるのだ。乾燥した平野や草原ができて來た。人類はこの乾燥作用を妨げる方法を見出さなければならなくなつた。現に中央アジアはこの乾燥作用の犠牲となり、東南ヨーロッパもそれに脅かされてゐる。

この氷原が中央アジアにまで及んでゐたといふ確信は、當時多くの學者の間に異端視されてゐた。が、今日では、クロボトキンのこの新発見は大體において認めないものはない。

その後、クロボトキンは『エンサイクロペディア・ブリタニカ』にも多くの科學上の論文を書いてゐるが、それにもまして彼自身の科學上の研究ともなり、また科學界の貢獻ともなつたのは一八九二年から一九〇三年に至る十年間、彼が雑誌『ナインティス・センテリイ』の「最近科學」欄を受持つたことだ。

これはその後は誰が擔任したか知らないが、クロボトキンの前にはハクスレエがやつてゐた。さすがのクロボトキンもそのあとを引受けるには多少の躊躇があつたやうだ。しかしクロボトキンのその諸論文は、ハクスレエのに較べて優るとも決して劣るものではなかつた。この諸論文は

「まとめにして出版されるといふ話があつたが、立消えになつてゐるらしい。」

とにかくクロボトキンは、そのおかげで、最近科學の一切の發見、一切の新説に通ずることができた。そして、それらの發見や新説の研究の結果、益々科學的方法の上に深い確信を抱くようになった。そのことは『近代科學と無政府主義』の再版の序文にもいつてゐるし、その本文の中にも詳しく論じてゐる。

四

革命家としてのクロボトキンの著述、それはもとよりすこぶる重要なものである。しかし、その本當の重要さは、やはりその科學者としての著述の重要さがわからない間は、本當にはわからない。

かつて私は莫鳴の獄中から故幸徳傳次郎にあてて出した手紙の一節にいつた。

「このごろ讀書をするのに甚だ面白いことがある。本を讀む。バクウニン、クロボトキン、ルクリュ、マラテスタ、その他のアナキストでも、まづ巻頭には天文を述べてゐる。次ぎに動植物を説いてゐる。そして最後に人生社會を論じてゐる。」

「やがて讀書にあきる。眼をあげてそとを眺める。まづ眼に入るものは日月星辰、雲のゆきき、桐の青葉、雀、鳶、鳥、さらに下つては向ふの監舎の屋根。丁度いま讀んだばかりのことをそのまま實地に復習するやうなものだ。そして僕は、僕の自然に對する知識の甚だ淺いのに、いつも恥ぢ入る。これから大いにこの自然を研究して見ようと思ふ。」

「讀めば讀むほど、考へれば考へるほど、どうしてもこの自然は論理だ。論理は自然の中に完全に實現されてゐる。そしてこの論理は、自然の發展たる人生社會の中にも、同じくまた完全に實現されなければならない。」

この「自然は論理だ」の項は少々おかしいが、とにかくクロボトキンの無政府主義文書には自然科學を説いてゐることがすこぶる多い。しかし、ここに注意しておかなければならないのは、それがヨーロッパの多くの自然科學者がやつたやうな、また日本でも丘淺次郎博士や石川千代松博士がやつてゐるやうな、いはゆる生物學的社會學では決してなかつたのだ。クロボトキンは自然科學の事實もしくは原則をそのまま人類社會學の上に適用する、幼稚きはまる、そしてまた危険きはまる類推法などには決してよらなかつた。彼はどこまでも本當の科學者であつた。彼が社會科學を論ずる上に自然科學を説いたのは、一方には自然科學の歸納的方法をそのまま社會科學

の上に適用せんとし、他の一方にはかくして自然科学の傾向と社会科学の傾向との上に一致を求めて、そこにその一大世界観を建てようとしたのであつた。

そしてこの一大世界観が、クロポトキンにとっては、無政府主義そのものなのである。

「無政府主義は自然全體を包括する。——即ちその中の人類社會の生活とその經濟的政治的道德的問題をも含む——一切の現象の機械的説明に基礎をおく世界観である。その目的は一個の概括的結論の中に、自然の一切の現象——従つてまた社會生活の——を包含する綜合哲學を建設することである」(クロポトキン著「無政府主義の哲學と理想」)

「無政府主義の哲學と理想」は、まづ最近の諸自然科学の傾向及び諸社会科学の傾向を述べて、そこに立脚する宇宙の科學的概念即ち綜合哲學としての無政府主義を論じ、さらに進んで「自然科学的歸納法によつて得られた概括的結論を人類諸制度にも適用しようとする試み、また人類社會の各單位に對して最大量の幸福を實現する目的をもつて自由平等友愛の途上における人類の將來の歩武を豫見しようとする試み」(クロポトキン著「近代科學と無政府主義」)で、社會哲學として無政府主義を説いたものである。そしてその「近代科學と無政府主義」はそれをさらに一層詳細にしたものといふことができよう。

五

近代の哲學には全く相反するが如き方向に流れる二大潮流がある。

その一つは、實驗科學の著しい進歩につれて、その方法に全く安住してゐる人々の一派である。この人々と雖も、自ら全眞理を捉へてゐるとはもとより信じてゐない。彼等自らも、極めて小さな、しかもあちこちに散らばつてゐる斷片をもつてゐるに過ぎないことは、十分に承知してゐる。しかし彼は、眞理であると認められまた認めらるべき一切が、即ち彼等の精神を満足せしめ得べき一切が、科學的方法によつてしかもそれによつてのみ得られると堅く信じてゐる。しかるに他の一方に、この科學を無視してゐるのではなく、むしろそれに非常な注意と敬意とを拂ひつつ、いはゆる科學的方法に十分な満足を感じ得ない人々の一派がある。即ちこの人々の精神殊に情感は、科學的方法によつては満足され得ない或る要求をもつてゐる。

いま私がこの二大潮流の簡單な説明の中に、その一方に對しては精神、他の一方に對しては精神殊に情感といった如く、前者は理智もしくは理性を重んずると共に、後者は本能もしくは感情を尙ぶ傾向がある。そして、この何れもの傾向に濃淡強弱の度のいろいろあることはいふまでも

ない。しかし概括して、前者を科學派（サイエンティズム）もしくは主知派（インテレクテュアリズム）、後者を實際派（プラグマティズム）もしくは非理知派（アンテイ・インテレクテュアリズム）と呼ぶのに差支へはあるまい。

實際派は科學派の主知主義と主理主義（ラシヨナリズム）とを非難して、科學を利用しつつ、科學のそとに、また時としては科學に反對して眞理を得ようとする。科學派の重んずる理知や理性を人間の皮相の能力であると見なして、さらにその根本のものであると認める感情や本能や傾向や欲望やまたは憧憬を尙ぶ。この實際派によれば、理知の所産たる科學は、自然に對する吾々の能力を確かめるものに過ぎない。事物の利用を吾々に教へるものに過ぎない。その本質については何事をも教へない。吾々自身が如何なる本質のものであり、吾々が何處から來り、何處に行き、また行かんとしていつあるかは、吾々自身の非理知的根柢または時としては無意識の中に求めなければならぬ。吾々の暗い憧憬や本能は、吾々の理性の明るい判断よりも、遙かによくそれらのことを教へてくれる。科學は無視し蔑視すべきものではないが、しかし第二義的知識に過ぎない。第一義の本當の知識は吾々の情感的直覺の中に求めなければならないといふ。

科學派と實際派とを比較するとき、直ぐ吾々の頭の中に浮んで來るのは、科學の破産といふ言

葉である。この科學の破産によつて實際派が生れ、實際派の勃興によつて科學の破産が確かめられた、と屢々いはれてゐる。

このいはゆる科學の破産は、既成科學そのものの不完全と、及び或る科學者等の態度の愚昧と不遜とから生じたものである。即ち、或る學者等は科學の急速な進歩に酔はされて、科學の萬能を信じ、また科學の既成法則をもつて一定不變の眞理であるかの如く説いた。けれども科學そのものの更に新しい進歩は、その既成のしかも根本の、多くの法則を打ち破つた。

即ち先きのいはゆる法則は、數學者の常に用ひる第一近似價であつたのだ。そしてこの第一近似價は、それが發見されたのと同じ科學的方法で、必然に且つ當然に、更に第二もしくは第三の近似價に移らうとしてゐるのだ。そしてまた、この第一近似價の破滅に乗じて、從來の科學の不完全と或る科學者の愚昧と不遜と、またいはゆる科學的方法の或る方面における無能とを批評しつつ、更に異なる方法によつて第二もしくは第三の近似價を求めようとしてゐるのが、かの實際派の哲學論者であるのだ。

しかるに科學派の學者は、精神と物質との一元論から出發して、この二つの世界のいづれの研究にも科學的方法をもつて進まうとする。また實際派の哲學者は、そのいはゆる事物の皮相たる

物質界の研究を科學者のなすがままに委ねて、そのいはゆる事物の本質たる精神界の研究に特殊の方法をもつて自ら任じようとする。されば問題は、この精神界において、科學派の歸納法と實際派の直覺法とのいづれが、第二もしくは第三の近似價を得ることに成功するかにある。

以上は科學派と實際派との、いづれにもできるだけ善意な、従つて最も公平な大體の比較であるが、しかし實際派の起原を見るに、それは精神界といふよりもむしろ社會界における眞實を求めるために、いはゆる科學的方法の訂正として現はれたものだ。

物理學や化學などのいはゆる正確科學では、從來の科學的方法で十分であるかも知れない。しかし、それらの科學に馴れた科學者等は、とかくに人間の本能とか意志とか感情とか憧憬とかを無視して、ただ知力と理性とに重きをおく傾向があつた。そして、この知力や理性の上のみ築かれた體系をもつて、眞實である法則と見なし、なほそれを一定不變の絶對的のものであるとまで斷定した。この主知主理的眞實の中には、本能や意志や感情や憧憬を無視したところに全的人間味が缺け、また不完全な人間の知力や理性を過重したところに必然の誤謬があつた。従つて、いはゆる社會的法則や眞實はただ理窟攻めのもので、實際において人間離れのした、また實際の

生活と適合しない場合が多かつた。そこでこの缺點を補ひ、この誤謬を正さんがために、等しく觀察と實驗とによる科學的方法を用ひつつ、ただその觀察や實驗を、知力や理想の上よりも、むしろ本能や行爲の上に基づかせたプラグマティズム、即ち固有の意味の實際主義が生れたのであつた。

この意味の實際主義は、一八七七年十一月及び一八七八年一月の『ポピュラア・サイエンス』に始めてこのプラグマティズムといふ言葉を用ひた、アメリカの科學者ピアスの創見であつた。

この實際主義とは行爲の哲學、結果の哲學、利益の哲學である。或る思想の眞偽を判斷するのに、直ちに理性や理論に走ることなく、まづ行爲に赴いて見る。即ち、その思想を實際問題とぶつからせて見る。そして、その行爲のもたらす結果により、利害によつて、その思想の眞偽を決定する。かくあらゆる思想を夢みながらではなく生かして、抽象から具體に移して、試して見るといふ方法には、第一の條件として意志を要求する。精力を要求する。教へられた一切の理窟を排斥もしくは忘却して、ただ本能の奔るがままにあらゆる事實にぶつかつて行く、意志と精力とを要求する。

ピアスのこの實際主義は、ジエムスによつて多くの解釋を加へられて著しく宗教的となり、ま

たシラアのいはゆる人本主義となり、更にまたベルグソンの創造論となり、種々に發展し變化して遂に先きに述べた今日の實際派の大勢を形づくるに至つた。しかし要するに固有にいふ實際主義の起原と根本とは、この行爲とその要求する意志と精力とによつて、主知主理派の科學的方法の訂正を企てたものであつた。

けれども從來のいはゆる社會的法則もしくは眞實が、多くの場合に虚偽であり或は容易にその眞實を判断され得ないのは、社會科學そのものの、またはその研究方法のいまいつた意味での不完全であるといふほかに、實際派の哲學者輩の全く知らない、しかし吾々の忘れてはならない一大理由がある。即ち科學者や哲學者もまた吾々と同じ人間であつて、その屬する社會的階級の定心をもつてゐる。彼等の多くは少くとも有閑階級に屬し、また直接間接に權力階級に附隨してゐる。社會が利害の全く相反する征服階級と被征服階級との兩極に分離し、學者がその隸屬する征服階級の定心をもつてゐるとき、そのいはゆる社會的眞實が多くの場合において被征服階級の生活事實に適合しないことはいふまでもなく。

勞働運動は、更に廣くいへば一切の民衆運動は、この征服階級のいはゆる社會的眞實に對する實生活の上からの、最初は無意識的の叛逆であつた。そして實際主義は、社會のこの階級的區別

を少しも考察の中に入れずに、ただ主知主理的のいはゆる社會的眞實に對する最初から意識的の叛逆であつた。

C・G・T即ち勞働總同盟のサンデイカリズムは、勞働運動におけるこの無意識的實際主義の最もよく具體化されたものである。

サンデイカリズムは、無知なる勞働者の日常生活の間に、その日々の資本家との争闘の間に殆ど自然にできあがつた運動である。理論である。尤もサンデイカリズムはその長い間の形成の行程の間に、社會改良主義から無政府主義に至る幾多の社會的學說の影響をうけてもゐるが、それらの學說の指導の下に形成されたといふよりも、むしろ勞働者がただ生きんとする本能に驅られて、右往左往の間にそれらの學說を行爲によつて吟味しつつ、遂に彼等の生活そのものの經驗と直覺とから不斷の流轉を経て創造されたものである。彼等は最初から理想をもたなかつた。また定まつた運動方法をもたなかつた。もとより何等の社會的學說をもつてゐよう筈もなかつた。彼等はただ盲滅法に、その目前の死から逃がれんがために、更によりよく生きんがために、彼等の能ふだけの全力をつくした。かくして彼等は、彼等自身の力をもつて彼等自身の眞價を築きあげようとしたのであつた。

彼等はその長い努力の間に、種々なる社會的學說にたよつて悉く失敗した結果、一切の社會的理論を斥けて、ただ彼等自身の經驗にのみたよることとなつた。よりよく生きんとする意志からその障害となるべき一切の事物にぶつかつて行つて、その結果の中から彼等自身に利益のあるものだけを選び出した。彼等の運動方法も、彼等の團體の組織も、彼等の將來の理想も、彼等の道徳も哲學も、すべて皆な理窟でこねあげたものではなく、ただあらゆる事業とぶつかつて見て、その結果として現はれたものである。

しかるに、この實際的方法によつて形成されたサンデイカリズムと、全く科學的方法によつて形成された無政府主義とが、即ち別個の方法によつて獲得された各々の社會的眞實が、その最後の結論においてほぼ相合致したのは何故か。

それはクロボトキンの科學的方法が、いはゆる實證派（ポジテイヴィズム）の偏狹杜撰な科學的方法ではなく、「人類社會の各單位に對して最大量の幸福を實現する目的をもつて、自由平等友愛の途上における人類の將來の歩武を豫定しようとする試み」の科學的方法であつたからである。人間の本能や感情や意志や憧憬やを蔑視する、また社會の階級的分離を無視する、いはゆる主知主義派の科學的方法でなかつたからである。實生活の上の觀察と實驗とによつて幾多の事實

を歸納しつつ、また人間を全人的に取扱ひつつ社會的眞實を求めんとした純正な科學的方法であつたからである。殊にその社會進化の最大要素を人類の社會的憧憬に求め、社會的創造にたよつて、新勃興階級たる労働者中の最も活力ある分子の實際生活にその結論を得て來たからである。

六

しからは、かくして得たその一大世界觀、即ち無政府主義の哲學とはどんなものか。

クロボトキンはそれをまづその『無政府主義の哲學と理想』の中に論じ、更にその『近代科學と無政府主義』の中に詳論してゐる。それを今、私は次ぎに大體の瞥見を試みようと思ふ。

自然の事實についての知識と、社會現象についての概念とは、常に少なからず相交渉するところのものである。即ち宇宙の總體についての思想の變化と、社會現象についての思想の變化とは常によく相反映する。

かつて吾々の先祖は信じてゐた。地球は宇宙の中心である。太陽も月も星も、すべてこの地球を中軸として、その周圍を廻轉する。そして日月星辰を始め、萬有ことごとく、この地球の上に

棲息する萬物の靈長たる人間のために、神の御手によつて創られた。されば神は常に人間の上を守つて、或はその徳行を賞せんがために、或はその罪惡を懲さんがために、時に野に雨を降らし時に街に雷を鳴らすと。そしてこの科學と哲學との支配してゐた史上の最も暗黒な時代を、最も雄辯に物語るものは、即ち彼の東方諸國の神權政治であつた。

けれども、やがて十六世紀のころになつて、やうやく人間とその思想とが宗教の桎梏を脱しかけようとしたとき、吾々の祖先は從來地球と人間とにあまりに過大な役目を帯びしめてゐたことに氣がついた。地球はもはや宇宙の中心ではなく、他の諸遊星よりもずつと小さい一小塊、太陽系中の一粒の砂に過ぎないと知つた。そしてこの地球に代つて宇宙の中心となつた。しかもこの地球に較べれば廣大無邊なほどのかの太陽も、これと同じ大きさ或は更に大きな、天の河の中に閃めいて見える無数の他の太陽の一つに過ぎないとわかつた。かくして、今までは神のいとし兒と誇つてゐた人間も、この宇宙の無窮に對しては、九天の上から突如として九天の下に蹴落された形となつた。

哲學史をひもといて見れば、この天文學上の知識の變化が、どれほど社會事實の思想の上に影響を與へたかについて、必ず幾ページかの灼爛たる文字を見出す。實にこの時代のあらゆる思想

は、その純理的なると應用的なるとを問はず、一としてこの反動を蒙らざるはない。そしてこの時代から、始めて、今日のいはゆる自然科學の芽が吹き出して來た。

しかるに今日また、それと同様のことが起つてゐる。即ち吾々は科學的概念の總體と哲學的概念の總體との上に、既に前にもまして、更に深い更に大きな變化の起りつつあるのを見る。

十八世紀の終りから十九世紀の初めにかけて、天文學は、正にニュウトン説の全盛時代であつた。その哲學はいふ。太陽は吾々の太陽系の主人である。王である。支配者である。心である。魂である。この太陽から、その諸衛星の運動を指揮しその間の調和を維持する力が出て來る。即ち太陽の強大な引力が地球や諸遊星やまた諸彗星をすらも、各々その軌道に安んぜしめるのだ。それらのすべてのものは、この太陽から分れ出た枝葉だ。みんな太陽から生れたのだ。そして、それらの土地に生氣を與へ、かつその裝飾となつてゐる諸生物もまた、みんなこの太陽のおかげで育つてゐるのだ。この支配者の權威によつて、始めて宇宙の間に、完全な秩序と調和とが生れる。よし多少の不秩序が起ることがあつても、それはほんの一時の變動で、直ぐに太陽の引力がすべてをもとの秩序に歸らしめる。しかもこの秩序たる、實に萬世不易のものである。なんとな

れば、一切の變動は、その命ぜられた秩序に復歸せんがために、互ひに相補整し相壊滅するが故である。かくしてそこに新しい太陽崇拜教が起つた。

しかし、この概念もまた、前と同じやうに直ぐに打ちこはされてしまつた。諸遊星と諸太陽との間の無限の空間には、數限りのない極微物質の群が飛びまはつてゐる。その群の中には時々地上に落下して人間を戰慄させる大きなものもあれば、やうやく幾グラムか幾センチグラムかに過ぎない小さなものもある。そして、このごく小さな土塊にも、その周圍には、顯微鏡でなければ見えないほどの無数の塵埃が空間をとりかこんでゐる。これらの極微物質は各それ自身の生を有し、恐ろしい速度で四方八方に突進し、到るところに、そして常に相衝突し相離合して、その間に或る偉大な力を生ぜしめる。その力は、それを一つ一つに離して見れば、もとよりいふに足りない微弱なものであるが、それが相重なり相積んで、遂に恐ろしい強大なものとなる。そして太陽系そのものも、その中の無数の星も、またそれらのものを動かす運動も、その調和も、すべて皆なこの極微物質の集合的作用に過ぎないことがわかつた。更に一步を進めていへば、ニュウトンの太陽の力であるといつた引力そのものも、實はこの空間に充ち満ちてゐる極微物質の自主的運動の結果にはかならないことがわかつた。

これを一言にいへば、從來は常に總計と結果とのみを見て、その總計を成す各單位や、またはその結果を導く起原については、殆ど顧みられなかつた。それが今日では、反對に、むしろ單位であり起原である極微物質の方に注意を傾けるようになった。そして、總計の中に積み重なつてゐる各個體の微かな作用がわからなければ、その結果はわかるものではない、と考へるようになった。

さらに言葉を換へていへば、宇宙にはもはやただ一個の支配力といふやうなものはない。豫め定められた法則はない。豫め計畫された調和はない。ただ無数の極微物質が、各々自由自在にその向ふところに突進して、そしてその間に自然と均勢ができる。それが宇宙の力だ。法則だ。調和だ。

これが最近天文学の結論である。宇宙の總概念、即ちコスモロジイの結論である。

天文学上のこの新しい結論は、更にあらゆる自然と人類社會との諸科學の上にも、それと同じ變化を及ぼした。

まづ物理学上では、かつて實體として取扱はれてゐた光とか、熱とか、電氣とか、または磁氣とかいふものが、よほどその性質の解釋を變へられて來た。即ち、熱を加へられた或は電氣の通

せられた或る物體に對して、それがもともと自分ではなんの力も持たない死んだ物體であつたのが、その或る未知のものからそれらの力を與へられて生きて來たのだ、といふやうには見なくなつた。物理學者はまづ、その物體及び周圍の空間の中に、あらゆる方向に突進し活躍し廻轉してゐる無数の極微物質の運動に注意し、そしてそれらのものの運動と衝突と生氣とによつて、光や、熱や、電氣や、または磁氣が生じたのだと説明する。

生物學においてもまた、種の創造とか現出とかいふことは、もはや昔の物語になつて、今日では各個體そのものの生活とその周圍といふことが、動植物學者の研究主題となつた。この周圍の影響とか、また毎日のやうに變つて行くその諸條件に各器官が適應して行く状況によつて、個體の上になる變化を研究するやうになつた。氣候の寒暖乾濕や、食物の多少や、またはその外界の力に對する感受性の厚薄強弱等によつて、各個體の上におこる變化が、やがて新種の起原になるのだ。即ち、種の變化は各個體の上に別々に起る變化の總計もしくは結果である。各個體がその生存する周圍の無数の影響を受けつつ、各自がその個性に従つてそれに適應する、その總計が相集まつて新しい種をつくりあげるのだ。

しかしこの個體そのものもまた、無数のそしてそれ自身の生をもつてゐる極微物質の集合體で

ある。生物の各器官は有機體たる無数の細胞より成り、その各細胞はそれ自身の個性を保存しつつ、相集合してそこに或る一個體を組織する。人間はもはや唯一者ではない。分離することのできない完體ではない。微生物の集合體である。細胞の群體である。器官の部落である。かくして生物學者は、人間を知らうと思ふなら、まづその各單位を究めなければならぬといふようになつた。

そして、十八世紀の唯物論者すらもなほその概念に囚はれてゐた、いはゆる人間の靈魂なるものも、孤立した特別の存在物ではなく、要するに甚だ複雑した、即ち各自が別々に自治し獨立しつつ、自由な行動をとつてゐる諸種の官能の群體である。總計である。これらの官能の各々にはそれぞれの神経中樞がある。それぞれの種々なる器官がある。かくして遂に心理學は一個人の心理的作用の學問ではなくなつて、その個人の生命を組成する諸種の官能の別々の研究となつた。

社會科學にもやはり同じ變化が來た。むしろ更に明白にこの變化が現はれてゐる。

歴史はもはや王朝の歴史ではない。民衆の歴史である。更に適切にいへば、各個人の歴史である。歴史の見解はもはやいはゆる英雄崇拜を許さない。そして、史上における民衆の大きな役目

が、その研究の進むに従つて、益々重大な意味をもつて來た。過去の大事件はすべて皆な幾千幾萬の個人の意志が積み重なつた結果として見られるようになった。即ち歴史はまづ、或る時代に生存して一國民を組織する各個人が、どんな信仰をもち、どんな生活を送り、どんな社會的理想を抱き、そしてどんな方法をもつてその理想に進んで行つたか、といふことを調べて見る。そして、それ等のすべての力の集合的作用によつて史上一切の大現象を解釋しようとする。トルストイの描いた『戦争と平和』の中の、一八一二年の戦争の如きは、實にその好適例である。

法律學者もまた、單に或る法典を研究するだけでは、もはや満足ができなくなつた。丁度、人種學者と同じやうに、いろいろな制度の起原を尋ねて、時代を追うてその進化のあとを究めて行く。そしてこの研究を進めるにも、成文法などよりもむしろ、各地方の習慣、またはいはゆる習慣法にたよつて行く。かくしてそこに無名の社會的創造、建設的天稟を發見する。

また經濟學はかつて國家の富の科學であつた。さればこの科學の始祖たるアダム・スミス自身も、その名著に題して『富國論』といつた。そして、その取扱つた主題は國家の生産であつた。輸出入であつた。交換であつた。しかるに今日の經濟學者はもう、國家の富を研究するだけで満足ができなくなつた。そして各個人がその欲望を充たしてゐるかどうかを知ることが、その最も

重大な研究主題となつた。

今日の經濟學はもう、一國の富を測るのに、その交換の總額によるやうなことはしない。まづその一國の中に、窮乏の中にうごめいてゐる個人の數に比較して、幸福をうけてゐる個人の數がどれほどあるかを調べて見る。即ち一軒々々と歩きまはつて、食物に事を缺いてゐやしないか、子供にさつぱりとした夜具を着せてゐるか、明日のパンに困つてゐるやうな家はないか、と探して見る。これを要するに、個人の欲望とその満足といふことが、最近經濟學のまづ第一に知らうとするところである。

政治學ではやはり、各國の法典に記されたいろいろな形式的なことなどは、もうさほどに重大な問題ではなくなつた。ただ政治學者が知りたいのは、各個人がどれほどまでに自由をうけてゐるか、地方自治の欲望がどれほどまでに満足されてゐるか、各個人の知識的水準がどれほどまでに進んでゐるか、どこまでその思想を表白する自由があるか、そしてまたその情意の衝動によつて行動する自由がどこまで許されてゐるか、といふことである。即ち、政治學の研究主題は、やはりその國民を組成する單位の各個人であつて、一國の政治的狀態などといふ結果は、その起原たる各個人の狀態さへわかれば、自然にわかつて來るものとされてゐる。

かく物理界にも、生物界にも、また人類界にも、すべての科學にわたつて、時代の一大特徴たるこの傾向が容易に見られる。かつては總計と結果とのみを見て、それに満足してゐたのが、こんどは逆に、その總計なり結果なりを組成する各單位の上に注意を向けるようになった。

七

先きにもちよつと言したやうに、近代科學のこの傾向は一つの大きな概念を近代思想の上にもたらした。それは、調和とか秩序とかいふ思想についての、最近科學の結論である。自然は實によく秩序が行き届いてゐる。漸變などといふことは滅多にない。どうして日月星辰は、いつもその空間の同じ道を往來して、互ひに衝突したり打ちこはし合つたりすることがないのだらうか。どうして火山の爆發や不意の地崩れなどが起つて、時に大陸を打ち崩し、または地の底の洞や海の凹地などを埋めてしまふことがないのだらうか。どうしてまた、人間の社會はこんなに固定してゐるのだらうか。どうして時々その内部に顛覆といふやうなことが起らずに、長い間かうして無事につづいて行くだらうか。これらの疑問に對しては、いつの時代にも必ず何等かの解答が出てゐる。そしてその解答は、

その時代によつて、いろいろと違つてゐる。

昔の解答はごく單純なものであつた。即ち創造主がその創造物の保存に努めてゐるのだ。けれどもやがてこの思想が法則といふ概念に變つた。尤もその法則といふのは、最近科學のいふそれとは、だいぶその意味が違ふ。即ちそのいはゆる自然法は、かくかくのことが生ずれば必然にこれこれのことが起るといふ、物と物とのただの関係、いひ換へれば、因果の條件的法則を指すのではない。その諸現象の上に遙かに優れた、そしてそれらのものを指揮し命令して行く、何か特別なもののやうに思はれてゐた。

十九世紀の諸科學は多くこの思想の下に支配されてゐた。自然科學もさうだつた。社會科學もさうだつた。そして、かうした法則とか、規律とか、または秩序とかいふ思想が、大學にも、議會にも、官衙にも、商館にも、到るところで、そしてまた日常生活の間にすらも浸みこんでしまつた。

けれども、最近科學の傾向は更にその道を轉じかけて來た。自然界に多少の調和があるのは、大きな激變の滅多に起らないのは、そして生物や無生物がよくその周圍の事情に適應してゐるのは、それらのものがこの周圍の事情そのものの産物であるからである。この周圍の事情そのもの

がそれらのものをつくり出したのだ。従つてこの周囲はそれらのものを滅多に打ちこはすやうなことをしない。建設力と破壊力との自由な働きそのものが、それらのものを創造し、かつそれらのものの調和を維持してゐるからである。されば、自然に調和がありとすれば、それはそれらの力の自由な働きの結果に外ならない。そしてまたこの結果は、そのときの必要に応じて、それらの力によつて常に變化され得べきものである。

調和や秩序は神の御心によるものでもない。また或る一個の大きな力によつて課せられた法則によるものでもない。調和や秩序はただ次ぎの條件によつて維持されて行く。即ち或る同一の點に働くあらゆる力の間に自由に生ずる均勢といふことである。そして、これらの力の中の或るものが、何ものかによつて障害されるとき、その力は暫く表面には現はれず、しかしその間に蓄積されて、やがてはその障礙物を打ち破る。かくしていはゆる激變が起る。

また、調和や秩序は永遠無窮のものではない。必ず断えず改修され變化されて行くといふ條件の下でなければ維持されない。自然界にもまた人類界にも、一物たりとも一瞬時も變化しないので済ませるものはない。不斷の進化、これが自然の生命である。そして自然界に多少の調和がありよし變動があつても、それはごく稀れでしかも常に部分的であるのは、自然界の現象にはそれら

のものを力を障碍する或る意志が滅多に交渉しないからである。その盲目的の衝動と軌轢との結果、互ひに相均勢して、互ひにその間に密接なソリダリテを結ぶ。

尤もこの自然の調和といふのは、もちろん或る範囲内でのことで、従來の生理學者や哲學者のやうに誇張することはできない。星とか大陸とかいふものは、幾百千萬年かかつて成長して來たもので、その間に殆ど信することのできないほどの緩慢な變化をつづけてゐる。かく幾百千世紀かをそのリズムとする天體の調和と、それに較べれば無限の加速度で進行するものの調和との間には、當然區別して考へなければならぬ或るものがある。

動植物の種は、従來考へられてゐたよりも、よほどの急速度で變化する。地質の變化もさうだ。そしてこれらの變化に對しては、従來の博物學者が使つたやうな、一樣なそして緩慢な進化などといふ言葉はもう許されなくなつた。進化と激變とが常に入り混つて、そしてこの二つとも等しく自然の大調和のためにその力を寄與してゐる。

クロボトキンの世界觀といふのは、さつとまづこんなものだ。誰にでもちよつとはうなづける

ほどの、至極平凡な、また至極温健なものだ。ただそれが社會觀になると、急に誰でもなかなかうなづけない、至極突飛な、また至極過激なものやうに見えて来る。

しかしまあ、そんなことはどうでもいい。また私はかくながなとクロボトキンの世界觀を説いて来たものの、實のところ、そんなこけおどしの世界觀などはどうでもいいのだ。クロボトキン自身にだつて、この世界觀があつて、始めてその社會觀ができたのではない。世界觀の前に社會觀があつたのだ。そしてその社會觀の前にも、また何ものがあつたのだ。それはクロボトキン自身だ。クロボトキン自身の強い感情だ。クロボトキンの世界觀や社會觀は、この強い感情に基づいて、それをただ科學的に理窟づけたものだ。クロボトキンの社會哲學の本當の値打はそこにある。

私は先きに、クロボトキンの科學的方法は人間の本能や感情や意志や憧憬やを蔑視する、また社會の階級的分離を無視する、いはゆる主知主理派の科學的方法ではなかつた、といつた。クロボトキンの社會哲學には、彼自身の深い感情や憧憬が、その基調になつてゐる。そしてその感情や憧憬の共鳴を同時代の生活や人類の歴史の中に求めた。

社會進化の行程は、いはゆる「科學的」社會主義の主張する如き、生産方法云々を十臺とする

必然的のものではない。その社會及びその中の各個人がもつてゐる、いろんな意志、いろんな憧憬、いろんな傾向の、自由な闘争を十臺とする蓋然的のものだ。

だから、社會哲學はあるが社會學はないといつて、社會學の科學としての價值を否認する學者すらもある。しかしこの社會哲學の中に本當の社會學があるのだ。

しからば、クロボトキンがその社會哲學の基調としたクロボトキン自身の深い感情、深い憧憬といふのは何か。それは自由發意と自由合意とである。個性の尊重である。自他の個性の尊重である。そして、その各個性の自由なる合意、自由なる團結である。自由と平等と友愛である。

クロボトキンがまだ十四のときであつた。彼は近侍學校にはいつた。

學校には古木の茂つた美しい庭園があつた。第五級の生徒はそこへはいつて遊ぶことができなかった。第一級の生徒等がその中で寝ころんだり、おしやべりをしてゐる間に、新生等はその周圍を駆足させられたり、または古參生等が六柱戯をやつてゐる間にその球拾ひをさせられたりしてゐた。クロボトキンは學校にはいつた數日間、庭園の中のさうした事情を見て、そこへは行かずに自分の室にこもつてゐた。そして本を讀んでゐた。すると人蔭のやうな髪に雀斑だらけの

顔の一人の近侍がやつて来て、すぐ庭園へ下りて駄足をするようにと命じた。

「いやです、僕はいま本を讀んでゐるんぢやありませんか」とクロボトキンはいつた。

近侍は怒つた。たださへ面白くない顔を一そう不恰好にして、今にもクロボトキンに飛びかかろうとした。クロボトキンも防禦の身がまへをした。近侍はその帽子でクロボトキンの顔を打たうとした。クロボトキンはうまくそれをねのけた。近侍は帽子を床板の上に投げつけた。

「拾へ。」

「自分で拾ふがよい。」

こんな不従順な振舞ひは學校では未曾有のことであつた。翌日も、また次ぎの数日も、クロボトキンは同じやうな命令をうけた。が、彼は頑固に二階のその室にこもつてゐた。そのたびに、益々迫害は嵩じて來た。普通の子供なら絶望してしまふほどひどくなつた。それでも彼は平氣で古參生等を茶化してゐた。

第一級の近侍等は下士官の資格をもつてゐて、下級生に對する全權を與へられ、校内の嚴重な紀律を保つことに任ぜられてゐた。そしてニコラス一世時代には、この近侍等の命令に反抗したものは、そのことが公けになれば、兵卒（農奴）等の子供を集めた學校に送られることにきまつ

てゐた。また近侍等のちよつとした出來心に少しでもそむかうものなら、彼等は重い櫛の木の定規をもつて、室に集まつて、その不従順な生徒に手痛い制裁を加へるのであつた。そしてクロボトキンは、この長い間の悪習に反抗して、それを打破する先頭に立つたのだ。

私は、このただ一事だけでも、クロボトキンの個性の強さを見る。そして彼はこの個性の強さと共に、やはり子供のときから、その母から譲りうけて農奴共の間に養はれた深い友愛をもつてゐた。

クロボトキンは彼自身のこの強い感情の現はれを、やがて西ヨーロッパへのその初旅の間に、國際労働者協會内の一大傾向の中に見た。そして、そこから無政府主義を教はつた。このことは彼の自叙傳『一革命家の思出』の中に、彼自らが詳細に語つてゐる。

クロボトキンは、いつもこの一大傾向を説いてゐる。彼は、彼が再び西ヨーロッパに旅して、スキスのジュラ同盟にはいり、そこで無政府主義の機關『謀叛人』を創めたときのことを、およびそ次ぎのやうに語つてゐる。

社會主義の新聞はとかく現代諸制度に對する泣言の年代記に過ぎなくなる傾向がある。鑛山や工場や田園の勞働者の壓迫されてゐることが書かれてゐる。同盟罷工の際に勞働者の窮迫や苦痛が目に見えるやうに語られてゐる。勞働者がその雇主と鬭争する孤立無援の有様がくどくどしく記されてゐる。そして、かく毎週々々この孤立無援の努力がつけさまに書かれるといふことはその讀者をして甚だしく意氣銷沈させる。そこで、その新聞の記者等は、それを防ぐために、主として熱烈燃えるやうな文字を使つて、それによつてその讀者に元氣と信仰とを鼓吹しようとする。しかし私はそれと反對に、革命的新聞はなによりもまづ、到るところに新時代の到來と、新社會生活の芽生えと、舊制度に對する益々はげしくなつてくる叛逆とを告げる種々なる兆候の記録でなければならぬと考へた。この兆候をよく注意して見て、その間の密接な連絡をつけて分類集し、そして思想の復活が社會に起きたときに、なほ躊躇してゐる多くの人々に、その進歩的思想が到るところに見出すべき、目に見えない、そして往々無意識な論據を與へるやうにしなければならぬ。かくしてその讀者をして全世界の人々の心臓の鼓動と共鳴せしめ、長い間の不正義に對する叛逆と共鳴せしめ、新しい生活様式をつくり出すその企てに共鳴せしめる、といふのが革命的新聞の主とする義務でなければならぬ。革命を成功させるものは希望であつて、

絶望ではない。

歴史家は往々吾々に語つて、これこれの哲學が人類の思想に、従つてまたその制度に、或る變化を生ぜしめたといふ。しかしこれは本當の歴史ではない。偉大なる社會哲學者は、ただ來るべき變化の兆候を捉へて、その間の内的關係を察し、そして歸納と演繹とによつて將來を豫言したに過ぎないのだ。社會學者はまた、若干の或る原則から出發して、丁度若干の定理から幾何學上の結論を引出すやうに、その必然の結果に推論して社會組織の設計をつくる。しかしこれも本當の社會學ではない。精確な社會的先見といふものは、新生活の幾千の兆候に目をとめて、その一時的事實と有機的の本質的事實とを區分し、そしてこの基礎の上に概括論を建てなければならぬものではない。

「私は明晰なわかりやすい言葉で、讀者をしてこの思索方法に親しませ、その最も遠慮がちなものにもなほ社會がどこへ進みつつあるかを自ら判斷させ、思想家等が誤つた結論に達したときには、讀者をして自らこれを矯正させるやうに馴れさせようとした。」

かくして、クロポトキンが一八七九年から八二年までの間に、『謀叛人』のために書いた幾多の論文は、一八八五年即ちそのフランスでの入獄中に、友人エリゼ・ルクリュエによつて『謀叛人の

言葉」といふ題の下に出版された。尤もその中の大部分は、それ以前もしくはそれ以後に、一つ一つ小冊子となつて出版されてゐる。

クロボトキンはその小冊子についていふ。私は、實際白状するが、自分の思想を述べるのほどにどのページを使つてもいい人達、即ちタレエランの有名な「私は短く書くひまがなかつた」といふ言譯を許される人達が、折々うらやましかつた。數ヶ月の研究の結果を——たとへば法律の起原についての——一ペンスの小冊子にちぢめて書くには、それを短くするのに非常な時間がかかつた。しかし私達は勞働者のために書くのだ。そしてこの勞働者にとつては、一冊の小冊子に一ペンス出すのでも高すぎるくらいだ。その結果、私達の一ペンス、半ペンスの小冊子は、數萬部も賣れて、なほ各國の國語に翻譯された。

なほ當時のクロボトキンは、ルクリュの「大地理學」の編纂を助けるために、「謀叛人」の發行所のジエネバからすこし離れたクラレンスに住んでゐた。そこで彼は、彼の夫人の助力の下に彼が「謀叛人」のために書いた中でも一番いいものを書きあげた。夫人はいつも彼とあらゆる出來事や問題について議論をし、かつ彼の文章の嚴格な文學的批評をした。その中の「青年に訴ふ」の如きは、あらゆる國語に翻譯され、數十萬部も擴がつた。實際彼は、その後彼の書いた殆どす

べてのものの基礎を、そこで築きあげたのであつた。

この小冊子の中でも、殊に「法律と強權」は、その後に出た「國家論」と「裁判論」(詳しくいへば「裁判と稱する復讐制度」と共に、非國家論の三部作として有名なものだ。

そしてクロボトキンはこの「謀叛人の言葉」の出版された翌年、即ち一八八六年に出獄すると直ぐ、「監獄論」(詳しくいへば「ロシアとフランスの監獄にて」)を書いた。クロボトキンはロシアの舊式監獄とフランスの新式監獄とを、いづれも親しく囚人として経験した。「監獄論」はこの経験の結論である。

10

やがて、「謀叛人」はその非軍國主義傳道のために發行を禁止され、「謀叛」の名の下にパリでその發行をつづけることとなつた。

クロボトキンは出獄後イギリスに行つて、二三の同志と一緒に「自由」といふ月刊新聞を創めた。そして同時に、入獄のために中止した無政府主義論の著述にとりかかつた。

「謀叛人の言葉」は主として無政府主義の批評的方面を取扱つたものであつた。で、こんどは、

無政府主義そのものの説明と共に、無政府主義の建設的方面を、豫想し得るかぎり描き出すことに努めた。

その前者は、一八九一年の『無政府主義の道德』、一八九五年の『無政府主義、その基礎と主張』、一八九五年の『無政府主義、その哲學と理想』等となつて現はれた。

そしてその後者は、始め『謀叛人』に連載され、のち更に詳述されて、一九〇六年の『パンの略取』となつて現はれた。

これらの研究は、クロボトキンをして、今日の文明諸國の經濟的生活について、或る點を更に十分に研究させた。従來、多くの社會主義者はかういつてゐた。今日の文明社會では、實際吾々はすべての人の物質的幸福を保證するに必要な以上に生産してゐる。ただいけないのは分配だ。で、もし社會革命が起きれば、社會はいま資本家の手にはいつてしまふ剩餘價值や利潤を自分の手に收めることになるので、各人はただその工場に歸りさへすればいいのだと。

しかし、彼はそれと反對にかう考へた。今日の私有財産制度の下では、生産そのものが間違つた方向に進んでゐて、十分な生活のために最も必要なものの生産をないがしろにし、または往々

妨げてゐる。その如何なる必要品もすべての人の幸福を保證するに要する以上には生産されてゐない。よく話に出る生産過剰といふのは、民衆が今日の相應な生存のために必要だと見なされてゐるものすら買へないほどに貧乏だ、といふことを意味するに過ぎない。あらゆる文明國では、その農工業のいづれの生産も、すべての人の充足を保證するよう更に大いに増さなければならずまた容易に増すことができるものだ。

そして、この研究は、近代農業の可能性と、何人にも筋肉労働と頭腦労働とを同時に行はせる教育の可能性とを考へさせるに至つた。彼はこの考へを雑誌『十九世紀』に連載した論文の中に詳述し、のち『田園、工場、職場』といふ題で單行本として出版された。

要するにこの『田園、工場、職場』(一八九八年)は、現代社會の農工業における或る傾向を説いて、その傾向の助長の上に無政府主義の經濟的可能性を論じたものである。

なほ、もう一つの大問題が彼の注意を集中させた。ダーキンの「生存競争」といふ定式が、その多くの祖述者によつて、しかもハクスレーの如きその中の最も聰明な人によつてまでも、どんな結論に導かれてゐるかは、周知の事柄である。文明社會におけるどんな醜惡事でも、白人といはゆる劣等人種との、または「強者」と「弱者」との關係のどんな醜惡事でも、この定式の中に

その口實を見出さないものはない。既に彼は、クレエルヴォ（監獄）滞在中に、動物界における「生存競争」の定式そのものと、その人類社會への適用とを全部修正する必要を考へた。この方面についての二三の社會主義者がやつた企ては、まだ不十分だと思はれた。そのとき彼は、ロシアの動物學者ケスレル教授の一講演の中に、この生存競争の法則についての本當の説明を見出したのである。

ケスレルはいふ、「相互扶助は相互闘争と等しく自然の一法則である。そして一種の進歩的進化のためには、前者の方が後者よりも遙かに重大である」この數言——それは不幸にも僅かに二三の實例で證明されただけで、先きにもいつた動物學者シエフェルストフがそれに更に二三の例證を加へたに過ぎないものであつた——が、クロボトキンにとつてはこの全問題の鍵となつた。そして一八八八年に、ハジスレエがその兇暴なる論文「一宣言、生存競争論」を公けにしたとき、クロボトキンは動物界及び人類社會における生存競争についてのその見方に對する駁論と、數年間貯へてゐた材料とを、人の讀めるやうな形にまとめようと決心した。彼はそのことを彼の友人等に話した。しかし「弱者は禍なるかな」といふ嘆聲の意味に「生存競争」を解釋することが、科學によつて啓示された自然の命令のやうになつて、それが殆ど宗教のやうに深く根ざして

ゐた。ただ二人だけが自然現象のこの誤認に對する彼の反抗に賛成した。

『十九世紀』の主幹ジエムス・ノオルズはその優れた燭眼から、すぐに問題の要點を捉へて、本當の若い元氣でそれを始めるようにクロボトキンに勧めた。もう一人は、デアキンがその自叙傳のなかに彼のかつて會つた最も聰明な人の一人だと書いてゐる、エチ・ダブルユ・ベエツであつた。ベエツは地理學協會の幹事をしてゐた。それでクロボトキンも彼を知つてゐた。クロボトキンがその話をする時、ベエツは喜んでいつた。

「さうです、本當にしつかりとお書きなさい。それが本當のデアキニズムです。彼等がデアキンの思想からつくりあげたことは、考へるだけでも恥しいことです。お書きなさい。それが發表されるときには、あなたが發表してもいいやうな風に手紙を書いてあげませう。」

クロボトキンにはこれほどいい奨励はなかつた。で、すぐに仕事を始めて、「動物界の相互扶助」、「蒙昧人の相互扶助」、「野蠻人の相互扶助」、「中世都市の相互扶助」、「現代の相互扶助」の題で、『十九世紀』に發表した。

この諸論文は、一九〇二年に『相互扶助論』の名の下に一まとめになつて出版された。

『相互扶助論』はクロボトキンのいろんな著述の中でも恐らく彼が最も骨を折つた、そしてその

無政府主義論の科學的根柢をつくつたものである。

クロボトキンはこの研究によつて、その社會哲學の基調とする自由發意と自由合意とが、動物の相互扶助生活の中に、また人類史の民衆生活の中に、常に最も有力な進化の要素となつてゐることを見た。無政府主義が人類史を一貫する一大傾向であることを見た。

なほこの研究の間に、野蠻時代や中世自由都市の諸制度と親しむための研究が、更に重要な一問題、即ち國家がヨーロッパに最近に體現されて以來三世紀間歴史の上にとめた役目の上に、彼を導いた。そしてまた、文明諸國人の間の相互扶助的諸制度の研究は、人間の正義觀及び道德觀の進化論的基礎の研究に彼を導いた。

この國家の研究は、先きにいつた『國家論』（詳しくいへば『國家、その歴史的役目』）及び『裁判論』の中に、また人間の正義觀及び道德觀の研究は、やはり先きにいつた『無政府主義の道德』の中に發表された。

—

最後に私は、クロボトキンが國際労働者協會内の一大傾向から學んだといふ、その傾向の實際的及び理論的方面について、述べておかう。

新しい社會が文明諸國に芽生えつつある。それが舊い社會に代はらなければならない。新しい社會とは平等人の社會だ。その平等人は、自分の腕や頭を、彼等をいい加減に選んで雇ふ人間共に、賣らなければならぬやうなことはないだらう。すべての人の最大限の幸福を得るために、あらゆる努力を協力させるよう組立てられた組織の中で、自分の知識や能力を生産に應用することができるだらう。そして各人の個人的發意のための廣い自由な餘地が残されるだらう。

この社會は、各々の聯合の要求するあらゆる目的のために結合した、多くの團體に組織されるだらう。あらゆる種類の——農業上、工業上、知力上、藝術上の——生産のための同職聯合。住宅や、瓦斯や、食料や、衛生品などを供給する消費のための自治町村。この自治町村の聯合。自治町村と同職團體との聯合。及び最後に、或る一定の土地に限られてゐない經濟上、知力上、藝術上、道德上の欲望を満足するために協力する人々より成る、全國內もしくは數ヶ國內にわたる大團體。そしてこれらすべての團體は、今日ヨーロッパ諸國の鐵道會社や遞信省が、或は單なる

利己的目的に驅られ、或は往々仇敵同士の違つた國家に屬してゐながら、中央鐵道政府とか中央通信政府とかいふものなしに協力してゐるやう、または氣球學者等やアルピン俱樂部やイギリスの水難救濟會や小學校教師や自動車乗りなどが、科學上の目的や或は單に娛樂上の目的のためにあらゆる仕事を協力してゐるやう、互ひに自由合意の方法で直接に協力するだらう。新しい生産や發明や組織の發達は全く自由であるだらう。個人的發意は獎勵されるだらう。統一や中央集權の傾向は排斥されるだらう。

それにこの新社會は、變へることのできない一定の様式に結晶することなく、絶えずその光景を變へて行くだらう。生きた、進化して行く、有機體であるだらう。統治團の必要は感じられないうだらう。自由合意と聯合とは、統治團が今日自分の仕事と見なしてゐる一切の仕事を、代つてすることが出来るだらう。そして各團體間の衝突の原因が著しくその數を減じて、なほ生じ得べき衝突は仲裁裁判に附することが出来るだらう。

國際労働者協會内の誰も、彼等が求めてゐるこの變化の大きさや深さを小さくは見なかつた。土地や工場や鑛山や住宅などの私有制度が工業の進歩を保證する手段として必要であり、また貨幣制度が人間を働かせる手段として必要であるとする今日の學説が、所有權や生産を社會化する

といふやうなものと高い思想に、すぐに讓歩する氣づかひはない、といふことは彼等もわかつてゐた。私有財産についての今日の思想が變はる前に、くどくどしい傳道と、長い間の引續いての鬭争と、今日支配する財産制度に對する個人的及び集合的の叛逆と、自己犠牲と、社會改造の部分的企圖と、部分的革命を経なければならぬ、といふことも彼等は知つてゐた。また今日吾々が皆なそれに養はれてゐる強權の必要についての思想は、文明人が皆なすぐに棄ててしまふこともあるまいし、またそんなことはできもしない、といふことは彼等もよくわかつてゐた。本當は自分等の社會的感情や習慣から出たものを、その支配者の法律から出たものと思ひ違へてゐた、といふことが人間にわかるまでには、長い年月の傳道や、強權に對する幾度ももの叛逆的行爲や、今日歴史から引出して來るいろんな教義の全部の修正を経なければならぬ。彼等はそんなことは皆なよく知つてゐた。が、彼等はまた、この二つの方面の改造を説きつつ、自分が人類の進歩の潮流に乗つてゐるのだ、といふことも知つてゐたのであつた。

クロボトキンは労働階級の人達やまたそれに同情する知識階級の人達と親しく交はつて、その人達が自分の自由をその一身の幸福よりも重く見てゐることを、すぐに知つた。五十年前には労働者はその物質的幸福を與へられるといふ約束と交換に、あらゆる種類の支配者に、專制的暴

君にすらも、その一身の自由を賣つた。しかし、今はもうそんなことはない。選挙された支配者に對する盲目的信仰といふやうなことも、ラテン諸國の労働者の間には、その支配者が労働運動の最もいい首領等の中から選挙されたときにすらも、だんだんに消滅しつつあつた。「吾々が何を要求してゐるかは、まづ吾々自身が第一に知らなければならぬ。さうすれば吾々は、吾々自身でそれを最もよく成就することができる」といふのが、彼等の間に廣く擴がつてゐる——普通に人の思つてゐるよりも遙かに廣く——思想であつた。國際労働者協會の規則の中の「労働者の解放は労働者自らが成就しなければならない」といふ言葉は、一般に共鳴されてその心の奥深くに根を張つてゐた。

一八七一年二月二十五日に選出されたパリ・コムン政府委員ほどに、あらゆる進歩した政黨を明白に代表した政府は、いまだかつてなかつた。ブランキ派も、ジャコビン派も、國際労働者協會派も、皆なそこにくまなく權衡して代表されてゐた。しかるに労働者自身はまだ、その代表者等に強要するほどの明白な社會改革の思想をもつてゐなかつたので、コムン政府はこの方向には何んにもしなかつた。されば社會主義の成功そのもののためにも、個人の自主、自恃、自由發意の思想、即ち無政府主義の思想が、所有權や生産を社會化する思想と相並んで説かれざるを得

なくなつた。

各個人の思想や行爲の表現を全く自由にすれば、主義の多少の誇張が生ずる、といふことは彼等も確實に豫想してゐた。しかし彼等は、また思想や行爲の腹藏のない正直な批評に支持される社會生活そのものが、いろんな思想を脱殻させて、避けがたい誇張を免れしめる最も有力な方法になると信じてゐた。そして經驗はその正しいことを證據立ててゐる。實際彼等は、自由はその一時的弊害の最も賢明な治療法だ、といふ古い言葉に従つて行動してゐた。

人間には、まだその本當の値打は世間にわかつてゐないが、無理強ひに維持されて來たのではない、そしてその無理強ひには屈しない社會的習慣の眞髓がある。過去からの遺傳がある。人類の一切の進歩はそれに基づいてゐる。人類が肉體的にも精神的にも墮落し始めないかぎり、この習慣と遺傳とはどれほど非難され、またどれほど一時的の反抗に出遭つても破滅されることはないだらう。

それと同時にまた、これほどの變化は一人の天才の臆測から生じ得るものではなく、一人の人の發見でもあり得ず、民衆の建設的行爲から出なければならぬ、といふことも考へてゐた。丁度、中世初期にできた訴訟法や、財産共産制度や、ギルドや、自由都市や、國際法の基礎などが

民衆によつて創り出されたやうに。

多くの先輩は、或は強權の原則に基づく、或はごく稀れに無政府の原則に基づく、理想の社會を描かうとした。ロバート・オーエンとフウリエとは、ローマ帝國やローマ教會に型どつたピラミッド式社會の理想に反對して、有機的に發達する自由社會の理想を發表した。ブルウンはこの事業をつづけた。そしてバクウニンは、その歴史哲學についての廣い明晰な理解を現社會制度の批評に適用して、いはゆる「破壊しつつ建設」した。しかし、これは皆な要するに準備的事業に過ぎなかつた。

しかるに國際労働者協會は、この實際的社會學の諸問題を労働者自身に訴へて解決する新方法を始めた。協會に加はつてゐる知識階級の人々は、労働者に世界各國の事情を知らせ、労働者の獲得した結果を分析し、そして後には労働者とその結論をつくるのを助けるだけの仕事をした。彼等は「社會はかうでなければならぬ」といふやうな理論的見解から理想社會を描き出さうとはしなかつた。彼等はただ労働者に勸告して現在社會の諸弊害の原因を探究し、その討論會や大會で吾々がいま生活してゐる社會よりもつとよい社會組織の實際的状況を考察するよう、促がしただけである。國際大會で起つた問題はあらゆる労働團體の研究題目として選ばれた。即ちそ

の年ぢうに、その問題は全ヨーロッパに、各支部の小集會で、各自の職業やその地方の十分な知識をもつて討論された。そしてこの各支部の結論が各聯合の次ぎの大會に提出された。そして最後に、それが更に緻密なものとなつて、次ぎの國際大會の討議に附せられた。

彼等が憶がれてゐる新社會の構造といふのは、かくして理論においても實際においても、上からではなく下からつくり出されたのだ。

クロボトキン自身が、かうした都合のいい事情の下におかれてあつたので、この無政府主義が自由社會の單なる概念や單なる行動方法よりもより以上のものを含んでゐる、といふことがだんだんわかるやうになつた。無政府主義は、人類社會についての諸科學に用ひられて來た形而上的もしくは辯證的方法とは全く違つた方法で進まなければならない、自然哲學及び社會哲學の一部分である。即ちそれは諸自然科學と同じ方法で取扱はれなければならない。しかしそれは、ハーバート・スペンサーがやつた單なる類推法の懸筆餘のやうな基礎の上ではなく、歸納法を人類社會の諸制度の上に適用した、健實な基礎の上でなければならない。そしてクロボトキンはこの方面に彼のできるだけの最善を盡した。

クロポトキンの生物學

—相互扶助論—

このころ丸善に、ビョトル・クロポトキンの名著『相互扶助』(Mutual Aid, by Peter Kropotkin)の新版が來てゐる。これは一九〇二年に初版を出して、その後殆ど毎年のやうに版を重ねてゐたのだが、昨年以來の大戦争に關する思想界の必要に迫られて、本年の初めに從來の版よりも更に四倍安の五十錢本となつて現はれたのだ。

今日の戦争と共に、殊にドイツの態度を論評するために、例のトライチユケヤベルンハアデイの思想が、全世界に喧しく是非されてゐるといふよりもむしろ、事實において殆ど全世界を風靡してゐる。トライチユケヤベルンハアデイの根本思想は、優勝劣敗である。弱肉強食である。暴力と策略とによつて勝敗を決する生存競争である。戦争に附隨する一切の出來事が、この思想に

よつて是認されると共に、戦争そのものもまた、等しくこれによつて是認される。そして甚だしきは更に積極的に、進化は競争にある、闘争にある、戦争は文明を生み出す勢力である、どうしても缺くことのできない、最も重要な生物學的必要である、とまで主張される。『相互扶助』の新版は、この時代思潮に對抗して、新しき意味の生存競争、即ち相互扶助の思想を普及するために現はれたのだ。

戦争ばかりではない。大小のあらゆる社會現象は常にこの生存競争の名によつて、立ちどころに解釋され、また是認される。

ダーキンが『種の起原』を公にして以來、進化論は一切の科學及び哲學の根柢となつた。そしてこの進化論の論據である生存競争もしくは適者生存は、宇宙間のあらゆる問題を解く合鍵のやうになつた。しかしこの鍵は、科學者や哲學者の手によつてのみ扱はれるのではない。殆ど何人によつても、遠慮會釋なく、どこにでも使用される。殊に如何なる社會現象を觀察し論斷するに當つても、自然科學の術語中、この生存競争といふ言葉ほど廣く應用されるものはない。

生物學の事實もしくは法則を、そのまま社會科學に應用することの可否は、今ここに説かなし。けれども、從來一般に説かれてゐるやうな生存競争が、果して生物界もしくは人類界の全事

實であり、またそれが進化の全要素であるだらうか。そしてクロボトキンの『相互扶助』はこれに如何なる解答を與へてゐるだらうか。私はこの名著を日本の讀書界に推奨すると共に、次ぎにその大要を紹介したい。

二

私はクロボトキンの相互扶助説を「生存競争についての一新説」であるといつた。しかし嚴密にいへば、これは新説ではなく、むしろダアキニズムの正解もしくは補充である。

もともとダアキンの用ひた生存競争といふ言葉の中には、廣狹の二程義がある。即ちその『種の起原』の中に、これは廣い比喩的の意味であつて、個々の生物が互ひに食物を爭奪するやうなことばかりでなく、多くの生物が相依り相扶けて、外界の境遇と戦ふが如き場合を含むものである。また、生物個々の生存の競争ばかりでなく、なほ子孫を残す上の競争をも含むものである。と明かに説いてゐる。なほダアキンは、この狹義の生存競争を過重してはならぬことを戒めて、その『人類の由來』の中には、生存競争といふ言葉の本來の廣い意味を、さらに詳かに説いてゐる。如何に多くの動物の仲間では、食物に對する爭奪が跡を絶つてゐるか。如何に仲間同志の闘

争に代つて協同行はれてゐるか。またその結果として、如何に知力と道徳との發達を來さしめてゐるか。そして如何にそれが、やがて種族生存の第一條件となつてゐるか。ダアキンはこれ等の幾多の事實を例證してゐる。なほ彼は吾々に教へていふ。適者とは決して體力の最も強健なもの、もしくは性情の狡猾なものではなく、ただ社會全體の幸福のために、強者も弱者も一致協力して、相依り相扶ける道を知つてゐる種族であると。

けれどもまたダアキン自身は、前にいつた二者の中に、殊に狹義の生存競争、ただ食物を求めするための個々の闘争といふ一面の説明材料のみ主として蒐めてゐるので、他の更に重要な一面が全くその際に掩はれてしまつた。そして廣義の生存競争を全く忘れてしまつたかの觀がある。ダアキン以後の進化論者になると、この弊害が益々甚だしくなつて、動物世界は血に渴いた餓鬼共の寄り集まつた修羅場である、個々の利害のために断えず残忍な闘争をするのが生物界の動かすべからざる原則である、とまで論ぜられるやうになつた。そして生存競争を、この狹義におし止めて、更にそれを人類社會にまで應用したものは、ダアキニズムの最も有力な説明者として認められてゐる、彼のハクスレエその人であつた。彼は『生存競争とその人類に及ぼす影響』の中に原始人類について次の如くいつてゐる。

「最も弱きもの、最も愚かなるものは死滅し、最も兇暴なるもの、最も憚憚なるもの、即ち周囲の境遇と對抗するに最も適したものが生き残る。人生は絶え間のない自由闘争の巷であつた。そして家族といふ制限された一時的の關係以外においては、ホツプスの説ける個人對萬人の戦争が實に生存の常態であつたのである。」

かくしてまたハクスレエは、今日の社會制度の根本たる財産の私有、及びその結果たる貧富の懸隔を承認した。日本でも、加藤弘之博士、丘淺次郎博士などは、このハクスレエ流の好代表者である。そして遂に人類社會の日常生活にまでも、一々この生存競争といふ言葉があてはめられて、友人を賣つて勢力を得るのも、節を屈して富を成すのも、他人を殺すのも、自ら縊るのも、ありとあらゆる人間生活は悉くこの生存競争の一語に約められるようになった。自分さへよければ他人はどうでもいい、むしろ他人を殺しつつ自分を生かす、といふ賤劣な利己主義がいよいよ科學的祝聖を受けるやうな觀を呈して來た。

三

クロボトキンは、ダアキニズムの正解もしくは補充たる、この相互扶助説の創見者ではない。

ヘツケルは詩人ゲーテを進化論の創見者であるといつてゐる。實際、ゲーテは多分に博物學的天才をもつてゐた。この相互扶助の思想の如きも既に彼の心の中に宿つてゐたのである。今から九十年近い昔であつた。或る日、ゲーテの友人のエツケルマンが彼を訪ねて來て妙な出來事話をした。それは、このエツケルマンの飼つてゐた二羽のみそささいの雛が籠から逃げ出して、その翌日駒鳥の翼の下にその子供と一緒に抱かれてゐた、といふことであつた。ゲーテはこの話に非常に感激して、「もしこのやうな事實が自然界を通じて一般の法則となつてゐるといふことがわかれば、今まで解くことのできなかつた宇宙の多くの謎も釋然としい解けてしまふだらう」と叫んだ。そして動物學者であるこのエツケルマンに、熱心にその研究をすすめて、必ずそこに自然の寶庫を開く鍵が見出されるのだと促したのであつたが、不幸にしてこの研究は着手されなかつた。しかし、その後ブレエムが、その著書の中に動物の相互扶助についての豊富な材料を蒐めてゐるのは、確かにゲーテの言に動かされたものであらう。

けれどもゲーテが想像によつて得た漠然としたこの思想も、その後五十餘年を経て、ロシアの動物學者ケスレルの科學的研究によつて、やうやく闡明されかけて來た。即ちケスレルは、一八八〇年の初めロシア博物學者大會の席上で、『相互扶助の法則について』といふ題でその研究

の結果を發表した。このロシア大學總長ケスレルは、ダアキンの進化論を繼承した學者の中で、生物の相互扶助をもつて自然の一法則であり、かつ進化の主たる一要素であることを認め、恐らくは最初の人であつたのである。

ケスレルは、動物學から出たかの生存競争といふ言葉が、多數の學者によつて濫用され、また少くとも過重されてゐたのに對して、「老動物學者」として黙つてゐられなくなつたのだ。彼はその講演中に説いていふ。

「動物學者や、また人類に關する諸科學の學者等は、残忍な生存競争の法則のみを絶えず主張して、別に相互扶助といふ法則のあることを忘れ、またこの法則が少くとも動物にとつては生存競争の法則よりも遙かに重要なものであることを看過してゐる。」

彼はなほ、動物がその子孫を繁殖させる必要上、互ひに集合することを説いて、「個體が結合すればするほど動物は互ひに助力し合ふようになり、種の存続と智力の増加との機會を愈々多からしめるものである」と主張してゐる。そして、また彼は、「動物の各綱、殊に高等の綱に屬するものは、必ずこの相互扶助を實行してゐる」と説き、甲蟲や蝶類やその他種々の哺乳類の社會生活から得た實例を擧げて、自説を證明してゐる。最後に彼は、人類の進化の上にもこの相互扶

助がいはゆる生存競争よりも重要な役目をしてゐることを説いて、次の如く結論してゐる。
私は決して生存競争を否定するものではない。が、動物界の進化發展、殊に人類の進化發展は

相互闘争よりも相互扶助によつて、より多く促されることを主張したいのだ。元來あらゆる生物は二つの根本的要求をもつてゐる。即ち自己の榮養と種の繁殖とがこれである。前者は動物を相互闘争と相互殺戮とに導き、後者は相互の親近と助力とに赴かしめる。しかし私はむしろ次の如く主張したい。即ち有機界の進歩においては、個體間の相互扶助がその相互闘争よりも遙かに主要なものである、と。

ケスレルの講演は、大會に出席したロシアの博物學者の心を大いに動かした。そして、わがクロボトキンもまた、その中の一人であつたのだ。彼はダアキンの『人類の由來』の中の或る部分を少しく敷衍したに過ぎない、この講演に刺戟されて、それ以來、この思想を發展させるための材料の蒐集に志したのであつた。

四

しかしクロボトキンは、ケスレルのこの講演によつて、始めてこの問題に注意を向けたのでは

ない。如何なる思想も事實に基づかせ、また事實に照らし合はして見なければやまない、従つて寸時も事實の觀察を怠ることのない、眞の科學的精神に浸つてゐた彼は、既によほど以前からダアキニズムのいはゆる生存競争に疑惑を抱き、かつ相互扶助の大思想をその博大な心の中に萌してゐたのであつた。彼はその『相互扶助』の序論の中におよそ次の如く述べてゐる。

私が青年時代に東シベリア及び北滿洲を旅行した際、最も私に深い印象を與へた動物生活の二方面があつた。一方に私は、幾多の動物の種が、これらの地方の峻酷なる自然に對して、激烈なる生存競争を營みつつあるのを見た。即ち自然力のために動物の生命の上に定期的な大破壊が行はれ、従つて私の觀察し得た廣大な地域に動物の數の甚だ稀薄であるのを見た。そしてなほ他方に私は、動物の數の極めて稠密なる二三の地方においても、生存の方法を求めるための激烈なる闘争を熱心に見つけ出さうとしたのであるが、同種の動物間には遂にそれを發見することができなかつた。しかるにこの食物を求めるための同種間の闘争といふことは、大多數のダアキニストによつて生存競争の主なる特質であると認められ、また生物進化の主たる要素であると考へられてゐたのである、と。

冬の終り頃になると、ユーラシアの北部地方では恐ろしい吹雪が吹きまくつて、それにつづい

て氷のやうな霜が全土を掩うてしまふ。そして、この吹雪と霜とは毎年のやうに百花開き百蟲遊ぶ五月の中頃になると再び逆襲して来る。また七八月の頃になると、初霜初雪が降つて、幾百萬の昆蟲や、鳥の二番目の卵が一時に屠られてしまふ。もつと溫暖な地方でも八九月の頃になるとインド洋の氣候風が運んで来る水蒸氣が瀧のやうな豪雨となつて、ヨーロッパ諸國を合はしたほどの大平原が一面の洪水に漂はされる。更に十一月になると、ドイツとフランスとを合はしたほどの地域が大雪の下に埋もれて、全く反芻類の動物が棲むことのできないやうになり、無数の動物が餓死する。

クロボトキンはその旅行の間に、かくの如き氣候風土の中に生存する動物の生活を、北部アジアに觀察し研究した。ダアキンはこの峻酷なる自然に對する闘争、即ち生物が自然力のためにその繁殖を制限されてゐる事實を「繁殖過多に對する自然的障害」といつてゐるのであるが、クロボトキンはこの障害が動物界に重要な働きを及ぼしてゐることを認めないわけに行かなかつた。しかしそれと同時にまた、いはゆる進化論者の説く「生存の方法を求めるための同種間の闘争」といふ事實が、よし或る特殊の事情の下には行はれてゐるとしても、とうてい先きの自然的障害と比較されるほどのものでないことをも知つた。動物の數が多過ぎるよりは、むしろ少な過ぎる

といふのが、地球の大部分を占める由漢たる北アジアの到るところに見出される著しい事實である。かく動物の数の少な過ぎるところに、多くの學者がいふやうな、同じ種の間の食物と生存との恐ろしい闘争が行はれる筈がない。従つてまた、この闘争が新種をつくり出す進化の上に重要な役目をするといふ筈がない。

クロボトキンは一面にかくの如き疑惑を抱くと同時に、また他の一面においてこの疑惑を益々確めると共に、別個の法則を思はしめる新事實を發見した。即ち到るところの湖水地方に、數十種數百萬の動物が、その子孫を育てるために、湖畔に群棲してゐる。また齧齒類動物が一團體を成して棲居してゐるところがある。また無數の鳥類が一群を成して大移住をする。北方の野や山が大雪に埋もれる頃になると、幾千幾萬といふ鹿が遠近のあちこちから集まつて、黒龍江の淺瀬を求めて南方へ涉つて行く。クロボトキンはこれらの光景を眼前に見ることに、食物に對する争奪よりもむしろ相互の扶助といふ大事實が動物界に行はれてゐる事實を知り、かつこの事實が動物の生命を維持し、その種を保存し、またその將來の進化を助ける最大要素となつてゐることを感じさせられた。

なほクロボトキンは、トランスバイカリア地方の半野生的の牛馬や、或は各所の野生反芻動物

などを見て遂に次の如き結論を下し得るほどになつた。「動物が前述の如き自然的障害に遇つて食物の缺乏と戦つたあげくには、かくの如き災害に惱まされた動物の全種は、その健康と氣力との上に大打撃を被つて、容易に起つことのできない悲境に陥る。さればその種の向上的進化が、かかる激烈なる闘争の時期の間に萌したものはとうてい信じ得られない。」

従つてクロボトキンはまた、その後ダーウィニズムと社會學との關係を研究するときにも、この問題についての諸學者の説に服することができなかつた。人類は進歩せる能力と學問とをもつて相互の間の生存競争の激しさを減ずることができる、といふ點は諸學者の等しく力説するところであつた。けれども、同時にまた彼等は、生活の方法を得んがために一動物が同種の他の動物と闘争するといふこと、及び一人間が他の人間と闘争するといふことを、永久の「自然の法則」として承認する。しかしクロボトキンにとつては、同胸間に生活のための残忍な闘争のあることを信じ、またこの闘争が進化の一條件であると認めざるは、まだ證明を經ない事實を信じ、また直接に觀察しない事物を認めることとなるのであつた。

そして、このときにクロボトキンは、かのケスレルの講演によつて少なからぬ感動を與へられ一道の光明がその眼前に輝くのを見たのであつた。爾來、彼は熱心に事實の蒐集に努めた。彼は

自然界の一法則としての、また進化の一要素としての、相互扶助に關する著書の出版が、必ず學術界の一大缺陷を補ひ得るものと堅く信じたのであつた。

一八八八年、ハクスレエが先きにいつた『生存競争とその人類に及ぼす影響』を公にするや、クロボトキンはその自然界の事實を甚だしく誤り傳へてゐるのに憤激して、當時第一流のこの進化論者に向つて一大辯駁書を呈することに決心した。そして一八九〇年から九六年にわたつて、毎年一二回づつ雑誌『十九世紀』に發表したのがこの『相互扶助』である。

五

『相互扶助』は「動物界の相互扶助」、「蒙昧人の相互扶助」、「野蠻人の相互扶助」、「中世都市の相互扶助」、及び近代社會の相互扶助」、五篇より成る。

相互扶助をもつて單に生物界の事實もしくは法則として論ずるのならば、「動物界の相互扶助」一篇で事は足りるのであつた。けれども先きにいつた如く、進化論者はいはゆる生存競争の觀念をもつて直ちに哲學、史學、社會學等の動かすべからざる基礎の如く認めてしまつた。従つてクロボトキンは動物の諸階級を通じて、相互扶助が重要な役目を演じてゐることを論じた後に、更に

人類の進化におけるこの要素の價值をも論じなければならなかつた。そしてまた、當時ハナバト・スペンサアの如き、動物間の相互扶助の重要であることを認めても、なほ人類間にそれを認めることを拒んだ進化論者が多かつたので、この問題を論ずることが益々必要であつたわけである。原始人の間では各個人とすべての人との戦争といふことが、人生の全法則であつた、と彼等は説いてゐた。そこでクロボトキンは、ホツプス以來十分な批評を経ないであまりに安々と繰返されて來たこの斷定が、果して如何なる程度まで人類進化の實狀と一致し得るかを論證するため、更に蒙昧時代と野蠻時代とに各々一篇を献げたのであつた。

そして相互扶助の諸制度が蒙昧人及び野蠻人の創造的天才によつて、如何に廣くかつ如何に力強く人類最初の氏族時代及び共產村落時代に發達したかを説き、これらの制度が如何に多く次の進歩發展を助けるかに思ひ及んだとき、クロボトキンは更に、有史以後の社會にその探究の歩を進める必要を感じた。殊に彼は、歐洲史に暗黒時代の名をもつて呼ばれてゐる中世のいはゆる自由都市に、最も興味深い觀察を向けた。彼にとつてはこの暗黒時代がかへつて光明時代であつたのだ。實にこの「自由都市の相互扶助」一篇は、彼が最も努力してその概況と近代文明に及ぼした影響とを記述したところであり、かつ最も創見と暗示とに富んだ一大文章である。

最後にクロボトキンは、長い進化の歴史の間に人類が承継いで来た相互扶助の本能が、この本能の發達に最も都合の悪い制度の下にある今日においてすらも、なほ社會の根幹をなしつつ活躍する事實を説いてゐる。

この蒙昧時代から近世社會に至る四篇は、從來の史書がただ主權者の逸話と戰爭の狀況とを記したに過ぎない歴史以外に、なほ別個の、しかも更に重要な歴史の存在することを示した一種の人類史である、社會史である。かくして本書は生物學や史學や社會學に新しき材料と觀念とを與へたほかに、更に進んで倫理學や哲學に新しき方向を暗示する。

從來では、愛や同情や犠牲が、道徳もしくは社會心の根本基礎とされてゐた。けれども動物の社會心をもつて偏に愛情と同情とに歸するのは、かへつてその普遍性と價值とを減殺するものである。人間の道徳の基礎を偏に愛と同情との上においたのでは、全體としての人間の情緒を解釋することができない。愛や同情や犠牲は、確かに道徳的感情の向上的進化における、重要な要素であるに相違ない。けれども社會が動物や人類の間に成立する基礎は、決して愛でもなくまた同情でもない。これは更にそれらの感情の奥底に、極めて長い進化の行程を経て動物と人間との裡に靜かに發達して来た或る本能である。そしてこの本能が、動物及び人間に、相互扶助の精神の

一大勢力であることを教へ、社會生活を営むことによつて歡樂を享樂し得ることを教へたのである。更に詳しくいへば、社會心もしくは道徳の基礎は、相互扶助が各人に與へる力の無意識的承認である。各人の幸福と萬人の幸福との密接な關係の無意識的承認である。また自己の權利と等しく他人の權利をも尊重しなければならぬといふ、正義の感の無意識的承認である。この廣いかつ必然の基礎の上に、更に高尚な道徳的感情が發達する。

クロボトキンの『相互扶助』は、ダーキンの『種の起原』と同じく、殆ど全篇事實の羅列である。けれども、この書に現はれた動物や人間は、著者の議論に都合のいいやうに觀察されたものである。動物の社會的性質のみが力説されて、その非社會的、利己的本能は全く閉却されてゐると非難する人があるかも知れぬ。クロボトキンはこの非難に對して答へた。

近時吾々は「苛酷な容赦のない生存競争」といふことをしきりに耳にする。即ち各動物はすべての他の動物と、各野蠻人はすべての他の野蠻人と、また各文明人はすべての他の文明人と、この生存競争を行つてゐるといふ斷定が、一信仰箇條となつてしまつた。で、何よりもまづ、この説に反抗して、人類も他の動物もそれとは全く異つた一面の生活を營んでゐるといふことを示す幾多の實例を挙げなければならなかつた。社會的性情が自然界に及び人類や動物の進化發展に與

つて重要性を示すことが必要であつた。そしてまた、この社會的性情が、動物に食物獲得の便宜と防禦力とを與へ、かつ動物の壽命を長からしめて、これによつてその勢力の増進を促したことが及びこの性情が人間社會に諸種の制度を與へてそれによつて自然力との激しき闘争に打ち勝たしめ、歴史の幾變遷の間に遂に今日の如き進化發展を遂げしめたことを、論證しなければならなかつたのである。即ち本書は、相互扶助の法則を進化の主要なる一要素として論じたもので、もちろん進化のあらゆる要素として、またその比較的價値を説かうとしたものではない、と。

六

ダアキンの『種の起原』に一貫する思想は、動物の各群の間に食物と安全とを求め、また子孫を残すための本當の競争、本當の闘争が行はれてゐるといふことである。彼は最大限度まで動物をもつて滿されてゐる地域のあることを屢々説き、かくの如き過度の繁殖から自然に競争の起ることを推論した。けれども、かかる競争の眞の證據を求めするために、詳かに彼の著書をひもといて見るときに、吾々はその書中に十分納得するに足るべき事實のないことを見出すのである。試みに「生存競争は同種の動物及びその變種間に最も激烈である」と題する項目を讀んで見るに、

ダアキンの平生に似ず。この項においては全く引例の豊富を見ることができない。同種の動物間の争闘については、この見出しの下にただ一つの實例すらも引かれてゐない。ただ當然の事實として論ぜられてゐるのみである。また近縁種の間の競争については、僅かに五個の實例を擧げてゐるに過ぎないが、しかもその中の一つは、今日では少くとも疑はしい事實となつてゐる。また同種の動物間の本當の競争の例として他の南アメリカの牛の話を用してゐるが、これは飼養動物の間から例をとつてあるので、大した價値のあるものではない。

かくダアキン自身の著書について見ても甚だ實例の少い、いはゆる生存競争は、空論に魅せられて實地の觀察を怠る、もしくは實驗室や動物園の中にその觀察の範圍を限つてゐる諸學者等によつて、ただ自明の理として承認されてしまつたのだ。けれども、一度吾々がこれ等の諸學者の書物を開き、また狭苦しい實驗室や動物園の中を去つて、森に入り野に出で山に登つて動物の生活を研究するならば、直ちに吾々は次の如き事實を看取せざるを得ない。即ち、數限りない争闘と殺戮とが動物の異なる綱の間に行はれてゐるのであるが、しかもそれと同時に、同じ程度にもしくはそれ以上に、相互扶助、相互支持、相互防禦といふやうな現象が、同種の動物間に、或は少くとも同一團體の動物間に行はれてゐる。社會的精神は相互闘争と共に自然界の一法則であ

る。もちろん、この法則の比較的價値を、よし大ざつばにせよ、數學的に評價するのは甚だ困難な仕事であらう。けれども、もし吾々が直接の實驗に徴して「絶えず互ひに争闘を事とするものと互ひに扶助し合ふものと何れが適者であるか」といふ問ひを自然界に發するならば、吾々は直ちに相互扶助の習慣を有する動物が正しく適者であるといふ解答を得るのである。それらの動物は確かに生残りのより多き機會を有し、かつ最もよく智力の發達を遂げてゐる。

今その無數の事實の中から、蟻の社會生活の一端を描いて、この『相互扶助』の紹介を終ることにしたい。

七

蟻の巢をとつてその生活状態を見るに、多くの著書に記されてゐる事實、即ち食物の運搬や、住居の建築や、子孫の育成や、蟻虫の飼養や、その他萬端の仕事が、いづれも他人の指揮や命令を待つことのない任意的相互扶助の原則の下に行はれてゐる。そればかりではない、蟻の多くの種では、各々の蟻が互ひに食物を分け合はなければならぬといふことが、その社會の最も重要な義務となつてゐる。それも倉に貯へてある食物や道で拾つた餌を分け合ふばかりではない。誰で

もその仲間のものから食物を乞はれた場合には、自分が飲みこんで既に半ば消化されてゐる食物をすら、いつでも吐き出して分けてやらなければならぬことになつてゐる。相異なる種の蟻、もしくは平素仇同士の巢に屬する二正の蟻が、たまたま途中で出遭つたと

きは、互ひに道を避けて近づかないようにする。これに反して、同じ巢または同じ植民團體の蟻が道で出遭へば、互ひに相近づいて、暫らくその觸鬚を揺り動かして挨拶をする。そしてそのいづれかが餓えてゐて他の一方が満腹してゐれば、餓えてゐる方の蟻は直ちに食物を要求する。そのときに食物を要求された方の蟻は、決してこの要求を拒むやうなことはしない。すぐ口を開けて身がまへをする。やがて透き通つた一滴の液體を吐き出す。そして、それをその仲間の蟻になめさせる。これはフォレルが始めて發見した事實であるが、この消化した食物を吐き出して仲間と與へるといふことは、蟻の社會の最も重要な一現象で、しかも稀れに起る珍奇な事實ではなく、餓ゑ渴えた仲間を救済した幼虫を養育するのに常に行はれてゐるのである。そして十分満腹してゐながら仲間の救済を拒むやうな利己的な奴があるときには、仲間はその蟻を敵として、もしくは敵以上の敵として取扱ふ。殊にそれが他の種との競争の最中でもあれば、敵に向つてゐた仲間等は直ちに踵を回へして、敵に對するよりも更に猛烈にこの貪慾ものを攻撃する。また

敵種の蟻に食物を分けてやるほどの俠氣のある蟻は、その敵から親友として待遇される。これらの事實は、フォレルやユウベルなどの最も精確な観察と周到な實驗との結果、もはや少しも疑ふ餘地はない。

蟻は一千種以上もあつて、ブラジルなどでは、この國は人間のものではなく蟻のものだといはれてゐるほど、繁殖の盛んな動物である。けれども、同じ巢または同じ植民團體の間には、いはゆる生存競争を少しも見出すことができない。尤も、異なる種の間には激烈なる戦争が行はれ、またかかる戦争にはずぶん殘虐な行爲も見出される。しかし一社會の間には、相互扶助、犠牲、献身等の道徳がその社會の動かすべからざる條規となつてゐる。白蟻や黒蟻はいはゆる生存競争を努めて排斥してゐるのであるが、彼等が自然界の優者となつたのも實はそのためなのである。

蟻の勢力の優れてゐることは、その巢を一見しただけでもわかる。彼等の巢の精巧なことは實に驚くべきものである。その建築物は、身體に相應して見れば、吾々人間の石造や煉瓦造りの大夏高樓よりも遙かに宏大である。敷石したその道路、圓天井を張つたその地下室、大廣間、穀物庫、いづれも皆な吾々の驚嘆に値しないものはない。また蟻は農業までも營んでゐる。現に穀物の畑をもつてゐて、時々收穫やら芽麥の製造などに従事してゐる。卵や幼虫を育てるにも、一

定の合理的方法により、また蛾虫を育てるにも特別の室を設けてゐる。この蛾虫は、リンネが「蟻の社會の牝牛」と名づけた、立派な家畜である。なほ蟻の勇氣と膽力とは、これらの優秀な智力と等しく、何人にも稱讚の辭を惜まじめない。そしてこれらの力は、すべて彼等がその刻苦勤勉の生活において實行する相互扶助の自然の結果である。

この相互扶助の生活を營んでゐる結果として、蟻の社會にはいま一つ著しい特徴がある。即ち各個體の間に自由發意心が驚くべく發達してゐることである。相互扶助は勇氣振興の第一條件たる相互信頼となる。そしてまたこの自由發意心は、勢力發達の第一條件である。この二つの精神が、動物界にも人類社會にも相互闘争よりも遙かに重要な進化の要素なのである。古い學者等は蟻の社會に帝王のあること、女王のあること、全體の仕事を指揮命令するものがあるといふやうなことを説いてゐた。けれども、ユウベルやフォレルなどの久しい歳月にわたる細密な觀察が公會全體の幸福のために、銘々が思ひ立つて、銘々がそのことに當るといふ自由な任意の行動をしてゐることが明白になつた。殊に人間の社會では權力命令の是非とも必要だといはれてゐる戦争ですらも、蟻の間ではやはりこの自由發意の原則によつて行はれてゐる。何等他人の意志權力の

交渉を受けないで、ただ萬事を各個人の自由合意と自由發意とによつて處理するといふこの生活こそ、やがて萬物の靈長と自ら誇つてゐる人間をも驚かすほどの智慧と能力とをこの小さな動物に與へたのである。

八

蟻はまた、この相互扶助の結果として、そのからだに殆ど何等の防禦器官をも備へてゐない。その濃い褐色は、如何にも敵の目につきやすい。その聳え立つた丘のやうな巢は、森や野の間に散在して、如何にも敵の目に立ちやすい。それなのに、その身には甲虫のやうな堅固な甲殻の防備もなければ、またその唯一の武器とたのみ刺針すらも、大して恐るべきものではない。かつ、蟻の卵と幼虫とは、森に棲つてゐるたいいていの動物が、珍味して舌鼓を鳴らすところのものである。それにもかかはらず、幾千のその種は動物界の大部分を占めるほどに繁榮して、蟻征伐を専門とする飼食獸の餌食になるものすら極めて少い。

なほ、この小さな虫は、同じ森や野の中に棲つてゐる、大きな強い動物共から、恐るべき敵として憚られてゐる。或るとき、フォレルは一袋の蟻を野原に放して見た。すると、蟋蟀は、自分

の住居の穴を蟻の掠奪するにまかせて、まづ第二に逃げ出した。かまきりもきりぎりすも四方八方に逃げ失せた。蜘蛛や甲虫は獲物を棄てて僅かに身をもつて通れた。遂には蜜蜂の巢までも蟻の占領に歸してしまつた。かくの如き蟻の力はどこから出て來たのであらうか。それはいふまでもなく、その相互扶助からである。相互信頼からである。最も進歩した白蟻の種は暫らく除いてその他の蟻でもなほ勢力の上では、昆虫界の第一に位してゐる。そして、蟻の勇氣に匹敵することのできるのは、最も勇敢な脊椎動物のみである。かつダアキンによれば、「蟻の脳髓は、人類の脳髓にも優る、最も精巧なる細胞より成る。」

尤も白蟻や黒蟻は、まだその一切の種を包容する大團結を組織するといふやうな、進歩した思想には達してゐない。彼等の社會本能は、一個の巢といふ範圍以外に、殆ど及ぶことがない。それでも二つの異なる種に屬する二百葉あまりの植民團が、タンドル山とサレエブ山とに見出されたことを、フォレルは述べてゐる。なほフォレルによれば、この二種の植民團の各員は、互ひに相親しんで、防禦同盟を結んでゐたといふ。またマツクはペンシルヴァニアで、千六百葉乃至千七百葉の蟻が一團結を形づくつて、互ひに相親しんでゐるといふ驚くべき事實を發見した。またベーツは二三種の白蟻が共同の住居を造つて、その蟻塚の間を圓天井の廊下で連結してゐる

事實を見たといふ。

私はこの暗示に富んだ蟻の社會生活をもつて、クロボトキンの著書に記された動物界の相互扶助論を代表させると同時に、更に讀者諸君と共に、吾々自身の生活してゐる人類社會の生活を反省したい。私は先きにこの「本能の發達に最も都合の悪い状態の下にある今日」といつた。けれども、この今日の社會においても、吾々自身の生活に顧みて、相互鬭争によつて得るところよりも相互扶助によつて得るところの遙かに多いことが直ぐにわかる。そしてなほ吾々は、いはゆる「生存競争の最も激烈なる今日の社會」のために、どれほど悩まされ、苦しめられてゐるか知らない。

そして私はこの事實の十分な反省に資するために、再び繰返して、この『相互扶助』の名著を切に我が讀書界に推奨したい。

—一九一五・九—

クロボトキンの社會學（上）

—人類史上の傳統—

二人の若い詩人が溺死した。新聞紙の傳へるところによると、その一人が溺れかかつたのを他の一人が救はうとして、二人とも波にさらはれてしまつたのだといふ。

二人の友人である某詩人はこの事實に註釋していふ。

「僕は△△君が××君を助けに行つた心事——はげしい友情の盲動——を、たまたま見知らぬ人の溺死を見て、咄嗟の間に、我れを忘れて救助のために飛びこんで行くといふ、世間によくある話と同じやうにおもふことはできない。二人の間にはもつと大きな力が通つてゐた。その大きな力が或は無意識に△△君を動かさせたかも知れぬ。否、その大きな力が二人のかうした悲惨な運命をつくるところのものであつたかも知れぬ。」

友人の不慮の死を嘆いて、そしてその友人の間に厚い友情を説かうとしたこの一文に對して、冷たい理論の分析を加へるのは、あまりに残酷であるかも知れない。しかし、この某詩人の心の中では、「見知らぬ人の溺死を見て咄嗟の間に我れを忘れて救助のために飛びこんで行くといふ世間によくある話」を「輕卒な」そして「馬鹿々々しい」ことと見てゐるらしく思はれる。またさう見ることが敢えて怪しんでもゐないらしく思はれる。そして、それが「輕卒な」、「馬鹿々々しい」ことでなくなるためには、そこに「はげしい友情の盲動」とか、或は何等かの神秘な「もつと大きな力」とかが介在しなければならぬもののやうに考へてゐるらしく思はれる。

「それや當り前ぢやないか。誰だつてさう思ふよ」多くの人はさういふに違ひない。私だつて、やはりさう思ふ。たとへば、一人の通りがかりの男が橋から落つこちた。すると他のもう一人の通りがかりの男が、それを救はうとしていきなり橋の上から飛びこんだ。そして二人とも溺れ死んだ。といふ事實があるとすると、それを見た人でも、またその話を聞いた人でも、必ずあまりにあつけない一種の喜劇のやうに思ふに違ひない。

しかし次ぎのやうな事實に打つかつたらどうする。これはクロボトキンの『相互扶助論』の中

に擧げてある話だ。

イギリスの水難救助會の船頭は皆な有志者だ。この有志者等は、見ず知らずの他人を助けようとして、いつもひどい目に遭つてゐる。毎年その最も大膽な人々の多くを失つてゐる。

或る冬の日のことである。海峡を吹きまはした恐ろしい雪あらしが、クロボトキンの住まつてゐるケントといふ小村落の平らな砂地の海濱に荒れ狂ふた。オレンジを積んだ小さな漁船がその近くの砂地に乗り上げた。そんな淺いところへは底の平らな救助船でなければ寄りつけない。しかし、こんな暴風の際に船をおろしたところで、災難に遭ふことは殆どきまりきつてゐる。それでも船は乗り出した。幾時間も風と戦つて三度までも波の中に覆つた。一人の男は水の中に溺れこんでしまつた。そして他の男共は岸に打ちあげられた。

翌朝、岸に打ちあげられた男の一人が、全く死んだやうになつて、半ば凍えて雪の中に發見された。クロボトキンはその男に、なぜそんな向ふ見ずなことをしたかと尋ねて見た。するとその答へはかうだつた。

自分でもわからないのです。ただ難破船があるといふので、村の人達が岸邊に立つてゐました。そして皆んな、いま船を出すのは愚だ、この波にどうすることが出来るもんか、といつてゐまし

た。そのうちに、五六人の人が帆柱によち登つて、死物狂ひに相圖をしてゐるのが見えました。皆んなは何んとかしなければならぬと思ひながらも、如何んとも仕方ありません。一時間過ぎても、皆んなはそこに突つ立つたままであつた。やがて、何んだか堪らない、厭やな氣持になつて來ました。突然、騒々しいあらしの中から、叫び聲が聞えました。子供が一人ゐたのです。私達はもう堪らなくなりました。皆んな一緒に、聲をそろへて、行かなくちやならんと叫びました。女共もやはり同じやうに叫びました。女共は、もし私達が行かなかつたら、尤も明日になれば行つたことを馬鹿だといふでせうが、ともかくそのときには卑怯者扱ひしさうな勢ひなんです。私達は一どに船に飛び乗つて漕ぎ出しました。船はひつくり返りました。皆んなは船にかちりついてゐました。悲しいことには、氣の毒なMが船の傍で溺れたのですが、皆んなはそれを助けることも何もできないのです。やがて恐ろしい波が來ました。船はまたひつくり返つて、私達は岸へ打ちあげられてしまひました。難破船の人達は他の船に救はれて、私達の船はここから二三里ばかりのところであつた。そしてその翌日、私は雪の中で發見されました。

ロングダ谷の坑夫等が、崖くづれのした坑の中からその仲間を救ひ出さうとして働いたときに

も、やはりこれと同じ感情に驅られたのであつた。坑の中に埋づもれてゐる仲間を救ひ出すために、三十二メートルも石炭を掘つて行つた。そしてもう三メートルで届かうとしたところで、坑氣に襲はれてしまつた。ランプは消えた。皆んなは止むを得ず戻つて來た。こんな状態のもとで働いてゐては、いつ瓦斯の爆發に倒されるかも知れないのだ。しかし坑の中に埋づもれてゐる仲間等が壁をたたく音が絶えず聞えて來る。皆んなはまだ生きてゐるのだ。救ひを求めてゐるのだ。大勢の坑夫は自ら進んで、再び危険を冒して行つた。そして皆んなが坑の中へ下りて行く間、その女房共は、黙つて涙を流して見てゐたが、誰も引止めようとして聲を出したものはなかつた。

フランスの監獄から遁げ出すことは非常にむづかしい。しかるに一囚人が、一八八四年か八五年かに或るフランスの監獄から遁げ出した。非常線が張られて、それに近所の百姓共までが搜索に出たが、その囚人はうまく一日隠れてゐた。そして翌朝は、小さな村のすぐ傍の、溝の中に隠れてゐた。多分、何か食物と着物とを盗んで、自分の着てゐる囚衣を脱ぎ棄てるつもりであつた。かうして溝の中に隠れてゐる間に、村に火事が起つた。焔の中に包まれてゐる一軒の家から

女が走り出て来た。そして今焼けつつある家の最上階にゐる一人の子供を救つてくれといつて、死物狂ひになつて叫んでゐる。誰も救ひに行くものがない。囚人はその隠れ家から出た。そして火の中に飛びこんで、自分の顔は焼けただけ、着物は燃えながらも、無事な子供を抱いて来てその母親に渡した。もちろん、この囚人は、すぐにその場に居合はした村の巡査につかまつて、監獄へ引かれて行つた。

かうなると、私達はもう、前にいつたやうな事實の簡單さから来るあつけなさや、喜劇のやうな感じはもてない。そして、身を挺して進んで行くその瞬間の心持に共鳴して、或る崇高な感じに打たれる。「はげしい友情の盲動」などといふ特殊なものよりも、もつと偉きな何ものかにふれさせられる。

クロボトキンはこれらの事實に註釋していふ。

ここに人間の心理の奥底があるのだ。人間は他人が救ひを叫ぶのを聞いて、それに應じないでゐることには、とても堪えられないのだ。この感情は數萬數十萬年間の人類の社會生活と數百數千萬年間の前人類の社會生活とに養はれて來たものである。

しからはハイドパークのサペンティン池で、大勢の人の前で溺れ死んだものがあつたのを、誰一人助けようとしなかつたのは、どういふわけだらう。またレジエント公園で、やはり日曜日の大勢の群集の前で、子供が掘削の中に落ちたのを僅かに女中の頓智でニューファンド犬を救ひにやつて助けたのは、どういふわけだらう、といふ人があるかも知れない。しかし、その答へは簡單にすむ。人間はその遺傳的本能と教育との結實である。坑夫や漁夫の間では、皆んなが一緒に仕事をしてゐると、毎日互ひに密接に接觸してゐるとで、同胞心の感情が養はれる。それに周囲の危険は勇氣と大膽とを養ふ。しかるに都會では共通の利害がないので、他人のことには無頓着になる。そして勇氣とか大膽とかいふことは滅多にその機會がないので、なくなつてしまふか、或はその方向を變へてしまふ。かつまた、坑夫や漁夫等の間には鱈山や海上のヒロイズムの傳説が生きてゐる。

二

私は今、最近の慘事たる二詩人の溺死のことを耳にして、このころ翻譯を終つたばかりのまだごく印象の深い、クロボトキンの『相互扶助論』から大きな教訓を思ひ出す。

「相互扶助論」は、各人對總人の戰爭が自然界の全法則であり、そして、非社會的本能や利己的本能が自然界の進化の全根柢であるといふ、いはゆる「苛酷な容赦のない生存競争説」に對する、一大反駁文である。前章において私は、その生物學上の論據を紹介したが、ここでは主として、その人類學的及び社會學的方面についてののみはうと思ふ。

ダーキンとウォレスとが科學界にもたらした進化の一要素としての生存競争論は、吾々の一切の諸現象をただ一個の概論の中に包括させ、そしてその概論が直ちに吾々の哲學的、生物學的、及び社會學的思索の根柢となつてしまつた。多くの種々なる事實、たとへば諸生物の機能と構造とのその周圍に對する適應、生理學的進化、解剖學的進化、及びかつて吾々が多くの種々なる原因をもつて説明して來た知識の進化や道德の發達すらも、すべてみなダーキンによつて一個の總概念の中に合體されてしまつた。即ち吾々は、それらの諸現象をもつて、各々の個體、各々の人種、各々の種、各々の社會が、そのできるかぎりの生の擴張と多趣と充實とに到らんとする發達のための、不斷の努力、周圍の逆境に對する鬭争の結果であると認めてゐる。

尤も最初ダーキン自身は、初發の種における個體的趨異の蓄積についての事實だけを説明する

ために使つたこの原則が、それほどまでの一般性を帯びようとは、自分でも十分には氣づかなかつたらしい。しかしダーキンは、自分が科學界にもたらしたこの生存競争といふ術語がもし狹義にのみ用ひられれば、即ち單なる生存方法のための各個體間の鬭争といふやうに解せられれば、その本當の哲學的意義を失つてしまふことを豫知してゐた。そして、その不朽の著書「種の起源」の眞つ最初に、この術語が「各生物間の相互の繋依をも含む、また各個體の生命を維持することのみならず、さらに子孫を残すことへの成功をも含む、廣い比喩的意味」に解せられなければならぬことを主張した。

なほダーキンはその「人類の進化」の中に、この術語の本來の廣い意味を明かにして、如何にして多くの動物社會に生存方法のための各個體間の鬭争が消滅し、如何にして協力が鬭争に代り、また如何にしてこのことが、その種に生存の最善條件を保障する知力と道德力との發達を來たさしめたかを説いてゐる。そして彼は、かくの如き場合の最適者とは、體力の最も強壯なものでもなく、または性情の最も狡猾なものでもなく、弱者も強者も相俱にその團體の幸福のために相助け相救ふ道を知るものの謂であると暗示してゐる。即ち彼はいふ。「ごく同情深い個體の最大多數を有する團體は、最もよく繁榮し、また最も多くの子孫を育成する。」

しかるに人類の諸關係を論ずる學說には常に起ることであるが、デアキンの學說にもやはり同様のことが起つた。その繼承者等は、デアキン自身の暗示に従つて更にその學說を擴張せんとはせず、かへつて益々それを狹隘なものにしてしまつた。生存競争といふ觀念をできるだけ狭い意味に押しこめてしまつた。彼等は、動物界をもつて、血に渴いた餓鬼のやうな個體間の、不斷の闘争の世界であると考へた。征服されたるものは禍なるかな、といふ闘争の聲を、恰も近世生物學の最後の言葉であるかの如くに、近代のあらゆる文學の中に鳴り響かせた。個人的利益のための「容赦のない闘争」といふことを生物學上の一原則としてまで崇め上げて、この法則に従はないものは相互殺戮の基礎の上に立つこの世界の劣敗者にならなければならぬと叫んだ。

そしてデアキン説の最も權威ある説明者ハクスレエまでが、この説の維持に全力をつくして、遂に原始人にまでその説を及ぼしてゐる。即ちいふ。

「最も弱きもの、最も愚かなるものは死滅し、最も頑強なるもの、最も狡猾なるもの、よし他の點では最善のものでなくとも、ともかくその周囲の事情に對抗するに最もよく適したものは、生き残つた。人生は不斷の自由闘争であつた。そして家族といふ狭い一時的關係以外では、ホツプスのいはゆる各人對總人の戦争が生存の常態であつた。

クロボトキンの「相互扶助論」は、デアキン説のこの迷行の訂正である。クロボトキンは前後二章の「動物の相互扶助」中におよそ次ぎやうに述べてゐる。

——競争してはいけない。競争は常に種に有害である。しかもそれは避ける方法はいくらでもあるのだ。——これが自然界の傾向である。藪からも、森からも、河からも、海からも聞えて來る台言葉である。——團結せよ、相互扶助を實行せよ。それは、最大の安寧と肉體的知識的及び道徳的の生命と進歩との最善の保障を、各人及び總人に與へる最も確實なる方法である。——これが自然の吾々に教へるところである。各綱中の最高位に達した諸動物の行ひ來つたところである。またこれは、人類が、しかも最も原始の人類と雖も行ひ來つたところである。そしてまた、これは人類社會における相互扶助を説いた次の諸章に見るが如く、人類がその今日立つ地位に到達した所以である。——

しかしデアキン説のいはゆる生存競争説は、私達が今日生活してゐるこの社會の、異常にまで發達した非社會的な利己的な、一面の反影ではあるまいか。個人と個人とが互ひに密接な交渉がなく共通の利害がなく、従つて他人のことには無頓着になつた近代生活の反影ではあるまいか。更に詳しくいへば、一種の社會的解體、即ち社會が個人と個人とを結びつける結合の縁でなくな

り、その結糸が一つ一つ断ち切られて、各個人が無縁の或は敵味方の關係となつた、近代經濟生活及び近代政治生活の反影ではあるまいか。

かくしてクロボトキンの『相互扶助論』は、デアキン説の迷行の訂正であると共に、また人類史の迷行を指摘して、その本來の傳統に復歸せしめんとする一大計畫である。

三

從來の多くの學者が説いた如く、愛や同情や犠牲は、吾々の社會的感情もしくは道德感情の發達に確かに莫大な役目を勤めて來た。しかし吾々の社會的感情や道德感情の基礎を單に愛や同情に歸してしまふことはできない。

近所に火事のあるとき、吾々が手桶に水を汲んでその家に駆けつけるのは、隣人しかも往々全く見も知らぬ他人に對する愛や同情からではない。野馬の一群が輪をつくつて狼の襲撃に當るのは、愛や同情からではない。小猫や小羊が相戯れるのも、十數種の若い鳥が秋の野に遊び暮らすのも、愛や同情からではない。またフランスの全土にも當る廣い地域に散在してゐる無數の萌黄鹿が數十組の別々の隊伍を組んで、それがみんな大河を渡るために或る一點に集まるのも、愛や

同情からではない。愛や個人的同情よりも、もつと遙かに廣大な、或る感情からである。極めて長い進化の行程の間に、動物と人類との社會に徐々として發達し來つた、一本能からである。そしてこの本能が、動物や人類に、相互扶助または相互支持の實行によつて得られる力と、社會生活によつて得られる歡樂とを教へたのである。

社會が人類の間に依つてもつて立つ基礎は、愛や同情ではなく、人類共同の意識である。相互扶助の實行によつて得られる力の無意識的承認である。各人の幸福が總人の幸福と密接な關係にあることの無意識的承認である。また各個人をして他の個人の權利と自己の權利とを等しく尊重せしめる、正義もしくは平衡の精神の無意識的承認である。この廣大なかつ必然的な基礎の上にさらに高尚な幾多の道德感情が發達する。

そして、この無意識承認の上に基づく、即ち人間の心理の奥底であり、數萬數十萬年間の人類の社會生活と數百數十萬年間の前人類の社會生活とによつて養はれて來たこの本能の上に基づく、相互扶助的、相互支持的諸制度の社會が、歴史の幾變遷の間に或る寄生物の發生に冒されてその原始的性質を失ひ、かへつて進歩の障礙となることがある。かくしてその社會には、舊制度の弊を矯めて純化さす或は更に進んで同じく相互扶助の原則の上に基づく一層進歩した様式の社

會組織を建設せんとする一派と、相互支持の互助制度を破壊してただ自己の富と權力との増大に努めんとする一派との、二種の叛逆者が現はれる。この二種の叛逆者と現状維持の守舊者との間の、この三角闘争の裡に、歴史の眞の悲劇があるのである。

人類が前人類から承け継いだこの傳統は、まづ地球史上の氷河時代、即ち人類史上の石器時代の蒙昧人の間に見出される。そしてまた、今日なほこの石器時代と同様の状態にとどまつてゐる諸所の現存蒙昧人の生活によつて確證される。

人類は、その「自然的状態」においてすらも、ホツブスやハクスレエの想像したやうな、絶えず相闘はんとしてゐる、そしてたまたま單なる氣まぐれから散漫な集合體を形づくつてゐる、そしてまた、その間にはただ或る種の權力の干渉によつて僅かに間斷のない闘争が防がれてゐるに過ぎないといふやうな、野獸の群ではなかつた。また人類の生活は「小さな一時的の家族」といつたやうな孤立した小家族の形で始まつたのではなかつた。

家族は社會組織の原始的様式ではなく、人類進化の極めて後世に屬する産物である。古人種學のさかのぼり得るかぎりにおいては、最初人類は種族(Tribe)といふ一種の社會をなして生活し

てゐた。この種族の中には、吾々の用ひる意味での家族は、その萌芽をすらも認めることができない。種族全體が、血縁に殆ど頓着なく、夫や妻を共同にしてゐた。尤も、ごく初期の時代から、自由性交に或る制限が加へられてゐたことは確かである。まづ母子の間の、次ぎに母の息子と、母の姉妹、母の孫娘、及び母の叔伯母との性交が禁ぜられた。次に同腹の息子と娘との性交が禁ぜられた。そしてこの種族の中に、性交の制限内にある人々の團體、同じ祖先から出たものと見なされる人々の團體ができた。即ち氏(Gens)もしくは氏族(Clan)の新社會組織ができた。性交はやはり「共同的」であつた。妻または夫はその氏族以外から得なければならなかつた。そしてこの氏の人數があまりにふえて、更に幾つかの氏に分れ、各々の氏はまた數階級に分れるよつになつて、遂にはその或る階級と階級との間のみ性交を許されることとなつた。

家族はこの氏族組織の中にその最初の萌芽を現はしたものである。戰爭中に他の氏族から捕虜とした女は、最初は氏族全體に屬する筈であつたが、後にはその捕獲者が氏族に一定の義務を拂つて自分のものにすることができた。かくして、始めて別々の家族といふものが構成された。そして、種族が氏もしくは氏族の組織となるまでには、極めて徐々たる長日月の進化を要し、さらにそこに一夫多妻制または一夫一婦制の家族が現はれるまでには、その氏もしくは氏族の組織が

再び極めて長い進化を経なければならなかつたのである。

この複雑な婚姻組織が進化の最低級にある人類の間に發達して、しかも輿論の外には何等の權威をも知らない社會の中に維持されたことを考へれば、人間の性質にはこの原始時代においてすら社會的本能が如何に深く根ざしてゐたかといふことがわかる。また、かくの如き組織の下に生活し得、自己の欲求と斷えず衝突する諸規則の下に任意に服従し得る蒙昧人は、確かにホツプスやハクスレエのいふが如き「自己の情慾を制御することを知らない、全く倫理的觀念のない」野獸ではなかつたのだ。そしてまた、この氏族組織が世界のあらゆる人種の裡にしかも幾十萬年の間行はれた普遍性そのものとは、原始人類をもつて單に自己の個人的情慾に従ひ、同種の代表者たる他のすべての人類を敵として、各々自己の暴力と狡猾とを利用する個人の無秩序な集團と見なすことが、如何に甚だしい誤謬であるかを示すものである。

なほ、これを現存の事實に照して氏族組織の下にある諸蒙昧人の生活を見よ。彼等はその唯一生活方法たる狩獵や漁獵の土地、その器具、及びその生産物を氏族の共有にする。食事も一緒にする。彼等の一人に何か物をやると、直ぐに居合はす皆んなにそれを分ける。自分一人では物を食はない。よし自分はどんなに飢ゑてゐても、通りがかりの人を呼んでその食物を分ける。深い

森の中にはいりこんでゐるときに何か物を食はうと思へば、三度大きな聲を出して近くに人がゐるかゐないかを確かめた上で、始めて食ふ。互ひに親切だ。信實だ。子供の間にも争ひといふほどの争ひはない。その日その日の食物を得るに十分なだけ共同に働いて、共同に子供を育て、晩には精いつばいに着飾つて踊りまはる。なんら首長らしい首長もない。

やや進んで、氏族の制限の下に行はれる共同婚姻から脱して、別々の家族的生活をしてゐるものもある。しかし、その家族の縁は屢々破られる。夫も妻も屢々互ひに交換される。これは氏族の各員間の兄弟姉妹の情誼を深くするためである。また稀れに私有財産制度のはいりこんでゐるところもある。しかし彼等は、かくしてその氏族的一致を破壊すべき富の個人的蓄積から生ずる、いろいろな不便を除く獨創的方法をもつてゐる。いい加減の富ができると、その氏族の人々を招いて一大饗宴を張り、その財産の全部を分配する。遂には自分の着てゐる晴着までも脱いで、「自分は今みんなの中の誰よりも貧しい。しかし、おかげで、皆んなの友情をかち得た」などと挨拶する。或はまた、一定の季節に、その年の間に得たすべての物を公開して分配する。

この分配は個人的富の最初の出現と時を同じうする、ごく古い一制度を暗示する。即ちそれは、氏族の各員間の平等が少數者の富によつて攪亂されたときの、それを恢復する一手段であつ

た。そして歴史時代の多くの人種の中に行はれた、土地の定期的再班や、一切の債權に對する定期的棄權は、この舊習慣の遺風であらう。そしてまた、死者と共にその人に個人的に歸したすべての物を埋めるか、もしくははその墓の上で焼くか毀すかするのも、やはり同じ起原から來たものであらう。

蒙昧人は、その個人的行爲を氏族全體にかかはる事件として見るほどに、自己の生活と種族の生活とを同一視してゐる。従つて彼等の動作全體は、禮節の無數の不文律によつて支配されてゐる。そして、この不文律は何事が善であるか悪であるか、即ち何事がその氏族に有益であるか有害であるかといふ、彼等の共同經驗の成果である。蒙昧人はこの不文律に、文明人がその成文律に服従するよりも、より盲目的に服従する。蒙昧人の不文律はその宗教である。その生活習慣そのものである。氏族の觀念は常にその心を離れない。そして、氏族の利益のために自己節制や自己犠牲はその日々の茶飯事である。そして、その不文律のごく小さな一つでも犯せば、女共の嘲笑によつて罰せられる。そしてもし他人を傷つけるか殺すかすれば、齒は齒にて目は目にて償ふといふ、彼等の正義の觀念によつて罰せられる。

四

しかし、氏族の中に別々の家族が出現したことは、かくして確立された一致和合を必然に擾亂するものである。別々の家族は、別々の財産と、別々の富の蓄積とを意味する。また遠い過去の時代に現はれて當時は魔法と混同されてゐた最初の知識の幼芽も、著しく個人的のものとなつて、反種族的に利用される一勢力となつた。即ちそれらの知識は、魔法使ひや雨使ひや祭司などの秘法として、ただその仲間間のみ傳授された。同時にまた、異種族間の戦争と侵寇とが武力的權力者をつくと共に、武人といふ一階級をつくつた。そしてこの武人の仲間もしくは組合が一大勢力を得た。しかし、人類の如何なる時代にも、戦争が生活の正規の状態であつたことはなかつた。武人が互ひに虐殺し合ひ、そして祭司等がこの虐殺を稱揚しつつある間にも、民衆は依然としてその日々の生活をなし、その日々の勞働をつづけてゐたのだ。

蒙昧人は野蠻人となつた。有史前時代は歴史時代となつた。社會組織は過渡的時代に入つた。それにヨーロッパには、いはゆる「野蠻人の大移住」が起つた。從來共同祖先といふことを基礎

としてゐた氏族の團結は、この諸氏族の頻繁な戦争と混淆とのために、その最後の分散の機會を與へられた。かくして彼等は、次ぎの二つの場合のいづれかを取らなければならなくなつた。即ち、或る氏族が散漫な家族の集團に分解して、その中の最も富裕な家族をして、殊にそれが祭司の職と武將の名聲とを、その富力と併せもつてゐる場合には、他の家族の人々の上に至上の權威をふるはせるやうになるか、或はまた、或る新しい原則の土に基づく、或る新しい社會組織を發見するか。

多くの種族はこの分解作用に抵抗する力がなかつた。それらの種族は自ら崩壞して歴史の中から消滅してしまつた。しかし最も強健な諸種族はその結合力を保存しつつ、村落共同體の中に、野蠻人が蒙昧人から承け繼いだ傳統を見出したのである。

共同の努力によつて獲得されかつ保護される共同の土地といふ新觀念が、共同祖先といふ既に衰滅しかけてゐた舊觀念に代つた。この共產村落は家族の獨立を認めた。個人の發意により多くの自由を與へた。家族内の私財の蓄積とその世襲とを認めた。しかし村落共同體は、土地の私有については、その如何なる性質のものをも認めない。土地はすべて種族の共有であつた。そして

その種族内の各村落共同體の間に割當てられた。

蒙昧人の氏族では、共同狩獵、共同漁獵といふことが一般に行はれた。そして野蠻人の村落共同體では共同耕作といふことが一般の規則となつた。しかし、共同耕作は必ずしも共同消費を意味しない。共同で得た食物でも、その一部分を共同使用のために貯藏して、その餘は各家族の間に分配された。尤も共同食事の傳説は大切に保存された。何かの機會を利用しては、村中のものが集まつて一緒に食事をする。

二人の村民の間に起る一切の争ひは村落の事件として取扱はれた。争ひの間に放たれる凌辱的な言葉は村落に對する罪科と見なされた。そして、もしその争ひが格闘や傷害に終るときは、傍に居合はせて仲裁しなかつたものまでも、やはり加害者として取扱はれた。一切の争議は、まづ仲裁人もしくは裁定人の前にもち出されて、それでたいいは終局した。しかしその事件があまり重大で、この方法では決しかねる場合には、村會にもち出される。この村會の決定を實行するには、その決定それ自身の道徳的權威のほかには、何等の權力もなかつた。野蠻人の正義の觀念は、蒙昧人のそれと大差はなかつた。しかし野蠻人は、齒は齒にて目は目にて償ふの復讐制度を、漸次に賠償制度に代へた。

共同村落體はその村會の外には何等の權威をも知らない。この村會は石の座席を設けた特定の建物か或は野天で開かれ、村のすべての男子がその會議に與かる。そしてその決議は全くの満場一致で採決される。即ち、出席者のすべてが或る決定に賛成もしくはそれに納得するまで議論を繼續する。村會は共有地の割當、その他一切の公共事業を處理する。

團結の感情の中に包含される人間の範圍が漸次に擴大された。數個の村落共同體が一種族を成し、數個の種族が一民族 (Stem) を成し、更に數個の民族が一聯合を形づくつた。しかも、それらの團結は頗る緊密なものであつた。また、この村落や種族や民族や聯合などの領土的團結によつては確立され得ない、知識上、政治上、感情上の種々なる目的を達するため、超領土的團結などがあつた。

村落共同體には新しい耕作の方法が發達した。農業は今日なほ多くの國民がそれ以上に出で得ないでゐるほどにまで達した。家内工業も高度に發達した。荒野は征服されて幾筋もの大道路に交切され、その道路には母村から離れ出て幾多の群集があちこちに小部落をつくつた。市場や、商業中心地や、公衆禮拜の場所などが建てられた。

かくしてこの共產村落制度は、次の數世紀間、諸種族内及び諸種族間の密接な結合の縁となつ

て、他方に漸次強大な勢力を得つた巫術者や祭司や職業的武人等の支配的傾向に對抗させたのであつた。そしてその間に野蠻時代から文明時代にはいる、經濟上、知識上、及び道德上の偉大な進歩を遂げしめたのであつた。

五

しかるにこの野蠻人等は、平和を希ひ正義を欲するのあまりに、職業的武人等の隷屬の下に落ちてしまつた。即ち彼等は、領土の安寧と自由とを保つために、その防衛のことに任じた武將たちの、強請と掠奪と強權との下に陥つてしまつた。彼等の多くは、いはゆる封建諸侯の農奴となつた。

かくして野蠻人の自由の最後の痕跡が將に消滅しかつたとき、そしてヨーロッパが幾千幾萬の小權力者の支配の下に落ち、神權政治や專制政治の野蠻的王制が建設されつつあつたとき、民衆は再び前人類からのその傳統を復活させた。都市の集團が、最小の市邑に到るまでが殆ど不思議なほどに一致して、世俗的及び宗教的支配者の軛をふるひ落さうとした。堡壘によつて固められた村落は、領土の城に反抗して起つた。最初は領土の城を輕侮し、やがてはそれを襲撃し、遂

にはそれを破壊した。この運動は此處から彼處へと擴がつてヨーロッパ全地のあらゆる都市に移つて行つた。そして百年ならずして、いはゆる自由都市が現はれた。自由都市は相互支持と自由との新生活に向つて勇敢に突進した。かくして彼等は三百年もしくは四百年の間に、全ヨーロッパを一變させてしまふまでに成功した。自由人の組織する自由結合の精神を表示する、そして爾來かつてその匹敵を見ない、壯麗華美な建築物をもつて、その全土を掩ふた。彼等はまた、吾々の光明も、その一切の功績もまたその將來の約束も、要するに當時のそのの繼續發展に過ぎないほどの、あらゆる技術とあらゆる産業とをその後代に遺した。そしてこの偉大な結果を生ぜしめた諸勢力は、個人的英雄の天才や、巨大な國家の強大な組織や、もしくはその支配者の政治的才幹によるものではなく、村落共同體の中に働いてゐたのと同じ相互支持の民衆の社會的創造力によるものであつた。即ちこの創造力が同業組合 (Guild) といふ新様式によつて中世に復興されたのである。

しかし、私はもう、この中世都市の自由生活を説く暇がない。クロボトキンの『中世都市の相互扶助』は、前後二章にわたつてその詳細を極めてゐる。そしてこの二章は、『相互扶助論』の到

るところに現はれてゐるクロボトキンの獨創の、そしてまた私のいはゆる人類史上の傳統主義の、最も光彩陸離たるものである。私は讀者諸君が、クロボトキン自身についてその状況を詳かにされんことを願ふ。

歴史は近代にはいつた。一切の社會的機能は個人と個人との自由結合による團體の手から奪はれた。また、この自由結合による團體の組織すらも禁ぜられてしまつた。各個人は先きにもいつた如く無縁のもしくは敵味方の關係となつた。蒙昧人の社會では、三度大きな聲で叫んで自分の食物を分けて欲しい人がゐるかゐないかを確めた後に、始めて食事をする。この手續をふまないものは大罪となる。しかし今日では僅かの金を拂ひさへすれば、他人がどんなに餓ゑ渴えてゐようと遠慮なくその傍で食事をすることが出来る。野蠻人の社會では、二人の男が喧嘩して殺し合つてゐる場合に臨んで、黙つてそのいづれかを見殺しにするものは、殺人犯人として裁判された。しかるに今日では見物人はその喧嘩の中へ出しやばる必要はない。それに口出しするしないは巡査の役目である。中世の社會では、同業組合内の一人が病氣になれば、他の一人の組合員はその全力をつくして看護に勤めなければならなかつた。しかるに今日では、隣人が病氣になれば近所の病院の所番地を教へてやるだけで足りる。

しかし、この近代においてすらも、相互扶助と相互支持との潮流は全く枯れてしまつたのではない。今なほ、少くとも民衆の間には、その存在をつづけてゐる。そして近代社會の老衰と共に、漸次に到るところに浸潤しつつある。今日の社會でもなく、中世の自由都市でもなく、野蠻人の村落共同體でもなく、蒙昧人の氏族でもない、しかしそれらのすべてのものから出た、さらに優れたもつと深い、もつと廣い人道的觀念の下に、或る新しい表現を求めつつある。

—一九一七・一〇—

クロポトキンの社會學（下）

—中世ギルドの話—

僅か數年前に、しかも數人の學者の主唱の下に、イギリスに創つた一社會的學說ギルド社會主義は、今やその本國における勞働運動の最も勢力ある新理論とならんとし、遠く我が日本の勞働運動にまでもその深大な影響を及ぼさうとしてゐる。

このギルド社會主義は、他の社會的諸學說との關係からいへば、普通にいふ社會主義（即ち集産主義）と無政府（もしくはサンデイカリズム）との改編融合であるが、それとは關係なしに單にその内容からいへば、その名のギルドが示してゐる通り、中世紀にヨーロッパの全土を蔽うてゐたギルド（同業組合）の復活であり、かつその近世産業的適應である。

中世紀のギルドの觀念は、ギルド社會主義の有力な一主唱者ホブソンのいつてゐる如く、決し

て「新しいものではない。二十年以前には、先見ある社會主義者等の間では、常套語となつてゐた」ものである。しかし、それが近代の産業制度に明確に應用されたのは、恐らくは一九〇六年のエ・アル・オレチ、エ・ゼ・ペンテイ兩氏の論文からであつた。そしてこの問題は、その後の數年間にオレチ氏主宰の『ニュー・エーヂ』(新時代)誌上で盛んに討論されて、その結果遂に今日のギルド社會主義の理論的根柢を形づくるに至つた。

ギルド社會主義の中心思想は、資本主義の弊害を緩和もしくは打破せんとして起きた労働者の單なる互助機關、もしくは戰闘機關に過ぎない今日の労働組合を、直ちに一種のギルド風に改造して、みづからその産業の各工場を經營する産業自治の新團體たらしめんとするにある。

かくしてギルド社會主義は、私有財産制度の上に立つ資本主義の廢滅を期する點において、社會主義即ち集産主義と一致する。ただ集産主義は、生産の機關を國有もしくは公有にすると共に、産業の經營權をも國家の手に收めようとする。ギルド社會主義は、無政府主義もしくはサンデイカリズムと共に、集産主義のこの産業的中央集權に反對する。労働運動は労働者の物質的生活の保障を得ることのみが目的でなく、同時にもしくはそれ以上に、自主自治の自由を欲するものである。資本家の賃銀奴隷から骨折つて國家の賃銀奴隷に移るのは無意味なことである。ギル

ド社會主義は賃銀制度からの労働の完全な解放を主張する。

しかしまたギルド社會主義は、無政府主義やサンデイカリズムがこの産業自治體及びその聯合のそとにはゆる統制機關を認めないのに反し、別に生産以外の諸種の公共事務をつかさどる國家組織の保存を主張する。そしてこの點において、ギルド社會主義は再び集産主義に近づく。

ギルド社會主義のだいたいの説明はこれでつきる。そしてこれらの諸點についての詳細な紹介は既に日本の諸學者によつて方々で發表されてゐる。

しかし、ギルド社會主義がその復活とその近代的適應とを謀つたといふ、中世紀のギルドそのものについては、まだどこにも少しも紹介されてゐない。が、このギルドそのものの研究は、ギルド社會主義の精神を把握する上に缺くべからざるものである。またギルド社會主義のみではなく、労働者の自主自治を主張する一切の社會的學說の、重要な歴史的根據となるべき筈のものである。

クロボトキンの『相互扶助論』によると、社會が人類の間に存立する基礎は人類協同の意識で

ある。相互扶助の實行によつて得られる力の無意識的承認である。各人の幸福が總人の幸福と密接な關係にあることの無意識的承認である。また、各個人をして自己の權利と他の個人の權利とを等しく尊重せしめる、正義もしくは平衡の精神の無意識的承認である。

そしてこの無意識的承認の上に基づく、即ち數萬數十萬年間の人類の社會生活と數百數千萬年間の前人類の社會生活とによつて養はれたこの本能の上に基づく、相互扶助的諸制度の社會が、歴史の幾變遷の間に或る寄生物の發生に冒されてその原始的性質を失ひ、かへつて進歩の障害となることがある。そしてその社會には、舊制度の弊を矯めて純化させ、或は更に進んで眞に相互扶助の原則の上に基づく、一層進歩した様式の社會組織を建設せんとする民衆的創造の新運動が現はれる。

これが人類史の傳統である。有史以前の蒙昧人は共同祖先といふ基礎の上に築かれた、氏族といふ共勞、共産、共婚、共食の相互扶助的社會を形づくつてゐた。しかるにこの氏族の中に個々の家族、個々の財産が發達して、それが氏族の一致和合を必然に擾亂することとなつた。當時は魔法と混同されてゐた最初の知識の幼芽が、祭司の家族の秘法となり、反氏族的に利用される一勢力となつた。そしてまた、異種族間の戦争と侵寇とが武力的權力者をつくと共に、武人とい

ふ一階級が生じ、これまた氏族を脅かす一勢力となつた。

蒙昧人は野蠻人となつた。有史前時代は歴史時代となつた。ヨーロッパにはいはゆる「野蠻人の大移動」が起つた。

從來共同祖先といふことを基礎としてゐた氏族の團結は、この諸氏族の頻繁な移住即ち戦争と混淆とのために、その最後の分散の機會を與へられた。かくして彼等は次ぎの二つの場合のいづれかを取らなければならなくなつた。即ち、その氏族が散漫な家族の集團に分解して、その中の最も富裕な家族をして、殊にそれがその富力に祭司の職と武將の名聲とを併せもつてゐる場合には、他の家族の人々の上に至上の權威をふるはしめるようになるか、或はまた、新しい原則の上に基づく、或る新しい社會組織を發見するか。

多くの氏族はこの分解作用に抵抗する力がなかつた。それらの氏族は自ら崩壊して歴史の上から消え失せた。しかし最も強健な諸氏族は、その舊い結合力を保存しつつ、共産村落といふ新組織を提げてこの試練から出て來た。

共同の努力によつて獲得されかつ保護される共同の土地といふ新觀念が、共同祖先といふ既に

衰滅しかけた舊觀念に代つた。共產村落は家族の獨立を認めた。各家族の發意により多くの自由を與へた。家族内の私財の蓄積とその世襲とを認めた。しかし土地の私有だけはどんな口實の下にも許さなかつた。そしてその種族内の各共產村落の間に割り當てられた。土地は共同に耕作された。

共產村落はその村會のほかには何等の權威をも知らない。村會には村のすべての男子がその會議に集まる。そしてその決議は全くの満場一致で採決される。即ち出席者のすべてが或る決定に賛成し、もしくは納得するまでその議論をつづける。

團結の範圍も擴大された。數個の共產村落が一種族をなし、數個の種族が一民族をなし、さらにこの數個の民族が一聯合を形づくるのだ。また、この村落や種族や民族や聯合などの、領土的團結によつて確立され得ない、知識上、感情上の種々の目的を達するための、超領土的團體もあつた。

共產村落には新しい耕作法が發達した。農業は今日なほ多くの國民がそれ以上に出で得ないでゐるほどにまで發達した。家内工業も高度に發達した。荒野は征服されて、幾筋もの大道路が相交し、その道路には母村から離れ出た幾多の小村落がつくられた。

かくしてこの共產村落制度は、次ぎの數世紀間、諸種族内及び諸種族間内の密接な結合の緣となり、他方に漸次強大な勢力を養ひつゝあつた祭司や武人等の支配的傾向に對抗した。そしてその間に、野蠻時代から文明時代にはいる、經濟上、知識上、及び道德上の偉大な進歩を遂げしめたのであつた。

三

しかるにこの共產村落は、その領土の安寧と自由とを保つために、その防禦に當らしめてゐたかの武人等に、即ちその飼犬に遂に手をかまれた。

武人等は、やうやくその勢力を増すに従つて、かへつて共產村落の安寧と自由とを脅かすに至つた。そしてその強請と強奪との結果は、遂に共產村落の自由民をして、この封建諸侯の農奴と化せしめた。

かくして全ヨーロッパが幾千幾萬の小權力者の支配下に立ち、神權政治や專制政治の野蠻的王政が到るところに建設されんとしたとき、この世俗的及び宗教的支配者の軛をふるひ落さうとする新運動が起つた。保學によつて固められた村落が領主の城に反抗して立つた。この運動はどこ

を中心ともなく、此處から彼處へと擴つて、ヨーロッパ全土のあらゆる都邑に移つて行つた。そして百年ならずして、いはゆる自由都市なるものが隨處に現はれた。

自由都市は相互支持と自由との新生活に向つて勇敢に突進した。そして彼等は、三四百年の間に、全ヨーロッパを一變させてしまふまでに成功した。自由人の組織する自由結合の精神を表示する、そして爾來かつてその匹敵を見ない、壯麗華美な諸建築物をもつて、その全土を掩うた。彼等はまた、吾々の今日の文明もその一切の功績もまたその將來の約束も、要するに當時のそのの繼續發展に過ぎないほどの、あらゆる技術と産業とをその後代に遺した。そしてこの偉大な結果を生ぜしめた諸勢力は、個人的英雄の天才や、國家の強大な組織や才幹によるものではなく、全く相互扶助の民衆的創造によるものであつた。そしてこの自由都市の核心がギルドそのものであつたのだ。

中世都市は、いはゆる封建諸侯の専制からのがれんとした武裝的小共產村落の集團から始まつた。そしてこの集團の中の諸種の商工業の必然の發達分岐に伴つて、從來農業を主とした共產村落の土地共有の原則以外に、更に他の新しい結合様式が必要となつた。ギルド即ち同業組合はこの必要に應じて生れたものである。

あらゆる職業にその同業組合ができた。工人や獵師や農夫などの同業組合ばかりでなく、なほ僧侶や畫家や小學校教師や大學教授の同業組合、宗教劇を演ずるための同業組合、教會堂を建設するための同業組合、或る技術または手工士の秘傳を發達させるための同業組合、特殊の娯樂休養のための同業組合、または乞食の同業組合、淫賣婦の同業組合すらもできた。

とにかく一群の人が共通の目的をもつて集まつてゐるところには、その目的が一つの職業である場合には常時的に、また航海、旅行、建築等の特殊の場合には一時的に、必ずこの同業組合ができた。そして、この後者の場合には、各自は同時にその職業の同業組合に屬してゐるのであるが、その特殊の目的が達せられると共にその一時的同業組合を解散した。

四

當時、船中で組織された一時的の同業組合は、中世のこれらの組合の性質を明かにする好個の一例證である。ハンサの一船舶が港をあとにして最初の半日の航海を終へたとき、船長はすべての船員と旅客とを甲板に集めて、次の如き演説をする。

「吾々はいま神と浪との意のままにある。吾々はすべてその前には平等でなければならぬ。ま

た吾々は暴風と怒濤と海賊と及びその他の種々なる危険に包まれてゐる。従つて吾々は、吾々の航海を無事に果たすためには、厳格な秩序を保たなければならぬ。吾々がよき風とよき成功との祈りを捧げなければならぬのも、また海上法に従つて裁判官の座席につくべき人を指名しなければならぬのも、すべてそのためである。」

船員等は一人の裁判長と四人の陪審員とを選舉する。そしてこの裁判長と陪審員とは、航海を終へてその職を去るに臨んで、全員の前で次の如き演説をする。

「船中起つたことはすべて皆なお互ひに許しあつて、死んでなくなつてしまつたものと見なされなければならぬ。吾々が正しい裁判したことは正義のためであつた。他人に對する一切の敵意を忘れ、かつ吾々の裁判を決して悪意に採らないよう、吾々は諸君に正義の名の下に希ふ。もし損害を蒙つたと思はれる人々があれば、その人は日没前に陸上の裁判長に訴へて、その裁判を乞はれるがいい。」

この單純な物語は、恐らくは何ものよりもよく、中世ギルドの精神を寫したものである。もちろん船中は船長の航海上の權力がある。しかし、その共同の目的の成功のためには、富者も貧者も、船長も水夫も、船内のすべての人は、お互ひに助け合はなければならぬ。お互ひにただの

人間で、平等で、そしてもしその間に何等かの争ひが起れば、皆んなで選舉した裁判官の前でそれを決定する。

この同胞的感情から出る平等と互助と及び獨立裁判との三つの特質は、如何なる目的の下に組織された組合にも必ず現はれてゐる。如何なる場合にも、同一組合の組合員はお互ひに兄弟姉妹として取扱ひ、また實際に兄弟姉妹と呼び合ひ、そして組合の前にはすべて平等であつた。

もし一組合員がその家屋を焼失し、もしくはその船舶を失ひ、またはその廻國旅行の間に災難に遭へば、すべての組合員はこれを助けなければならない。また一組合員が病氣危篤に陥れば、乙人の組合員はその危険の過ぎるまで枕頭に看護しなければならない。そして、もしその病人が死ねば、組合員等はそれを教會と墓地とに送つて式をしなければならぬ。また、もし必要があれば、その子供等を扶助しなければならない。

彼等はまた、或る「有限不動産」(家畜、土地、建築物、禮拜所、資本金)を共有にしてゐた。

組合員は皆な一切の舊い確執を棄てる誓ひをした。そしてお互ひの上に再び争はないといふ義務を負はせることはなく、ただその如何なる紛争も、それをいつまでも根にもつてゐる確執や、または組合員自身の裁判所以外の法廷にもち出すやうな訴訟事件にまで墮落させないことに合意

した。この獨立裁判權は同時に獨立行政權を伴ふもので、中世の自由都市を始め、その都市を形づくる一切の團體の政治的生命であつた。

このギルドの内部生活をもつと詳細に知るために、その代表的組合である工人組合をもつとそばから見て見る。

自由都市生活の最初から手工者の組合は頗る優勢であつた。手工労働は決して劣等な職業ではなかつた。殊に秘傳の手工労働は、全市民に對する敬虔な一義務として見られ、他のあらゆる公職と同じ名譽ある一公職とされてゐた。

中世の工人は、何ものとも知れない買手に賣るために、またどことも知れない市場へ送るために、その生産物をつくるのではない。何よりまづ、その同業組合のために生産する。組合は仲間同士の集まりである。互ひによく知り合つてゐる。その技術も皆なよく知つてゐる。そしてこの仲間同士は一つ一つの生産物に値をつけて、それに現はれてゐる腕前とそれをつくり上げるのに費した労働の量とを評價する。次ぎに組合自身がこの生産物を共同團體たる都市に提出する。都市はその同盟團體たる他の都市へ、その商品の善惡についての責任をもつて賣る。従つて劣悪な

商品をつくらぬといふことが、各工人組合の、またその各組合員の野心であつた。

この工人には、中世都市の最初のころから、親方と徒弟、または親方と職人との區別があつた。しかしそれは、ただ年齢や技術の差違であつて、富や權力の差違ではなかつた。徒弟は七年間の徒弟奉公をすまして、或る技術についての、その知識と才能との證明をしてもらへば、いつでも親方となることができた。

また、中世都市の最初の繁榮時代には、賃銀労働などといふものの餘地はなかつた。孤立した賃銀労働者などといふものは、なほさらなかつた。すべての仕事は、ただ組合のため都市のために行はれた。そして各人がその生産物の價だけを得た。一人の親方のために労働するなどといふのは、よほど後になつてからのことである。しかしその場合ですら、當時の職人の賃銀は、今日最も報酬の多い職人のよりも多かつた。十五世紀ごろの左官や大工や鍛冶工は、アミエン市では、一日に四ソルづつもらつてゐた。四ソルといへば、當時パン四十八斤の價である。またサキソニアでは、建築職人は、その六日分の賃銀で三疋の羊と一足の靴を買ふことができた。

そればかりではない。近代の進歩思想家等が憧憬してゐる多くのことが、既に中世の工人に實現されてゐたのみならず、今日空想として取扱はれてゐる多く思想が當時すでに争ふことのできない現實として取扱はれてゐた。

たとへば、労働は愉快なものでなければならぬ、といふ今日での思想は、當時すでに立派な現實であつた。

また、今日では八時間労働についてなほいろいろと議論があるが、御用石炭鑛山に關するプロシアのフレデリック一世の布告を見ると、坑夫の労働時間は「従前通り」八時間と定め、かつ土曜日の午後の労働を禁じてゐる。なほヤンセンによれば、八時間以上の労働はごく稀れで、八時間以内といふのが普通であつた。イギリスでも、ロヂアスによれば、十五世紀には「労働者は一週四十八時間しが働かなかつた。」そして土曜と水曜とは半休で、土曜の午後は都市の一般の人の入浴時間であり、水曜の午後は職人の入浴時間に當てられてゐた。

労働者大會を開くといふやうなことも、中世工人の一般の習慣であつた。ドイツの或る地方では、あちこちの都市の同業工人が毎年相集まつて、その職業についての種々の問題、たとへば徒弟奉公の年限や、旅奉公の年限や、或は賃銀の額などの問題を論じてゐた。ハンサ同盟の諸都市

は、工人が定期大會を開いて、商品の性質に關するその都市の定規に抵觸しないかぎり、どんな決議をしてもいいといふ權利を公然と認めた。なほこれと同様な多少國際的な労働者大會が各地の諸種の工人によつて催されてゐた。

この工人等の組織する同業組合は、十一二世紀のころには原料を共同購買し、生産物を共同販賣し、従つてその組合員は手工者であると共に、また商人でもあつた。このことは都市の最初以來その巨頭をもたげて來た商人の組合に對抗する大きな力となつた。なほ、やがてこの組合は、或る一つの職業に關係のあるすべての人、即ち原料査査購買人、製造商品販賣人、及び工人の團體となつた。

そしてこれらの同業組合は、都市の役人の統御の下にある單なる市民團體といふやうなものではなかつた。それ自身が立派な一個の自主自治體であつた。

即ち各同業組合の内部の組織については、その組合議會が主權を握り、ただ他の組合との交渉には組合の組合たる都市がその問題に與かつた。

なほ、組合はそれ自身のこの行政權のほか、それ自身の司法權、それ自身の兵力、それ自身の鬭争と名譽と獨立との傳習、他の都市にある同職ギルドとのそれ自身の關係をもつてゐた。一

言にいへば、完全な生活機能があつて始めて生ずる十分な有機的生活をもつてゐた。即ち都市と
いふ一聯合の、獨立した一單位であつたのだ。

—一九一九・二二—

クロポトキンの經濟學

—『田園、工場、職場』—

『パンの略取』は無政府共產主義の建設的方面を書いた名著で、クロポトキンは、この研究が更に現在の文明諸國の經濟的生活についての研究を進めしめたと、その自叙傳に書いてゐる。その研究の結果として採られたのが『田園、工場、職場』(Fields, Factories, and Workshops)である。この書の使命、別の言葉でいへば、この書がどのやうな目的で書かれたものであるかを、まづ紹介しておきたい。

クロポトキンによれば、從來の經濟學者は、皆互違つた方針のもとにその研究をつづけて來た。經濟學の唯一の大きな使命は、人類の欲求と、その欲求を人間の最少限度の精力の消耗で満足する手段方法の研究でなくてはならない。それは決して從來のやうな單純な事實の記載だけの

ものではなく、社會生理學とも名づくべき一つの科學を構成するものであるといふのである。

從來の經濟學者は、この人間の欲求を満足させる手段、即ち「消費」といふ大事な點には非常に冷淡であつた。彼等は必ずまづ最初に「生産」を論じた。「消費」については最後に申譯ばかりに書いて、それもただ「富」がどんな風に少數の競争するその所有者の間に分たれてゐるかといふことを説明するだけで、富の分配に與かることのできない大多數のものについては、ふり向いても見ない。

物をつくり出すといふことは、もちろん大事なことである。しかし、何物をつくり出すにしても、まづそれを必要とする欲求が起つて、その欲求によつてつくり出されるのではないか。人が狩獵をし、耕作をし、道具をつくり、機械を發明するようになったのも、悉く必要から出たものではないか。即ち、人間の欲求が生産を支配するのであつて、その欲求に添はない生産が人間の生活を支配してはならない。が、經濟學者等は、いはゆる生産の法則といふものを一定不變のものにきめてしまつて、萬人の欲求などにはおかまひなしである。彼等が「消費」について答へ得るのは、「生産は萬人の欲求を十分充足し得る」といふことだけである。生産されたものがどういふ風に人々の欲求に添ひつつあるかをさへ、彼等には答へられないのである。

今日の世態は、どの國でも、この人間の極めて切實な食べるだけの欲求すらも満足されずにゐる人間の方が多いくらいなのである。經濟學は、何よりもまづ「人間が勞働によつて自分に要するだけのものを生産し得るかどうか、もしできないとすれば、どういふ障礙でできないのか、或はまた、生産力を増加するにはどうすればいいのか」とか「しかし、どうしても欲求の満足がされないのは、生産が人間の欲求といふ大事な目的を忘れてゐるのではないだらうか。或はその組織が誤つてゐるのではないだらうか」と考へて見なければならぬ筈である。そして、それらの研究と共に、もし生産組織に誤りがある場合には、それをどう改造すれば一切の欲求を満足させることができるかを研究せねばならない。それが今日の經濟學のさし迫つた重大な任務なのである。

もし經濟學の諸章が、この研究的態度で書かれたならば、從來の經濟學は根柢から覆へされてしまふであらう。それは現在制度の下における人間の精力の恐るべき浪費を明白に證據立て、この制度の存するかぎり、人間の欲求は決して充されないことを認めることになる。

かくして觀察點は全く一變する。吾々はこの上、澤山な機械のうしろで、銅鐵板を穿つ穿孔器のうしろで、利益配當を蓄積してある金庫のうしろで、その生産の技手や職工たちが、他人のた

めに献立しながら自分はその饗宴に與かり得ないでゐるのを見るやうではならぬ。また吾々は、かのいはゆる價值や交換の諸法則の如きも、その立脚點から誤つてゐるので、ただ今日の事態の極めて虚偽の説明に過ぎないことを承知せねばならぬ。かつ、生産が社會のすべての欲求に應ずるやうに組織されることになれば、事情は非常に違つて來ることも合點せねばならぬ。

従來の經濟學者の謬見はこれのみに止まらない。彼等はその時々必要以上に多額の品物が生産されること、即ち生産過剰が、經濟上の恐慌をひき起す唯一の原因だといふことを躍起となつて主張してゐるが、事實、世間一般の日用品が少しでも必要以上に生産されてゐるであらうか。

ロシアの農民がヨーロッパに送るのは、その剰餘の小麥ではない。ヨーロッパ・ロシアでよく豊饒な收穫でも、やつとその人民に足りるだけのものしかできない。そして、農民が地代や租税のために小麥を賣るときは、實際に自分に必要なものを割くのが通例である。

イギリスが世界の四隅へ送るのは、その剰餘の石炭ではない。なぜなら、毎年内地の家族の消費のために残るのは、一人について一トンの四分の三にしか當らない。そして幾百萬のイギリス人は、冬になつても火に暖まることができず、少々の野菜を煮るくらゐがやつこのことである。他のどの國よりも多くの輸出をしてゐるイギリスで、無用の贅澤品は別として、一般の用品で、

たぶん社會の必要に越えてゐようかと思はれるのは實際たつた一種、棉だけである。それでさへも、大英帝國の人民の三分の一がひどいボロを着てゐるのを見れば、吾々はその棉花の輸出額も本當に國民の要求にそうた上的ことであるかどうか、と問ひたくなる。

實際に、どこの輸出物でも、決して剰餘の品物ではない。剰餘どころか、たいていはその輸出國の國民のすべてに供給するにさへ不足勝ちなくらゐである。それをどうして輸出してしまふのかといへば、貧乏な勞働者階級がそのやすい賃銀では、自分の手で生産したものでも買ふことができないからである。或は貧乏な農民がその收穫の大部分を、租税だ、初穂だ、地代だ、といつて取り上げられてしまふからである。

生産過剰といふ言葉は、經濟學者の耻知らずな妄言である。過剰と見られてゐる莫大な輸出品は、みな各國の貧乏な階級から剝ぎとつた掠奪品である。生産過剰といふことはあり得ないのである。

クロボトキンは、この従來の經濟學者等の謬見に鋭く眼を注いだ。そして考へた。彼はその自叙傳の中にいつてゐる。

「よく話に出る生産超過といふのは、民衆が今日その相當な生存のために必要だと見なされてゐる

るものすら買へないほどに貧乏だといふことを意味するに過ぎない。あらゆる文明國では、その農工業のいづれの生産も、すべての人の充足を保證するやうに更に大いに増されなければならず、また容易に増すことができるのだと考へた。」

そしてこの研究は、近代の工業に對する偏見をただし、近代農業の可能性を確かめさせた。この工業と近代農業との結合が文明社會に必ず利益ある効果をもたらすであらうといふことを信ずると同時に、頭腦労働と筋肉労働とを同時に行はせるやうにする教育の可能性をも考へた。そしてこの研究と思索の結果は、雑誌『十九世紀』と『フォーラム』誌上に連載した後、一八九八年に單行本として出版されたのである。

二

現在の生産組織を誤つた方向に導いた第一のものは、從來の經濟學者が唱道して來た分業説である。

アダム・スミスによつて、分業がどんなに生産を増し吾々を富ますかについて説かれて以來、すべての工業に分業を生じ、その説明どほりに生産は増した。社會に起つて來た事實の記載と特

權階級の利益の辯明をすることのみしか知らない多くの經濟學者等は、その分業の結果が、特權階級の利益と見たので、それを動かしたい原則と定めて守り立てた。そして少數の眞面目な學者が、分業は決して國民全體を富ますものではなく、ただ富を擁してゐるもののみを一層富ますばかりだ、といふことや、分業によつてほんの小部分の仕事しかできないもの、例へば、ピンの頭だけを一生つくらねばならぬ運命を脊負はされた人間が、馬鹿になり貧乏になるのは當然だと考へ始めたときにでも、彼等は、何んにもそれについてはいはなかつた。クロボトキンは『田園、工場、職場』の最初に、この分業説に反抗してゐる。

分業とはアダム・スミスの標語であつた。そして分業と小分業——不變の小分業——は、人類を多くの階級に分つて押しこみ、丁度古代インドの階級制度のやうに、動かすべからざるものとした。吾々はこれをまづ生産者と消費者に分ける。即ち一方は消費の少い生産者で、他方は生産の少い消費者である。そして、前者の中にはなほ多數の小區分があつて、手工労働者があり知的労働者がある。これははつきりした區別があつて、そのために利害關係も全く相反してゐる。なほ農業労働者があり工場労働者がある。工場労働者中にも、更にまた無數の小區分がある。その小區分はまた極めて微細な點にまで及んで、近代労働者の理想は、すべての者が、手藝上の何ん

の知識もたず、またそのしてゐる仕事に關する一切の觀念を把持することもなくして、終日、或は長い一生の間、常に一つのこの同じ小部分の仕事ばかりをする能があればよいといふのである。そして炭坑の坑夫は幼年から老年に至るまで、始終一定區間の炭車を押し、一人の鑛工は、常に小刀のバネをつくり、或は留針の「十八分の一」を製作してその一生を終るのである。かうして、勞働者は機械のために供へられた奴隸、言葉を換へていへば、一大機械に附隨した無意味な骨と肉である、と。

こんな分業の結果は、人間の仕事に對する愛や、才能や、發明の精神を奪つて、無知、無能、無氣力の、魯鈍な人間ばかりをつくり上げる。こんな原則が不變のものとしたら、なんといふ呪はしい原則であらう。これは、明らかに社會にとつては有害であり、個人にとつてこれほど殘酷なものはなく、人間の生活を墮落に導き、窒息させるのみである。しかも、この原則を唯一のものとして、すべての人——勞働者ですらも——が、その學者等の口眞似をして分業を謳歌する。かくして、クロボトキンのいふところによれば、多くの社會主義者中の科學の誤謬を指摘することを恐れないほど聰明な、知識あり勇氣ある人々でさへも、この分業説を是認する。そして、その人々と革命後の勞働組織を相談すれば、その分業を維持しなければならぬと答へる。一日五

時間以上は働かなくてもいいが、仕事はやはり、針みがきは生涯針を磨かねばならないといふ。革命は、その人間を分業のきびしい束縛から救ひ出すことはできないわけになるのだ。が、個人個人が、そのすべての束縛から自由に解放されるのでなければ、眞の革命ではない。

この、個人に對して一生の仕事をきめる分業は、更に進んで各國の産業を専門的に進歩させることを主張した。即ち、ハンガリイやロシア等は農業國としての運命をもつてゐる、ベルギイはその毛織物を世界の市場に供給すべきである、といふやうに。

しかし、かくすべてを分業で片づけて行くことができるものであらうか。一國の國民は複雑な個人の集團であつて、多種多様な趣味や傾向や能力を含んだものであり、その國民が占めてゐる土地も氣候もそれぞれ異なつてゐる。個人の場合にしてもその通りで、人間の生涯を一つの仕事にしばりつけて、一つの工場とか、一つの鑛山に閉ぢこめて、機械の附屬物、奴隸としておくといふことは、人道の上からいつても許しがたいことである。しかも彼等は、自分の仕事の單調無味なのに飽き、自分のもつてゐる種々な能力を發揮しようとする傾向を漸次著しく見せて來てゐる。これは極めて當然の結果である。

生産力を増すのに、仕事を専門にすることはいい方法に違ひないが、これは全く人間の性質を

無視したやり方で、各個人の趣味に應じ智力に應じて、自由にその能力を發揮させ工夫をこらす方が、より自然な、最善な、生産を増加させる方法である、とクロボトキンは主張する。

しかし、この不都合な分業は實際に、今刻々に勢力を失ひつつある。そして、多くの人間は、その國の農業者をして田園を耕しながら諸種の工業にも従事する、と同時に研究し得た科學的知識を勞働の熟練に結びつけるといふやうな理想に向つて進みつつあるその事實を、クロボトキンは、第一に、分業萬能を謳歌しつつある工業の「分散」が、分業の理想を裏切りつつあることによつて確かめてゐる。「田園、工場、職場」の第一章に、その事實に對する觀察と研究とを書いてゐる。

イギリスは久しい間、大工業國として、またその工業の進歩に伴つて發展した海外貿易の霸王として、世界に誇つてゐた。しかし、幾多の犠牲を拂つて得た工業的生産の獨占權はだんだんに侵されて來た。久しく秘密に保たれて來た工業上の知識も、その企業も、やがて大陸に輸入された。

フランスは、その産業の幼芽をイギリスのために蹂躪されて以來、久しくその工業上の生産をイギリスに仰いでゐたが、十九世紀後半から再び成長をはじめて、今日ではもはやイギリスの覇

權を脱して、輸出額も今はイギリスの半分くらゐに達してゐる。しかし、フランスでは、その製品の販路は貿易によるよりは、主として自國の市場に俟たうとしてゐる。かくて國內の消費はすべて自國製のもので維持しようとする傾向を見せてゐる。

ドイツもまた、普佛戰爭以來、その産業状態は全く一新した。設備は完全にされ、職工や技師は工學的科學的な教育を受けた優良な人々である上に、各専門の學者の助力があつてその發展の状態は目ざましいものがある。

製造業の波動がかうしてヨーロッパの西北部に發すると同時に、東に、南に、その波動は傳へられて、科學が工業に與へ得べきあらゆる力をかり、近世の知識が提供する最新最善の結果を獲得しようとする多くの人々に出遭つた。ドイツは、イギリスが一世紀の間苦心研究した結果を出発點として發達し、ロシアはイギリスやドイツが現在得てゐることを緒にしてその事業の發達を獎勵してゐる。オーストリア、ハンガリー、イタリアも同じやうに内國工業を發達せしめ、イギリスやドイツの各植民地すらも、その本國の資本と知力とを利用して、内國工業を起してゐる。アメリカ合衆國の産業は更に全ヨーロッパを相手にするほど大規模な發達を遂げたのである。クロボトキンは、その各國の産業の發達につき研究した結果を、一々詳細な數字によつて發表して

ある。

要するに、各國の工業はすべて各地に分かれて地球の全部に行はれ、專賣の特權は衰へて、すべての産業が一齊に起つて来る。各國は順次に製造國となつて發達を遂げ、遙かに劣つたやうに見えるアジアにさへ、日本、インド等は新工業國として起つに至つてゐる。アフリカ、オーストラリアなどの各地がその必要に應じて、種々の需要品を自ら製造し得るのも遠い將來のことではないであらう。戦争とかその他偶然のことで一時分散を妨げられることがあるであらうが、しかしこの大勢を阻止し得べきものはないであらう。

かうして工業の分散による内國工業の勃興は、また必然に今までの工業獨占國の貿易を悲境に導く。即ち國外における古い得意を失くするのである。そこで恐慌が来る。一八七〇年から始まつた、最初の恐慌時代以來のイギリスの貿易減退は、明かにこの間の消息を物語るものである。そこでこの恐慌を防ぐために生産品のハケ口を植民地に求める。植民地争奪は、この經濟的事情が第一の因をなしてゐるのである。

しかし、有名な強國は皆な植民地をもつたが、植民地は無限にはない。そしてその植民地も、

イギリスとインド、カナダ、オーストラリア等において見るやうに、母國の生産品を仰ぐどころか、世界の市場に競争しようといふ勢ひになつて来る。そこで、海外貿易といふことは、だんだんに悲境に陥るばかりである。かうなつて來れば、すべての生産品は自國內の供給に充てるより他はないようになる。

恐慌が來ると、生産過剰々々々といふが、先きに紹介したやうに、生産過剰は事實存在しない。莫大な貨物を輸出する國內に、それらのすべての必要を感じながら買ひ得ないでゐる多數の人間がある。

クロボトキンはいふ。もし吾々が海外に需要を得ようとして、その計畫に費す能力をもつて次の諸問題を解決するならば、それはどれほど優れた結果を得るか知れない。即ち、何故イギリスの勞働者とその産業上の技能を諸種の政治的言論中に賞讃されてゐるか。またスコットランドの小作人やアイルランドの百姓が、非常な勤勉さで不毛の沼池を開墾しながら、何故ランカシアの織工や、セフィールドの刃物師や、ノーザンバランドやウエルスの坑夫やのお得意になれないのか。何故リオンの織工等が自分のために絹を織れないばかりでなく、時々彼等はその茅屋で、食物もなくてゐなければならぬか。何故ロシアの百姓は彼等の穀物を賣つて、毎年四ヶ月か六ヶ

月、時としては八月月もの間、彼等のパンを焼くのに一握りの粉の中に草の根や木の皮を混ぜなければならぬのか。何故澤山の小麦や米を産出するインドに屢々飢饉を見なければならぬのかといふことを。

資本家と労働者、財産家と不定の賃銀を得て生きてゐる階級に分れてゐる現在の制度の下にあつては、新しい地上に工業が盛んになることは、慘酷な壓制や、子供の虐待や貧乏をつれて來て、生命の不安を感じしめるものである。そして資本家對労働者の問題は世界の一大問題になる。しかし、これはまた非常に容易な問題だとクロボトキンはいふ。即ち、工業上の生産物や農業上の生産物も、ただ、その生産者等の消費のためにのみ生産されるやうになりさへすればいい。そして、今は正しくその方向に向つて進みつつあるといふのである。

三

マルサスの人口論は、久しい間一般の經濟思想發達を害うたものである。彼は、社會に平等は決してあり得ず、かつ多數の貧窮は自然の法則で、社會組織の如何には關しないと主張して、有産者に科學的論據を與へた。と同時に、貧民階級からは、その進歩發達の希望を奪ひ、その生活

に對する考へを懷疑的に陥らせ、最も進歩した社會改革者をすらも、人口の急激な増殖によつてできる多數の労働者に迫られた場合に、その欲求を、たとへ一時的のものにしても與へ得るかどうかと考へ込ませてしまつた。

科學もまたこれにかぶれた。經濟學も、國民の生産力は急に増加することが不可能だから、非常な勢ひでふえるすべての人間の欲求を、十分に満足することができないといふことを暗に承認して、それを論據にしてゐる。そして、經濟學に關聯するすべての學説が、やはりこの説を信じてゐる。

しかし、工業の驚くべき進歩による生産品の増加はマルサスの説に動搖を來たしたが、農業は土地に制限があるといふ實際の強味から、今にマルサス説の牙城と考へられてゐる。が、それも最近の農業の異常な發達には抗し得ないやうになつて來た。

經濟學者は、土地の面積に限りがあるといふのを唯一の據りどころとして、たとへ生産力が一層増すにしても、三十年毎に二倍する人口に十分な生活必需品を供給することはできないといふが、現在における進歩した農業者は土地のよしあしも眼中におかず、氣候や緯度に頓着せず、一年のうち四回乃至九回の收穫を得なければ満足しない状態にある。

經濟學者や政治學者は、西ヨーロッパ諸國の土地は住民過剰で、絶えず増加しつつある人口を維持する食料品をその土地から生産することができないので、製造品を輸出して食料品を輸入する必要があるのだといふ。しかし、最近の進歩した農法は、西ヨーロッパの土地で、現在の住民に必要な額を遙かに超えるほどに栽培し收穫することができるのである。

イギリスでは、國內で現在生産されてゐる食料品はその住民の三分の一の需要を充すほどしかない。ところが、ジェー・ビー・ロウが毎年『タイムズ』に發表する穀物の收穫高を見ると、一八五三年から六〇年に至る八ヶ年間は、イギリスで消費する小麥の全額の四分の三は殆ど内國産で、外國から輸入するのは僅かに四分の一にも満たなかつた。しかるにその後の二十五年間に輸出入の數字は著しく顛倒して、一八八六年に至る八ヶ年間は、内國産の穀物はやうやく三分の一に過ぎなくなつた。が、これは決して八百萬の人口が増えたことに基づくものではない。一八五三年乃至六〇年に二エーカーの收穫が一人を養ひ得たものが、一八八七年には同じ人口を養ふのに三エーカーの土地を必要としたことは、食物の不足が、人口の増殖ではなく、農業を棄て土地を荒廢させたからであることを明白に語つてゐる。實際に、イギリスの土地の荒廢は見る人の眼に直ちに映るであらう。農業労働者の三分の一は、一八六一年以後に漸次に

都會に出て耕地を打ち棄ててしまつたのである。フランス、ベルギー等の農業状態と比較すると、農作、園藝、牧畜、いづれの方面においても劣つてゐる。クロボトキンはイギリスの農業の研究から得た結論を左の通りに並べてゐる。

一、イギリスの土地が、ただ三十五年以前のやうに耕されるだけで、千七百萬人の代りに、二千二百萬人はその土地からの食物で生活することができ、新たに七十五萬人に職業を與へ、三百萬人に近い人々をイギリスの製造者の顧客とすることができらるであらう。

二、もしイギリスの可耕地全部がベルギーにおけるやうに平均して耕されれば、イギリスは少くとも三千七百萬人のための食物を得て、その上、製造品を割かずに農産物を輸出することができらるであらう。

三、最後に、人口が増加して、三千八百萬人のために食物をつくる必要が生じた場合には、イギリスの最も立派な農場や、ロンバルデイ、フランダスにおいても行はれてゐるやうな最も進歩した方法で耕作し、現在不生産地として棄てられてゐる草原を利用して、フランスの大都市の附近のやうに市場園藝場を利用する。

「これは決して夢想ではない、吾々が現在見る事實から歸納した結論である。これは將來の農業

に對して明かにいひ得るところである」とクロボトキンはいつてゐる。

この「農業の可能性」については、クロボトキンは、あらゆる方面から材料を得て、最近の知識とともに進歩した集約農法の驚くべき可能性を説明してゐる。パリの市場園藝家がなし得てゐるすべてのこと、果樹や蔬菜の高等栽培、農作物と加熱装置の最も進歩したアメリカの集約農法のもたらす結果、イギリスのジアーチ島の生産力、同島の土地使用の集約、灌漑と飼料收穫の増加、メエジョア・ハレットの新種育成、麥作改良の諸方法、温室栽培の一般化、温室における野菜、果物の收穫等、興味ある記述がある。

要するにクロボトキンは、經濟學者等が土地に限度があるといふのを據りどころにして食物の生産率が人口の増加率に及ばないと主張するに對し、最近の進歩して來た農業は、一定面積の收穫高を異常に高め、地質の善悪を無視して自ら土壤をつくり、氣候に順着せず、人力、器械力、化學等の可能性のすべてをつくして生産率を高めつつあるといふ事實の列擧によりその計算によつて、食物生産が遙かに人口増加率をしるぎ得ることを證據立ててゐるのである。

この集約農法が、現在その發達を阻害されるのは、地代や租税や設備や勞力やに拂ふ負擔が重いことが非常にたたつてゐるので、現在制度の下においてはその十分な發達を見るのがむづかし

いが、すべての人間がその消費のために生産に携はるといふやうな社會状態になれば、十分に何んの障碍もなく發達するであらう。また農業に對して費す勞力も、今日吾々が見てゐるやうな奴隸のやうに激しい勞働の必要はない。植物のために、どうしても與へてやらねばならぬ僅かの勞働を少しの時間だけ、すべての人が楽しんでやれることになるであらう。そして、その他の時間に人々は、その好き勝手に、製造業にも従ふであらうし、藝術的な仕事、科學の研究、その他のいろいろな仕事に従ふことができるであらう。

四

農業と工業とはさほど遠く隔たらぬ過去において、立派に結合し提携してゐた時代があつた。その當時、村落は種々の工業をもち、市中にある技術家も農業と親しんだので、都市は一つの工業的村落であつた。中世都市の美術工業は富裕階級の要求を充すものであつたが、農村の製品は數百萬の民衆の需要に應じたものであつた。この現象は今日でもまだ、ロシアやフランスやドイツに残つてゐる。

しかし、現在では動力機關やいろいろな機械の發明によつて築出した大工場によつて、農業と

小工業は絶縁されてしまひ、數百萬の労働者はその土地を棄てて大工場に入つて働いた。そして田園は等閑にされた。世間の人々は、大工場の組織的な仕事の効果にくらまされて、農業の衰退も省みず、大工場によらない工業をけなすことに平氣になつてゐる。しかし、その大工場に吸収され、都市に集中された多數の労働者が、どんな悲惨な事情の下におかれ、どんなひどい生活をしてゐるかを知れば、資本と労働の現在の關係を改革せねばならぬことを痛感せずにはゐられない。クロボトキンは、第一に、工業國に農業を復活させなければならず、その方法を發見するのが急務だと説いてゐる。

この結合が果してできるものかどうか、またこれは工業上の見解から可能性をもつてゐるかどうか。或は望ましいことであるかどうか。更にまた、今日の工業生活に對して、このやうな變化がその事業の完成上必要な要素であることを認めさせるに至るかどうか。クロボトキンはこの答へを得るために、經濟學者等には蔑視され看過されてゐる農村工業、家内工業、職人的工業等の名儀で呼ばれる小工業の研究をした。その結果は一々記載されてゐるが、そしてその間には、大工場と小工場との關係、家内工業の發達存亡、小工業と産業組合等の重要な、そして興味ある問題があるが、詳しくは「田園、工場、職場」について見られたい。

要するにクロボトキンの小工業に對する研究の結果は、村落における工業は大工場の形式によらずに、社會的に組織された生産方法としての形式によつて、専門的知識と機械の助けを借りて農業に結びつけば、人々は幸福な生活を行うことができる。そこで労働者はかういふ風に自分でいくらかの土地をもつてその土地を耕すがいい、といふのである。そしてもちろん、工業を農業と提携させるために、手工時代に後もどりをさすべきだと思ふのは間違ひで、人間の勞力が機械で省略される以上は、十分これに依頼し利用すべきものである。そして如何なる種類の工業も、少くとも製造の或る階段においては、機械力を使つて利益のないものは殆どないといつてもいいくらゐだといふのである。

吾々が農業と工業とに同時に従ふのが、精神上にも肉體上にもいいことだとわかつて、それを阻害するものがある。それは、近世工業の必然的な中央集權である。これは政治上におけるのと同じく或る人々には推奨されてゐる。これはどうしても改革の必要がある。事實上近世の工業には同一の場所に數百數千の労働者を集めて、共同生活をさせる必要があることは吾々も知つてゐる。製鐵業とか鑛業とかの大規模な工業は、村落ではできない。けれども現在の大多數は、二三の異つた工業を同一監督の下においたものや、また或る工場は同じ機械を數百臺そろへたのみ

のものであつたりする。これは大きな紡績工場や、織物工場の大部分に見るところである。そしてこのやうな大工場の持主は市場を支配する利益がある。けれども、それよりも重大な問題は、その一工場に集中した製品の種類に従つてとか、製造の階梯に従つてとか、生産を別々の工場に分けることである。これは少しの不便もなく、不都合もないことで、せひさうされなければならぬのだと、クロボトキンは主張してゐる。即ち工業の各國的分散に伴うて、各國內の各地方にもそれぞれ分散が行はれなくてはならないといふのである。

最後に、クロボトキンはいふ。人々が自己の消費のために生産に従ふ必要から、或はその健康の必要から、新鮮な空氣と手工労働によつて生活の一部を送らうとするところから、必然に農業と工業は結びつけられ、その結果どうしても避け得られない社會的潮流が現在の國際貿易を擾亂し、各國民は自然に自國內の富源によらねばならぬときが來るであらう。そして人類を全般に見ても、各個人から見ても、この變化は幸福を與へるものであるから、必ず起つて來るものと信すべき理由があると。

五

しかしこの變化は、今日の教育組織の修正を含んでゐる。この變化は、その手を働かし、脳髓を活動させて、多方面にその力を利用する人々から成る社會を暗示してゐる。

古くは、人々の手の労働を蔑視するやうな習慣はもたなかつた。有名な科學者はその抽象的な研究が少しも手の働きを妨げるやうなことはなかつた。しかし吾々は、今は全く違つた習慣の下におかれてゐる。吾々の頭腦労働と手工労働とはつきり區別してゐる。労働者はるくに普通の教育も受けず、その仕事に必要な知識すら與へられずに、幼いときから働かされてゐる。學者はその研究にばかり没頭してゐる。そして労働を蔑視し、もしくは無視する。その結果、労働者は全く無知な自動機械になり終せ、學者は抽象論のみをして得意でゐるといふ片輪な現象が見えてゐる。クロボトキンはその切り離された頭腦労働と手工労働とを結びつけることを主張する。そしてすべての少年少女に、彼等が二十歳くらゐまでで學校を出る前に、彼等が労働者として、科學を應用して働くだけの知識を得させ、同時に工業的修練の基礎となるべき一般の知識を與へることに賛成する。彼は古くからモスコイの工藝學校でしてゐる教育を稱賛してゐる。モスコイの工藝學校の教育方針及び方法は、クロボトキンの望むところと全く一致するのである。そしてまた彼は、現在の無駄の多い、徒らに子供から青年時代までも苦しめる教育方法を非難してゐる。

この迂遠な無駄の多い教育方法は、實際教育の方にも及んでゐる。そしてこの教育の結果は、遅鈍な學者や無能な労働者をつくり上げた。そして近世の文明に眞に貢献しこれを建設した人々は、この悪教育の災ひをまぬかれた人々である。

繰り返してこの書物に盛られた内容を略述すれば、人間は數千年の間その食物を生産すること
を重荷にしてゐたが、今日ではもはやその必要はない。吾々は自分で土壤を整へ、作物が必要とする氣候と濕氣とを與へるならば、合理的な耕作法によつて、一家族の一年分の食料を生産するのは、他の仕事の間に挟んでもやれるほどの僅かな時間しか要らない。そしてもし吾々が土地にかへつて、他人とを隔てる壁を築く代りに、その隣人と共同して、既に知り得た經驗を利用し、また適當な科學や技術上の發明をかりるならば、多種類の十分な食料を土から産出し得ることに驚かすにはゐられないであらう。そしてまた吾々は、吾々の子供等が受ける確實な知識の偉大なこと、及びその發達の急激なこと、及びあらゆる自然の法則を獲取し得る能力に驚くべきものがあるであらう。

吾々の農場や庭園の門のあたりに大小の工場を建てるがいい。そして、そこで働くべきだ。もちろん鐵工業のやうなものは別として、文明國民の種々な趣味嗜好を満足させる無數の工場は、

すべて農業と一緒に行はれるところにおかなければならぬ。

奴隷視されてゐるアフリカの野蠻人に屑物や廢物や有害物を賣つて利益を得るやうなことをせず、ヨーロッパの幾百萬の人々の満足されぬ欲求を充たし得べき種類の工場や、製造所を建てるがいい。さうすれば、その需要に對して速かに供給し得る。そして富裕になることは、近頃の工場やうに、その株主や支配人や監督の財産を満たさせるものよりは遙かにまされるものがあるであらう。人々はその仕事に興味をもつて來るであらうし、その子孫は自然の法則や學術上の理論や機械に關する一切に親しんで、その仕事に關する研究をし、その發明力も幼時から發達する機會を與へられるであらう。

吾々が現在から將來へ向つて進むのを妨げるものは、また、少くともその一步を進めることに吾々を妨げるものは、「科學の破産」ではなくして、激しい貪慾——黄金の卵を生む鳥を殺した人間の貪慾——で、次ぎには過去において怯懦心が丁寧に培つておいた吾々のなまけ根性である。

數世紀の間、科學や實際的學問は人間にいつた。金持になるがいい。少くともお前の物質的
必要を満足させるがいい。その満足を得る能力をもつがいい。金持たるべき唯一の方法は自分のために他の人々——奴隷、小作人、日傭人等——を使へ。彼等はお前のために富をつくる。お前は

その富をつくらせる能力を養成しなければならない。人間の探るべき道は一つしかない。農民や職工の位置にあるものは、たとへ經濟學者や論理學者等が理論に未來の改善を稱へても、實際には度々來る凶年やまたは罷工によつて飢ゑに迫るであらう。そして忍耐を破つた瞬間にお前は自分の子供の手に斃されなければならぬ。またもしさうでなければ、お前は軍人になるか、政治機關の一輪となるか、または商工業の支配人となり得るだけの能力を養成しなければならない。と。實際、數世紀の間、このほかに選擇の道はなかつた。そして、今はこの忠告に従つたけれども、これによつて自分も、また子供等も、もしくは一家が悪運から逃れられるだらうといはれた人々も幸福を楽しむことはできなかつた。

しかし近代の知識は、思索力ある人々に、人間が富を得るには他人の口から奪ふ必要はないといふことを悟らせた。そしてなほ一層合理的なことは、すべての人間が自分の手を働かせ自分の知力をつくして、既に發明された、また發明さるべきいろいろな機械の助けによつて、自らその富を生産し得べき社會であることであらう。もし生産がこの方向に向へば、技術も科學もこれに応じて著しい進歩をするであらうし、なほ觀察により研究により實驗によつて、彼等はすべての要求に應じ得るであらう。彼等は欲しいだけの富を生産する時間を節約して、その嗜好に應じて、

自分の時間をつくり得るであらう。彼等は、各人の幸福はその境遇により個性によるものであるから、もとより保證することはできない。しかし少くとも彼等は、人生のいろいろな能力の十分なかつ變化ある活動の中に、過勞の必要のない仕事の中に、他人を苦しめて自分の幸福をはかるやうなことの無い、良心の中に見出さるべき幸福を確保する。

クロポトキンの教育論

— 頭腦労働と筋肉労働の調和 —

現在社會の最大缺陷が、經濟生活の不條理から生れたものであることは、何人も認めるところであらう。しかし、その經濟生活の不條理の最も根本的なものが、生産を増加さす唯一の手段である「分業」を指すときに、それは多くの人の反對に遭ふであらう。

分業の利益がアダム・スミスによつて説明されて以來、この分業説はあらゆる方面にわたつて肯定され、勢力を得て來た。今日ではどんなものでも、分業で造り出されないものはないといつてもいいからである。従つてアダム・スミスのこの分業説が、眞の人間性に對してどれほど殘忍な反逆を敢てしてゐるかについては、誰も一向に考へない。

アダム・スミスはいつた。分業だ、専門だ、専門的に進め。釘の頭とか先きとかばかりを造る

ことを知つてゐる鍛冶屋ができるやうにするがいい。さうすれば、吾々はこの手段によつてもつとつと生産を増すことができる。吾々は富裕になるだらう、と。

なるほど生産は増すに違ひない。それは明白な事實である。そこで、すべての人々がその説に有頂天になつてしまつた。そして、久しい間誰一人として、生涯小さな釘の頭だけを造らねばならぬ運命を背負はされた鍛冶屋には、いつたい分業が何をもたらすかを考へて見たことはなかつた。たいていの人が、やはり「國家の富」に心を奪はれて、たぶんこの鍛冶屋にも幸福が見舞ふに違ひないときめてゐたのである。けれども、事實はさうではない。全く反對に、分業はすべての労働者ができるだけ殘忍に踏みについた。

分業によつて仕事を非常な小部分に切りつめられた労働者は、生涯一つの機械になりおほせて働かねばならない。彼等はその労働によつて才能を殺し、精神を失ひ、雇主の一道具となつて盲従しなければならぬ。しかも、あまり働きすぎる結果、時々是一片のパンをさへも得られないやうな境遇に蹴落されるのである。分業は人間を馬鹿にし、貧乏にするのみである。分業を謳歌するのは、この馬鹿で貧乏な奴隷を使ふことのできる特權階級のみである。

ところが、現在では、その奴隷が少しづつ自分等の生活状態に目覺めて來たといふものの、自

分等の才能を全く融通のきかないものにしてしまふ分業を、やはり特權階級と一緒になつて謳歌してゐる。そして、この貧乏で馬鹿な労働者の味方となつて、特權階級に矢を向けるほどの聰明な、勇氣ある社會主義者中にすら、この特權階級がつくつた迷信を信じてゐる人々がある。

クロボトキンはいふ。彼等聰明な社會主義者と革命後の労働組織の相談をすると、彼等は分業が支持されなければならぬと答へる。即ちもし君が革命以前にピンの先きを磨いてゐたのなら、革命後もやはり君は同じことをしなければならぬと。して見れば、君は一日五時間以上は働かなくてもいいだらう。しかし、君は一生ピンの先きを磨かなければならぬだらう。そして更に他の方面では、文學、美術、科學などの高尚な部門の専門家もあらう。君がピンを磨きに生れたのなら、パスツールは癩の種苗を發明するために生れたのだ。そして革命は、君等を双方とも君のそれぞれの仕事におき去りにするといふのだ。この原則は社會には有害であり、個人にとつては残忍であると同時に、すべてを害する源泉となる怖るべき原則であると。

分業が今日の社會をどういふ状態においてゐるかは、少し注意して見れば直ぐわかる。何事にも専門を誇る現在では、人はみな自分の専門外のことには無能力である。即ち、すべての人が片輪にされてゐる。労働者が工場で機械の番をする。彼等はただ機械を動かすことや、とめるこ

とや、また機械で仕事をすることは知つてゐる。しかし、その精巧な機械が如何にして發明され、改良され、進歩したか、機械が自分等の實際生活にどんな役割を勤めてゐるかなどについては、何も知らない。考へても見なければ、研究しようとしぬ。それは現在の労働者にとつて當然である。なぜなら彼等はそんなことを考へてゐる暇がない。定められた仕事を少しでも多くしなければ生きて行けない。彼等は馬鹿を強制されてゐるのである。そしてこの、自分の専門には一人前だが、他の方面の知識を持たなさ過ぎることは、労働者も資本家も學者も藝術家も皆な同様である。分業の世の中では、すべての事物を満足に観うる人は少い。

筋肉労働に従事するものは満足に考へることが出来ないし、からだを動かさずに考へることのみをしてゐる人は労働者の世界を知らないから理解がない。そこで、この双方とも、結局は専門外のことには片輪であるだけでなく、その専門のことにしても満足なことはできない。

すべての人間をこんな片輪にした許し難い分業を、どうして無條件に肯定し、ありがたがつて遵奉してゐるのであらうか。それは、誤れる基礎の上に發達して來た經濟學のつくり上げた迷信なのである。即ち、個人を無視したところから起つた間違ひなのである。

クロボトキンによると、経済學は從來のやうに、國家を標準にして、その富の總量を計算するものが、決して眞の經濟學ではないといふ。眞の經濟學は、人間の欲求と、人間の精力の最少限度の消耗でそれを満足させる手段との研究でなくてはならないといふ。しかし、現在の資本主義制度の下にあつては、これは非常な異端になる。

どこの國にも夥しい品物がつくり出されてをり、それは、それぞれの顧客によつて多額の金に代る。そして、その生産が増し、それがずんずん金に代つて行けば、經濟學者等は、吾々は富裕になつたといふ。そして益々一生懸命に働く。國民も同様に、吾々の國は金持になつたと歡ぶ。けれども、國は富裕になつても、國民の大部分は依然として飢ゑと寒さにふるえてゐるではないか。一生懸命働いても、休日に満足な着物を着ることもできなければ、愉快に遊ぶ餘裕もない。病氣をしても醫者にかかることもできない。そして生産過剰になると失業が来る。パンの一片もなくなる。

けれども、こんなことをいくら數へ上げてみても、經濟學者は受けつけない。彼等はその生産

高が、國民の消費に供してもまだあり餘るほどの多額に上つてゐるのだといふことを楯にして、そんなに貧乏する筈ないといふ。筈のないことがあるのは心掛けが悪いからだといふ。けれども彼等は、實際にその生産高を國民の頭割りにしても足りないやうな物品を、金にかへたいばかりに外國に輸出してしまふことはいはない。そして、故意に高くなつた必要品を買ふだけの金すらも、勞働者に與へない資本家については何もいはない。

これが今日の經濟學者である。この經濟學者が、その最も大切な生産高を自由に加減するに重寶な、人間を機械の一附屬物にする分業を謳歌し始めたのである。そして「學者」の名が人をくらまして、この不埒な讚歌に雷同を強ひたのである。

しかし、人間がいつまでもこの人間本來の性質を壓死させる暴虐に醒めないでゐる筈はない。分業のうちでも比較的高尙な部門に屬する仕事に従事してゐる人々は、自分等の専門的才能に慢心してゐる。特權階級もそれを許しておく。なぜなら、彼等はそれぞれの専門に従つて特權階級を擁護するからである。けれども、特權階級の利益の直接の犠牲にされて、自分等の手で生産しながら、生産したものを自分選のために用ひることもできず、すべての生活を容赦なく蹂躪されてゐる生産者階級と稱せられる勞働者は、やうやく置かれた地位の不都合に氣づき始めた。そし

て今日では、世界中の労働者がその地位をもつと正しく置きかへるために、特権階級と戦つてゐる。

この労働者と特権階級の戦ひが終つたときに、現在の経済學は根柢から轉覆されるであらう。そしてクロボトキンの経済學が重要な役目をつとめるであらう。即ち、「どうすれば萬人の欲望を、最も少い努力で満足させることができるか」といふことが、眞面目に研究されるであらう。そしてそのとき、吾々はもはや消費者階級とか生産者階級とかにわかれてゐることは許されぬ。すべての人が、必要に応じて労働しなければならぬ。同時に彼は、自分の趣味に應じている。人間の最新の多くの知識が大きな助力をしてくれる。これによつて努力や時間をうんと短縮することができる。労働は今日のやうな不愉快なものでなくなる。そして、すべての組織は個人の自由意志の上に他の意志が妨げるやうなことはないだらう。クロボトキンは將來社會に對する想像をこんな風に書いてゐる。

この將來社會に對するクロボトキンの緻密な、そして合理的な記述は、吾々にも將來の理想的社會を想像させる。しかし私は今ここにそれを紹介するのが目的ではないから、だいたいの筋だ

けに止めておく。私がここに紹介しようとするのは、前述の分業の結果として、生産者階級と消費者階級とが截然と分れたので、従つて頭腦労働と筋肉労働とが切り離されたのを、クロボトキンは何よりもまづ二つのものをすべての人が併せもたなければならぬと主張し、かつこの双方を調和させるには、現在の教育方法を改善しなければならぬと主張してゐる、その點を紹介しておきたいのである。

三

ずつと以前、工業が現在のやうに専門的にならない前には、職工は、科學を會得する機會は今よりももつとなかつたが、工場で種々變化のある仕事に従事してゐたので、その刺激により、必要に應じて多くの知識をもつてゐた。従つて彼等は、その仕事や機械に興味をもち、仕事に不便を感じれば工夫もし、發明もした。しかし分業になつて、仕事が小さく部分的になつてからは、自分の仕事についてまとまつた觀念をもつこともできず、興味も失つた。これは大工業に従事する労働者に特に著しい現象である。最近百年ばかりの間に、産業上に革命を起したほどの數多の機械の發明や改良をしたものは、實に學者でもなければ機械技師でもなく、工場で働いてゐる勞

働者であつた。けれども、大工場ができてからは、働者の仕事は單調になるばかりで何の興味もなく、その結果、彼等は不注意になり、倦怠を感じるようになって、機械の一附屬物として働く以外には何もできなくなつてしまつた。

もちろん、近世の複雑な機械の一舉一動を悉く理解することは、現在の教育程度の働者にはとうてい望めないほど組織的な科學教育が必要だといはれてゐる。そこで多くの學者やその信者達はいふ。科學者は自然の法則を發見しなければならぬ。機械技師はそれを應用しなければならぬ。そして働者は技師によつてつくられた模型を、鋼鐵や木材や石で完成せねばならぬ。それだけでいいのだ。その機械を理解することができなくても、改良することができなくても差支へない。科學や産業の進歩については科學者や技師が注意するであらう、と。

けれども、この考へは誤りである。専門的な、立派な、知識をもつた工學者の發明も、今日は非實際的なものが多く、かつ天才的な個所がないと、クロボトキンはいつてゐる。本當の機械を發明したり改良したりする人は、ただその機械圖や模型だけを知つてゐるものではない。始終機械の傍にゐて、その一舉一動をも合せ知つてゐなければならぬ。その證據に、最近の工業の上に貢獻した少數の人々は、科學者でもなく、機械技師でもなく、働者でもなく、それらの

すべてを合せもつてゐる現制度中の例外者だといつてゐる。即ち、若いときに働者だつたり、或る幸運によつて科學的知識をもつことができた人で、自分のもつてゐる知識と仕事を調和させることのできる人である。そして、この現在では例外的な人間だとされてゐるそれらの人々が、眞に必要な人だといふのである。言葉をかへていへば、現在では働者たちにはとても望むことのできないとされてゐる科學的教育と工場での實際の仕事とがうまく結合され、また知識の綜合が現在の分業に代れば、働者は現在の無力状態からぬけ出すことができるのである。即ち彼は、筋肉働者であると同時に知識的研究にふける頭腦働者でなくてはならないのである。かういふ人々を教育するにはどうすればいいか、といふ問ひに對して、クロボトキンは、幾十年かの間、十五六歳の子供を五六年間に十分な科學的知識をもつた熟練工として社會に送り出してゐるモスコイの工藝學校や、イギリス、アメリカ等において現在行はれてゐる工業教育の例を擧げて、さういふ教育が決してむづかしくないことを説明してゐる。

モスコイ工藝學校では五六年の間に、生徒は、高等數學、物理學、化學、及びこれに關聯した理學上の知識を養ふ。クロボトキンはこのことにつき、かつて彼がベテルスブルグ大學の數學科の學生であつたとき、モスコイの工藝學校の生徒とその知識を比較して見たことがあつたが、一

般の知識では彼の方が優れてゐたが、高等幾何學、特に力學の複雑な問題や、或は熱學、彈力性理論などに高等數學を應用することにおいては、工藝學校の生徒の方が遙かに優つてゐた。そして、大學生は手藝においてはまるで無知なのに引きかへ、工藝學校の生徒は職工の手を少しも借りずに、汽鐘から小さな鋸釘まですべて自分の手でつくり、農業上の機械も學術上の裝置も、その他いろいろ實用的な機械も製造してゐる、とクロボトキンはいつてゐる。

この生徒を教育する方法は、教室で教へた科學をすぐに工場で應用させて、十分に熟練するまで技術を教へるのである。そして、一つの仕事を完全に覺えたときに、次ぎの工場または實驗場に送り、さらにまた正しい順序を踏んで、だんだんに複雑な科學の知識を得ると同時に、それを應用することのできる、こみ入つた緻密な機械を完全につくり上げることが出来るまでに導いて行くのである。

この教授法は、現在各國で實際に行はれてゐる。そしてこれは、クロボトキンによれば、前に述べた科學者、機械技師、労働者といふ階級別の不利不便を感じた結果生れたものだといふのである。

しかし、あくまで深く分業の迷信に惑はされてゐる社會は、この不利不便を、分業の當然の結果

果とは見ようとしな。彼等は、ただこの不便と不利を埋めるために、この工業教育の存在を認めただのである。それは、クロボトキンがそれを必要として論ずるのとはまるで反對の意味において必要とするのである。クロボトキンは分業を廢滅させて、自然の合業に歸るために主張してゐる。彼は労働者を正しい位置に立て、労働を意義あらしめ、興味をもたすために工業教育を主張する。しかし現在それをなしつつある目的は、分業を益々固持するためであり、一般労働者をして一層無知無力たらしめ、同時にまた、機械師、科學者等の新しい協力者を得るためである。そして、目的は何のためであれ、とにかくかうした中間的な特殊な教育が立派に効果を擧げてゐるのは、注目に値ひする。

この教育方針は工業ばかりでなく、農業においても同様である。土地の善惡、氣候の寒暖、空氣の乾濕は、現在では問題ではない。すべては科學の力によつて完全に調和させることができる。集約農法の驚くべき發達は、マルサスの人口論を根柢から覆へてしまふことができた。私どもに必要な土地から得られる食物は、ほんの僅少の勞力の支持で十分に得ることが出来る筈である。そして土地が萬人の手に戻つたときに、現在では高級農業とされてゐる最も進歩した農法によつて、現在の百姓のやつてゐる奴隷のやうなつらい無理な労働によらずに、必要に十分應ず

るだけの食物を容易に得ることができらう。このことは、クロボトキンは特に力を入れて、その著書の中に多くの實例を引用して書いてゐる。「田園、工場、職場」がそれである。

四

ここに、非常に進歩した知識をもち、世人の尊敬を受けてゐる學者があるとする。そして彼は、自分の知識をどうかして多くの人々に役立てようと考へる。そのときこの學者はどういふ風に自分の知識を人々に分つてあらうか。

世間の人々はよく知つてゐる。彼はその知識を大學で講義する。また著述をして、できるだけ多くの人に讀んでもらふ。けれども、もし彼がそれ以上にもつと自分の知識を役立てるには、彼はその知識を、世人の日常生活に關する事物の上に應用しなければならぬ。しかし、さうするには、彼は書齋にばかりひつこんでゐるわけには行かぬ。或る場合には大工と共に自分の考案を表はして見なければならぬこともあり、また機械工場の中で、油じみた職工等と共に働かねばならぬこともあらう。或はまた、自ら土地を耕して百姓仕事をしなければならぬ場合もあらう。かうして實際に自分の手によらなければ、どんな些細な發見もほんとうに役立つものではない。

のである。

しかし、現在こんな奇特な學者があるだらうか。あつたとしても非常に珍らしい。そして、かういふ人を學者はもちろん世間一般の人々も、學者として尊敬することを拒む。もしさういふ人がほんとうに世間の人々の役に立つやうな發明をすれば、世間の人は尊敬を捧げる。けれども、學者は決して彼を尊敬しない。彼等は純學術的な發見なら別であるが——といつてもこれも滅多に認めようとしなが——何か世間の役に立つ發明でもすれば、學問の神聖を世俗の低いレベルに引きおろすものとして輕蔑されるくらゐなものである。そして、あくまで彼を學者でないことにする。

この、書齋と教室とにばかりこびりついてゐる學者達は何をしたであらうか。

近代文明の一特徴である工業は、十七世紀の末から十九世紀の初期にかけて、地球の面目を一轉させるほどの速度で發達して來たのであるが、この發達に貢獻したのは、いはゆる學者ではない。蒸氣機關、汽車、汽船、電話、織物機械、燈臺、寫真機械、その他種々の方面にわたつてなされた發明には、専門の學者で名をつらねてゐるものは殆どないといつていゝからである。辯護士の書記のスマーントン、器械製造人のワット、制動手ステフェンソン、寶石商の店員ファルト

ン、磨機製造人のレンニイ、石工のエルフオード、その他數百人の無名の學校教育を受けたことのない人々が、近代文明の眞の貢獻者なのである。しかるに科學の専門家等は、その研究や實驗の容易にできるいろいろな便宜をもちながら、文明の眞の貢獻者であることができなかつた。これは、彼等が書齋にばかりゐたからである。

クロボトキンは學者についていつてゐる。

科學者等は非難に遇ふとかういふだらう。吾々は自然の法則を發見する、それを應用するのは他の仕事だ、それが分業の簡單さだと。しかしこの口實は眞理ではない。進歩の途はこれと反對で、科學的法則の發見が機械の發明より先きに來たことは百分の一もない。熱力學の理論は蒸氣機關の發明以前にできたものでなく、その發明に追隨してできたものだ。その理論ができる半世紀も、もつと前から、數百人の教授連の眼の前で、幾千の機械が熱を動力に換へてゐた。汽車はレールの上を走つてゐた。すべての文明諸國で、ハンマアや穿孔器が鐵塊を燒けるやうに熱くしてゐた。しかるにそのとき唯一人ドクタア・メチャアが熱力學の理論と、それによつて推斷されるすべてを發表して瀕踏みをした。そして科學者等は彼等の奇妙な熱流動説に頑固にしがみついて、彼を氣狂ひ扱ひした。そしてまた、ジウルの熱當量説を「非科學的」だと書いた。

クロシウスの法則は、諸機關が燃料の熱のすべてを利用することのできることを明かにした後、に發見されたものである。全世界の工業は、既にその動力を熱や光や電氣に換へてゐた。その頃にやつとグロオプの「力の相互作用」といふ理論ができた。吾々に電氣を與へたのは、電氣の理論ではなかつた。電氣の理論については、書物の中に大小となく順序なく書かれたのを知るばかりのときに、電氣が發見されたのだ。

なほ、クロボトキンのいふところによると、發明は科學の應用である場合は少く、かへつてこれによつて新しい學説をつくり出すものだといふことになる。アメリカの橋も、彈力に關する學理の應用ではなく、それよりも先きにつくられたものであり、冶金術、合金法、天氣豫報の最初のこと等々、たいていは理論に先きだつて諸種の發明がなされたことを證據立ててゐる。

この事實は私たちに何を教へるであらうか。それが夢想だといふ人があつてもいい、かりに夢想として考へて見ても、片輪な學者と、片輪な勞働者にわけておいて、時々出て來る例外者を待つて文明の進歩發達を希ふよりも、すべての人が例外者となつて、進歩發達の機會をより多くもつ方がいいではないか。

現在の學者の一番悪いことは、學問を俗衆の及ばないやうな高いところに祭りあげることであ

る。そして自らもまたその奉仕者としてお高くとまつたことである。彼等は彼等の開祖たちのほんとうの偉さを知らない。その人々は少しも労働を輕蔑しなかつた。彼等は自ら手を下して必要な望遠鏡をつくり、レンズを磨き、機械の装置や運轉を自らした。そんなことは決してその人々の學問の研究を妨げはしなかつた。妨げるどころか助けられた。しかし今の學者等はそんなことをしなからぬ。

五

しかしかういふ片輪な人々をつくり上げるのは、その人たちの罪ばかりではない。何よりも現在の教育制度の悪いことを教へねばならぬ。

教育方法も種々専門的に研究され進歩して來たが、根本的な缺陷に向つて大した努力はなされてゐない。

吾々は學校時代の實際の經驗の上から考へて、教へる方でも骨を折り、教へる方も一生懸命になりながら、どうしても十分に生徒に理解されない學科がずぶんある。多くの學生が試験のために苦しめられる學科といへば、まづ數學あるひは語學であるが、私たちはどう考へてもそれが

私たちの能力に添はない程度の、複雑なものであつたのではなく、その教授の方法が間違つてゐたのではないかと考へさせられる。もうほんの少しのところを丁寧に興味をもつて考へるやうに導かれたら、と考へるのである。實際、私たちはあまり教はり過ぎる。先生はあまり説明し過ぎる。それで生徒は考へることに努力しない。

従つて單純な一つの理窟にしても、理解をもつことができない。ただ教師の説明の言葉を覺えてゐるだけである。で、必要がなくなれば直ぐ忘れ、忘れなが最後、再び思ひ出すことはできない。結局、一度も教はらないのと同じ結果になる。これは教授の方法が悪いのと、教師自身が生徒をよく導くほどに事柄に對する觀念をもたず、理解をもたないからである。

クロボトキンはいつてゐる。學校ではたいてい無駄な教へ方ばかり繰り返してゐる。幾何などは單に暗記させようとするので、子供はみな記憶した定理を應用することができない。そこでそれを専門にしない者は、十中の八九まで、學校を出て二年もすれば、すつかり忘れてしまふ。ほんの初歩の定理を解することもできない。どう補綴を引いていいかも忘れる。もちろん彼等は自分ひとり考へて證明をすることなどは教はらないから、それができよう筈もない。だから、彼等は物理を研究するにしても、幾何を應用するのに困難するから、なかなか進歩しない。しか

し、これによれば進歩が早くて、一度覚えたら幾何はいつまでも忘れないといふ一つの方法がある。それは定理に解釋をつけなくて、それを問題として生徒自身にその解釋をつけさすように導くことである。かうして、定規とコンパスで豫備練習をすれば、教師がほんの少し暗示を與へた後で、與へられた角と相等しい角を描いたり、またはそれが相等しいことを證明したりすることが、二十歳前後の子供にできないといふことはない。かうして初歩の規則を教へて、だんだんに組織的にその問題を解かせ、複雑なものに移らせる。唯一の困難はただ最初の問題を生徒に解かすことで、それはかうして彼自身のもつ推理に頼らせばいい。

また幾何學の理論は實物のやうにその觀念を捕へるのがむづかしい。だから生徒に、紙の上で問題を解かせたら直ぐに、運動場で、棒や糸やその實際の形を見せてそれを解かせたり、また細工場でその知識を應用させねばならない。幾何學上の線はかうしてのみ子供の頭に會得できるのである。かうしたときに生徒は、教師がその尋ねる問題を定規やコンパスで彼等に解かせることが、いい加減な嘘でないことを覺るであらう。彼等はかうしてのみ幾何學を知るのである。「眼と手を通して頭へ」——これが教授法の時間經濟の原則である。

しかし、實際にかういふ風にして教へられてゐる生徒がどれほどあるであらうか。たいてい

は、ただ無暗と頭の中へばかり詰めこまれる。そして、それで子供の研究心はへし折られてしまふ。彼の頭は獨立して考へる努力をすることを知らない。かういふ教育法はクロボトキンにいはせると「吾々の心に服從的な墮性をもたせる、鸚鵡のやうに繰り返へしばかりやらせる、皮相な教育」である。これによつて教育され、ただ腸詰をつくるやうに詰めこまれた知識が何の役に立つだらう。義務教育にしても大部分の人には大して役立つてはゐない。大部分の時間がそれによつて空費されたといつても過言ではない。

これはまた現在行はれてゐる實際の仕事の教育の上にも同じことである。工業教育にしろ、農業教育にしろ、その仕事に完全な理解をもたせることがまづ第一のことではなくてはならぬ。労働も知識の應用も、すべてその仕事に對する完全な理解がなくてはならぬ。

教育はまづ現在の、無茶苦茶に堆積した知識を教えこむことをよして、生徒をもつと知識から解放することに努めなければならぬ。彼等を彼等自身の發意によつて、自由に獨立した研究をさせるようにしなければならぬ。彼等に興味のないことに努力させずに、彼等の興味を呼び起すことにまづ努めなければならぬ。その興味を逐ふ努力をするように導かねばならぬ。そして、その知識が必ず形づくつてゐるところの、日常生活に現はれたものと常に結びつけておかねばなら

ぬ。それが教育の本當の仕事だと思ふ。現在、教育を受けることのできる境遇にある人達ばかりでなく、もしもすべての人がかういふ教育を受けることができたなら、その人達はどんな社會を形づくるだらうといふことは、誰にも想像される事柄であらう。

すべての知識から遠ざかつて、ただ機械の附屬物として終日他人のために働く人々と、何もせず他人の分までも頭の中に詰めこむ人や、他人のことを考へてやる特權をもつてゐる人々とに分つことは、實際、人間に對する一大反逆である。

どんな知識でも、吾々の實際生活と結びつかないで他にどんな存在の理由が成り立つであらうか。また自分が終日なにをしてゐるかも満足に考へることができず、人間が機械のやうに働いてばかりゐて一生を過ごすことが、何の意味をもつであらうか。

吾々は皆な、自分自身の生活の必要のために必要な時間だけは自分で働き、また自分の好みに従つて學問の研究や、藝術や、その他いろんなことに他の時間を使ふことができたなら、どんなに愉快であらう。私たちは皆んな一つの「ねがひ」で結びついて、同じ道を扶けあつて進むことができるであらう。同じ知識の探求の途で、かくし合つたり妨げ合つたりして進歩をおくらすこともないだらうし、自分達の口に贅澤な食物を運ぶために他人を虐げることもなくするであらう。

そして、さういふことを考へて見ることもできないなどといふ非道な人があるであらうか。誰も彼も幸福な夢を見ることを常に楽しんでゐる人間の中に。